戦いの果てに　ルーフェイア・シリーズ

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦いの果てに　ルーフェイア・シリーズ

【Ｎコード】
Ｎ４４９１Ｄ

【作者名】
こっこ

【あらすじ】
突然包囲された学院。彼らは生き残れるのか？・・・泣きながら戦う少女の行く末は？・・・心優しい美少女が繰り広げる、異色のバトル学園ファンタジー◇◇反王道、安易なご都合展開ゼロ。「無情という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ◇◇１８話より戦闘が激化します。グロテスクにならないよう留意していますが、ご注意ください◇◇携帯はＰＣ版より、改行が多いです◇◇元７桁サイト連載の、第一作改訂版です

Ｅｐｉｓｏｄｅ：０１　日常

◇まえがき◇
初連載時よりずっと変わらず支えてくれ、協力を頂いた、某サイトの所長・ヴァルに感謝します。
◇◇◇◇

＞Ｒｕｆｅｉｒ
「もうヤだ！　この光景、見飽きちゃった！」
「そんなこと言ったって、しょうがないだろ？」
「そうよ。勝手に出るわけにいかないもん」

「あの日」の前日、あたしはクラスの三人と校庭のベンチを陣取って、日向ぼっこしていた。

ここはシエラ学院本校。数あるＭｅＳ――Ｍｅｒｃｅｎａｒｙ Ｓｃｈｏｏｌの略――の中では、いちばん有名なところだ。あとその成り立ちの関係で、親に見離されたり死別した子を数多く受け入れてることでも有名だった。

この学院へ来てから、そろそろ四年になる。
その前はあたしは、戦場でひたすら戦って育った。当然学校へ行くこともなければ友達もなくて、だからこの親友と言える三人はとても大切だった。

不満げに騒いでいたのがミル。ちゃんとした名前はミルドレッドだけど、そう呼ぶ人はまずいない。きれいな水色の瞳をしていて、

ちょっとオレンジがかったふわふわの髪が、雰囲気によく合っていた。

なだめていたのがシーモアとナティエス。なんでもこの二人は、学院へ来る前から親友どうしだったのだそう。

シーモアはあたしたち四人のリーダー格だ。鋭い翠の瞳に、炎のような色の髪。姐御肌だし言葉遣いもぞんざい、行動も豪快だ。

一方でナティエスの方は、ぱっと見た感じは大人しそうだ。おだやかな鳶色の瞳に、ほんの少しウェーブがかかったダークブラウンの髪。それをいつも髪留めで留めている。

でもナティエス、シーモアと親友なだけあって、じつはけっこうやることが過激だ。外見に騙されようものなら、大変なことになる。

隣ではまだ、ミルが騒ぎつづけていた。

「だからだからだから、シゲキテキってのないのかな！」

「あんただけだよ、ンなこと思うのは」

けどミルの言うとおり、このところは穏やかだ。

いろんな理由が重なって学院の外へ出られなくなったことを除けば、ただただ海をながめながら、平穏な毎日だった。

「あーもう、ホントつまんなぁい！」

耳鳴りがしそうな声がイヤだったのか、シーモアがミルの頭を軽くはたいた。

「黙りなって。　ったく三才児じゃないんだから」

「けど、つまんないのはたしかだよね。ここのとこ、町とかにも行

かせてもらえないんだもん」
ナティエスも不満そうだ。
――仕方ない、とは思うけど。
最近はどうも情勢が不穏だ。このユリアス国の首都イグニールはテロ情報で大騒ぎになったし、第二の都市で学院からいちばん近いケンディクも、どこかの勢力が潜入したとかで戒厳令が敷かれてる。
こんな状態だから、あたしたち学院の生徒が敷地外へ出るのも、けっこう前から禁止されていた。
よそのＭｅＳならそれでも脱走とかがあるだろうけど、この学院は小さな群島を丸ごと使って作られてるから、町への連絡船が止められるとどうしようもない。
さらにここ数日は、校舎と寮のある本島以外への出入りも禁止されて、ほとんど缶詰だった。

Episode：02

「そういえばさ、おととい大きな船来たじゃないか。あれはなんだったんだかね？」
「ユポネ族……来たみたい」
「ルーフェイア、あんたよくそんなこと知ってるね」

シーモアの不思議そうな顔。

「とゆかさ、ユポネ族ってなに？」
「えっと……物を作るのがすごく上手な一族、かな……」
「なんだそりゃ？　まぁいいけどさ」

なにがいいのか分からないけど、いいことになったみたいだ。

「でもさ、あの船なんかちょっと、変わってたよね」
「言えてる～」

たあいない会話。

「けどやっぱりヒマかも」
「ひまひまひまひま、すっっっごいひまっ！」

あ、ミルが壊れた。

「連呼するんじゃないよ、よけいヒマになる」
そういうもんだろうか？　よく「余計おなかが空く」とか「よけい寒くなる」とは言うけど。

「ひっまーっ！！　誰かなんとかしてーーっ！」
「――明日とか、外出禁止……解けるかも」
「え、ホント？」

いっせいに三人があたしを見て、つい言ってしまったことに気づいた。

「マジかい？」
「――うん、間違いないと、思う」
期待しているシーモアたちに、一瞬考えてからそう答える。明日の話だし、シーモアたちが相手なら、必死に隠さなくてもだいじょうぶだと思ったからだ。

「でもルーフェ、どこでそんなこと聞いたの？」
ナティエスが不思議そうに訊いてくる。
「お昼ご飯の時、ロア先輩といっしょで……その時、聞いたの」
「あ、なるほど。ルーフェイアはロア先輩に可愛がられてたっけね」
ロア先輩はあたしにとって数少ない、学内で頼れる先輩の一人だった。この学院へ来た時に同室になった縁で、ずっと可愛がってもらっている。

今この学院は、深刻な人手不足だ。このあいだ学院内で対立があって、副学院長が出てってしまったのだけど、そのとき教官や他のスタッフもごっそり連れて行ってしまった。何かお金がからんでたって噂だ。
ともかくそのせいで教官の数は足りないし、運営する人も足りなくて、上級生がその穴埋めで奔走している。だから予定も連絡系統もメチャクチャで、「〇月×日に何々」というのが、なかなか分からなかった。
そんな中、ロア先輩はこの学院の運営を手伝っていて、物資の調

達とかこまごましたことを引きうけている。だから最新の状況も知っていたのだ。

「そしたら、少し買い物とかできるかな？」
ナティエスが嬉しそうだ。
「行く行く、ぜ～ったい行くぅ！」
「わかったから黙りなって」
シーモアがミルの頭を小突いた。

いつもの光景。
なんとなく可笑しくなる。

「そういえばさぁ、シルファ先輩てば『あこがれの先輩ベスト三』に選ばれたんだってね～」

こんども唐突に、ミルが妙なことを言い出した。
「なに、それ？」
「……ルーフェイア、ホントに知らないの？」
いかにも驚いたという顔で、ミルが訊いてくる。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：０３

「だから、なに、それ？」
「だから、『あこがれの先輩ベスト三』なの！　シルファ先輩は！」
「いつ……決まったの？」

そんなランキングがあったなんて初耳だ。
――たしかにシルファ先輩には、あたしも憧れるけれど。
あたしを見て、三人が爆笑する。

「この調子じゃルーフェきっと、自分が『学院の美少女ベスト三』に入ってるのも知らないよね」
「知らないだろうね」
「ルーフェイアらし～♪」

勝手に盛りあがられてしまった。

「そんな……変なランキングまで、あるの？」
「これだよ。自覚ないんだから」

自覚も何も、そんなおかしなランキング自体聞いたことがない。

「どこかに、張り紙……してあった？」
そう言うとまた爆笑された。

「あんたね、そのランキングでトップだったんだよ」
「え？」

これも初耳だ。

それにしてもあたしなんて小柄で華奢で、どこがいいんだろう？。
ただみんなの感想は違うみたいだった。

「ルーフェイア、とびっきりの美少女だもんね～♪」
「どこが……？」
「どこがって、全部！」

半分ヤケになったような口調で、ナティエスが断言する。

「けどこの髪、前線で目立つし……あたし小柄だから、バトルで不利だし……」

小柄ゆえのパワー不足も気に入らないけど、髪なんて目に飛び込む金色で、「見つけてください」と言うようなものだ。
ひとつだけ海色の瞳は気に入ってるけど、戦場じゃ意味がない。
瞳の色なんて関係なくて、どれだけ戦えるかですべて決まる

「あ～もう！　どうしてこうズレてんのかな～」
「まぁ、あんたらしいけどさ」

よく分からないけれど、ひどいことを言われたような気がした。
世の中ってやっぱり謎だと思いながら、なんとなく辺りを見渡す。

「――あ」
視界に見慣れた姿が入った。

「うん？　ルーフェイアってばどしたの？　あ～♪」
ミルが悪戯っぽい調子になる。

「あ、やだ、ミル止めて。あの先輩たち、そういうのは……」

でも遅かった。
耳に突き刺さるような声が響く。
「せんぱ～い、タシュア先輩～、シルファ先輩～、こんにちは～～！！」
校庭へ出て来た男女の先輩が、大声に振り向いた。あたしがこの学院へ来て、いちばんお世話になっている先輩たちだ。
男性の方はタシュア先輩。長身で整った顔立ちで、縁のない眼鏡をかけてる。
瞳は紅で髪は銀。それを長く伸ばして三つ編みにして、しかも前髪をひと房紅く染めてるから、目立つなんてもんじゃない。
ただこの先輩、見た目より「毒舌」で有名だった。言葉遣いはとても丁寧だけど、その内容がすごく苛烈だ。
――本当は優しいんだけどな。
けどあたしがこう言うと、大抵の人は固まってしまう。

Episode：04

女性のほうは、さっき話題にあがったシルファ先輩。
けっこう長身で、かなり背丈のあるタシュア先輩と並んでもバランスがとれている。瞳は紫水晶のような澄んだ色、背中まであるつややかな黒の髪をいつもストレートにおろしていて、落ちついた雰囲気だった。
あとどういうわけか、しょっちゅう女子から告白されるらしい。

ちなみにタシュア先輩が言うには「同格のパートナー」らしいけれど、生徒の間では「タシュア先輩の恋人」で通っている。
それと意外なことにシルファ先輩、男子の間では「無口で愛想がないから可愛げがない」と言われてるそうだ。イマドがそう教えてくれた。
――たしかにあんまりおしゃべりじゃないけど、とっても面倒見がよくて、お姉さんみたいな感じなのに。
男子の考える事はよく分からない。

「先輩、せんぱぁ～い！　こっちどうですか～～♪」
気が付くとミル、ぶんぶん手を振っている。

「やれやれ……そんなに大きな声を出さずとも聞こえますよ。もう少し周囲の迷惑を考えなさい」

呆れた調子でタシュア先輩が言った。でもちゃんとこっちへ来てくれたあたり、今日はいいことでもあったのかもしれない。
――それにしても周囲の迷惑って、あたしたちしかいないような？
もっともそれ以前に、この調子でタシュア先輩に声をかけるミルのほうが、何倍もすごいのだけど。

「それでいったい、何の用なのですか？」
いつもどおりのどこか冷たい声で、タシュア先輩が続けた。
そして騒ぎの主のミルは。
「日向ぼっこしません？」
「……」
思わずみんなで絶句する。タシュア先輩をこういう理由で誘った人は、きっと彼女が初めてのはずだ。
でも次は、もっと予想外だった。
「そうですね。大事の前の平安なれ、とも言いますからね。たまにはゆっくりするのもいいでしょう」
絶対なにか毒舌が返ってくると思ったのに、タシュア先輩はそう言って、シルファ先輩と並んでベンチへ腰を下ろす。
見やるとシーモアもナティエスも見事なくらいに石化していて、平気なのはミルひとりだ。
「ですよね～。ゆっくりしないと、腐っちゃうもん♪」
ゆっくりしすぎたほうが、腐る気がするんだけど……。
なんかめまいがしてくる。
けど本当に、穏やかな昼下がりだった。
優しい陽光。
流れる潮風。
――ずっとこうしていたいな。
みんなも同じことを思ってるんだろうか？

誰も――あのミルでさえ――何も言わずに、ただ座るだけだった。

「そうだ！　なんか食ーべよっと♪」

前言撤回。

「あんたねぇ、どうしてそうむやみやたらと騒ぎたてんのさ」

シーモアがまたミルの頭を小突く。

Episode：05

「え～、だってだって、食べたいんだもん☆」
「たしかに、おなかが空きましたかね？」
「え？」

タシュア先輩が会話に割りこんできて、またみんなで呆然とした。
――そろそろおやつの時間と言えば、そうなんだけど。

「やぁん先輩、話わかるぅ。あ、これどーぞ♪」
半分意味不明のことを言いながら、ミルがどこからかクッキーを取り出して差し出した。

「おや、ありがとうございます」
しかも先輩も、しっかり手を出している。
――どうなっちゃってるんだろう？
なんだか夢でも見ているみたいだ。
和やかと言えば和やかだけど、ちょっといつもからだと考えつかない光景だった。

「私も……何か作るか」
それまで黙っていたシルファ先輩が、ぼそりと言う。
「わぁ、ほんとですか？」
ナティエスが聞きつけて、嬉しそうな声をあげた。
じつはシルファ先輩、お菓子をつくるのがとても上手だ。特にケーキなんて言うと、下手な店で買ってくるよりもずっと美味しい。

「ああ。ただ……最近ちょっと、材料が手に入らないから……」
「あ！」

この言葉に大事なことを思い出す。

「先輩、材料あるんです」

「本当か？」

シルファ先輩が驚いた。

「はい。ただその……条件付き、なんですけど」

「条件？」

条件というのは、ロア先輩へのおすそわけだ。

教官の半数以上がいなくなってからは、物資の調達もけっこう大変な問題だった。教官が業者と癒着してたせいで他にルートがないうえ、最寄りのケンディクはあのとおり戒厳令だ。

だから最低限の食料と生活用品を確保するのが精一杯で、とても嗜好品にまで手が回らないらしい。

でもロア先輩、あたしが前に言ってたのを覚えててくれて、たまたま余った小麦粉なんかを取っといてくれたのだ。

「で、『あたしにも食べさせてね』って言われたんです」

「なるほど……」

「裏取引にしか思えませんがね」

しばらくぶりに、タシュア先輩が毒舌になった。

もっともタシュア先輩とロア先輩が犬猿の仲（正確に言うとロア先輩が一方的に嫌ってる）なのはけっこう知られてるから、そうなっても当然かもしれない。

「ねぇねぇ、そしたらさ、みんなでつくろーよ♪」

ミルが妙なことを言い出す。

「え、そんなことしたら……先輩に迷惑……」
「私は別に構わないが。
――また、みんなで作るか？」
「やたっ！！」

「けど、本当に……いいんですか？」
ミルは跳び上がって喜んでるけど、ちょっと心配になってそう尋ねた。
シルファ先輩はもう手慣れてるから、あたしたちが下手に手伝ったりしたら、やっぱり邪魔じゃないだろうか。

「大丈夫だ。それに一緒にやれば、たくさん作れるだろう？」
「でも……」
迷惑な気がして、行く気になれない。

「気にしなくていい。ルーフェイアもだいぶ、上手くなっているんだし」
言いながらシルファ先輩が立ち上がる。
「だいいち急いで作らないと、夜になってしまうぞ？」
「あ……」

Episode：06

先輩が作っているのを見て初めて知ったのだけれど、ケーキって出来上がるまでに意外と時間がかかる。
シーモアやナティエス、ミルも立ち上がった。

「あたしこないだ先輩にもらったレシピ、持ってこようかな？」
「本家本元がいるんだ。聞いた方が早いと思うけどね？」
「あ、そっか」
指摘されたナティエスが苦笑する。

「よぉし、いっぱいつくるぞ～」
ミルがやけに張り切る。

「作るのでしたら早くしてもらえませんかね？　夕食代わりというのは願い下げです」
タシュア先輩もしっかり食べる気でいるらしい。

「ほらルーフェ、行こ？」
「うん」
あたしたちみんなで、調理室へ向かった。

そして翌日――つまり、「あの日」。
あたしはなにか不安でしょうがなかった。
どう表現したらいいんだろう？　あの戦場にいた頃よく感じていた感覚が、嫌な重さで周囲に澱んでる感じだ。
――何かが来る。

そうその感覚が告げている。
同室のナティエスは今日は何かの当番だとかで、朝からいない。
だから部屋にひとり残ったまま、あたしはこの感覚をずっともてあましていた。

不安の正体がわからないまま、なんとなく戦闘用の服を着込む。
見た目は薄手のボディースーツとショートパンツの組み合わせだ。
どちらも特殊素材で作られていて、ナイフ程度なら受けつけない。
それに防御の魔法も一応付与されているから、これだけでそれなりの守りになる。
これを専用のアンダーの上に重ね着した。

さらにいつもの靴とハイソックスをやめて、戦闘用に加工されているロングブーツに履き替える。
なのにそれでも落ちつかない。
これはそうとうのものが来るのかもしれない。　そう思うとよけいに嫌な感じだった。
戦闘服の上に今度は制服を着て、とりあえず寮の部屋を出る。

――タシュア先輩を探そう。

あの先輩はあたしと同じで戦場で育っている。　だからもしこの感覚が本物なら、あの先輩も同じことを感じているはずだ。
太刀――いつも携帯している半端なものではなく、銘入り――を手に、あたしは先輩がよくいる図書館へと向かった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：０７　予感

＞Ｓｙｌｐｈａ
私はタシュアを探していた。
もっともそれほど重要な用事があるわけではない。単に手合わせをしてもらおうと思っただけだ。

ここのところケンディクへ渡ることはもちろん、学院の建物がある本島以外への出入りも禁止されている。そのせいで野外へ本格的な訓練にでることもできないうえ、上級傭兵隊としての任務もこれといってない。
だから身体がなまった気がしてしかたなく、彼に訓練の相手をしてもらおうかと思ったのだ。

なにしろタシュアは強い。多分この学院内でトップだろう。
ただその強さを見せることは皆無と言ってよく、知っているのは当人と私、それにそういうことに聡いルーフェイア等、両手で足りる程度だった。

まず図書館へ足を向ける。ここがタシュアの居場所としては一番確率が高い。
だが中をひととおり見回しても、姿はなかった。
その代わりにと言ってはなんだが、別の見慣れた姿をみつける。
金髪碧眼、妖精のような雰囲気の美少女――ルーフェイアだ。

「あ、シルファ先輩♪」
向こうから先に声をかけてきて、そばへと来る。タシュアと同じように戦場で育っているだけあって、その動きはまったく気配を感じさせなかった。

女子な上に小柄で華奢というハンデがあるが、この子も強い。タシュアにはさすがに及ばないが、ここへ来た十歳当時から、並みの上級傭兵隊を上回る実力の持ち主なのだ。

「あの、タシュア先輩……知りませんか？」

外見通りの澄んだ声で尋ねてくる。

「タシュアか？　私も探しているんだ」

戦場で育ったというわりに素直なこの子は、私やタシュアによく懐いていた。

まとわりつく様子がヒヨコのようで、可愛い。

「シルファ先輩が知らないんじゃ……どこ行っちゃったんでしょう？」

「たぶん、寮の自室だろう」

あと思い当たるのは、せいぜい食堂ぐらいだ。

――そう言えば。

食堂で思い出す。食べることだけは忘れないタシュアなのに、今日は朝食時にも見なかった。

急に心配になる。

「まさか、具合でも悪いのか……？」

「タシュア先輩が、具合悪いって……ちょっと想像、つかないんですけど……」

「だが、万が一ということもあるだろうし。一緒に、行くか？」

この子もタシュアを探していたのを思い出して、訊ねる。だいい

ちルーフェイアひとりでは、タシュアの自室まで行けないだろう。
「あ、はい」
少女が嬉しそうな顔をした。

並んで歩き出す。
こうして並んでみると、この子は本当に小柄だ。もう十四歳にもなるというのに、私の肩まで届かない。体型もまだどちらかと言えば子供だった。
もっともこの二、三年はかなり伸びているようだから、最終的にはそれなりになるのだろうが。

Episode：08

「ですけど……自室にこもってるなんて、珍しいですよね？」
「たしかにタシュアは図書館にいることが多いが……それほど珍しくはないな」

この子がよく目にする放課後、彼もたいてい図書館にいるだけだ。授業をサボって自室にいることも、実はよくある。

それにしても、この子も面白い。
タシュアは人を寄せつけなかった。だから私はともかく、ルーフェイアがこうして傍にまとわりつけること自体が、かなり異例といえるのだ。
それだけタシュアも、この子を可愛いとは思っているのだろう。

――よく泣かしてはいるが。

いじめ癖のあるタシュアにとって、素直でなんでも真に受けるルーフェイアは、かっこうのオモチャらしい。
しかもルーフェイアが信じられないほど繊細で、ちょっとしたことで泣き出してしまうものだから、よけいに面白がっていじめるのだ。
まぁそれなりに厳しいことを言ったり時たま助言をしたりと、面倒もみてはいるのだが。
ともかく行った先でも気をつけてやらないと、また泣かされるだろう。

「あの……男子寮なんてあたし、初めてで……」
どこか不安げな調子で、ルーフェイアが小さく言う。

「本当か？」
これは意外だった。
他のところは知らないが、この学院はそれほど規律は厳しくない。消灯時間前ならば、それほど咎められることもないのだ。
「イマドの部屋も……行ったことがないのか？」
「はい」
ただ、ルーフェイアらしくもある。
イマドというのは、ルーフェイアと同じクラスの男子だ。なんでも戦場にいたこの子が学院へ来るきっかけを、彼が作ったのだという。
そのせいなのだろう、よくいっしょにいて仲がいい。
ただルーフェイア、何と言うか恋心や何かを、どこかへ落としてきたようだ。それでどうにも進展せず、ずっと仲良しのままだった。
――イマドも大変な相手を選んだな。
思わず可笑しくなる。
幸いイマドの方がそのあたりをよく分かっていて、それなりに二人で上手くやってはいるのだが。
「先輩、あたし……なにか変なこと、言いましたか？」
つい笑ってしまった私に気が付いて、ルーフェイアが不思議そうに尋ねてきた。
「あ、いや、なんでもないんだ」
慌ててそう言い訳する。
男子寮二階の一番奥、そこがタシュアの部屋だった。
「シルファ先輩と、ちょうど反対側ですね」

「そうだな」
言いながら部屋のドアをノックしようとすると、先に中から声がかかる。
「どうぞ。開いていますよ」
いつもと変わらない声。どうやら杞憂ですんだようだ。
「私だ。入るぞ……」
一言断ってからドアを開ける。
部屋の中に入って最初に目に入ったのは、脱いでいるタシュアだった。
上半身がさらけ出されている。
「きゃぁぁっ！！」
間髪入れずにルーフェイアの悲鳴が響き渡った。どうも刺激が強すぎたらしい。

Episode：09

「着替えているところですけどね」
「……そういうことは、入る前に言ってくれないか」

よほど驚いたのだろう。しがみついてきた少女をなだめながら、苦情を申し立てる。
もっとも言うだけムダという気もした。
気配を読み取るのが上手いタシュアだ。私と一緒にルーフェイアがいることなど最初から分かっていて、わざとやったに違いない。

「別段、驚くようなことではないと思いますがね？」
「だがルーフェイアは、まだ子供なのだから……」
「では、シルファは大人というわけですか」

答えに詰まる。
見ればタシュアは意地の悪い笑みを浮かべていた。
下手に何か言おう物ならまた突っ込まれるだろうと、そのまま口をつぐむ。

――それにしても。

一切の無駄のない、隅々まで鍛えられた身体。
いつ見ても思う。美しく磨ぎ上げられた剣のようだと。
激戦地にいた名残なのだろう、その刀身とも言うべき彼の身体には、あちこちに鈍い傷痕が刻まれていた。
だが、それらが刃の輝きを損なうことはない。むしろ日を重ねるにつれ、鋭さを増している。

「何をそんなに見ているのですか？」
「え？　あ、いや……」

また答えに詰まる。
そして気が付いた。
タシュアが手にしているのは私の実家――武器商としてはかなりの老舗――で開発した、防刃繊維で織られた戦闘用の服だ。

「タシュア……何か、あるのか？」
彼がこれを着たのは、今までに一度しかない。
「じきに分かります」
そう言って彼は戦闘服を無造作に着ると、今度は漆黒の両手剣を手にした。

身長ほどもあろう剣を一息で抜いて、その状態を確認する。
この大剣はタシュアがメインとしてる武器だ。ただそれを実際に使用することは少なく、私も片手で数えるほどしか見たことがない。
それをあえて手にしているというのは……。

「やっぱり……先輩もなんですね？」

タシュアが服を着たのでやっと落ちついたのだろう、顔を上げたルーフェイアが、厳しい雰囲気で言った。
驚いてこの少女を改めて見る。
今まで気付かなかったものが目に入って、背筋が寒くなった。

「ルーフェイア、その中に着ているのは、まさか……」
「はい」

この子も制服の下は戦闘用の装備だ。それに手にしているのも、

滅多なことでは出さない銘入りの方の太刀だった。
タシュアとルーフェイア。
時と場所こそ違うが、戦場の最前線で育った二人。
この二人が、同時に同じものを感じ取っている。

「一体、何があるというんだ……？」
「――先輩、いろいろ出せるだけ出した方がいいですよね？」
私の質問には答えず、どこか諦めたような調子でルーフェイアがタシュアに尋ねた。
「あって困るものではないでしょうね。もっとも戦闘の邪魔になるようでは、本末転倒ですが」

二人のやりとりは、明らかに激戦を想定したものだ。
どうにも落ちつかなくなる。

「だからタシュア、いったい何が……」
そこへ、緊急事態を知らせる鐘が鳴った。

Episode：10

＞Seamore

昨日に引き続いて、あたしは校庭のベンチにいた。まぁミルのヤツに押し切られたってのが実際だけどね。

けどそれほど悪くもない。けっこうあったかいんだ、ここは。

「ねぇねぇシーモア、それで今日ってば、どっか行くの？」

「そのつもりだよ」

昨日ルーフェイアが言ってたのはホントだった。朝イチで外出禁止の解除が、部屋づたいに回ってきたんだ。

しかも今日は休日で授業がないから、学内は町へ出ようとする生徒でてんやわんやだった。あたしみたいにのんびり日向ぼっこしてるなんぞ、マヌケもいいとこだ。

「早くしないと、船に乗り遅れちまうね」

「えー、でも船ってば、午後にならないと出ないって」

「そうなのかい？」

どうもこの辺の細かい連絡が、最近はちゃんと回ってこなくて困る。

「うん、そうだよー。だからここで、日向ぼっこなんだもん」

「……あんたにそこまで考える頭があるとは、思わなかったよ」

「ひっどーい！

――あ、イマドだ」

毎度のことながら、ミルの言動は唐突なことばっかだ。

もっともウソは言ってないから、それだけでもマシとしとかなくちゃいけないだろうけど。

「シーモア、ルーフェイアのヤツ見かけなかったか？」

同じクラスのイマドが、声をかけてくる。
ダーティーブロンド。琥珀色の瞳。
気さくな感じの好青年に見える。
――ただあくまでも見た目だけなんだよね、コイツは。
なんせこの野郎、いざとなったら手段を選ばない。万が一ルーフェイアでも絡もうもんなら、マジ見境なくなるし。

「ルーフェイアは今日は見てないね。さっき部屋へ寄った時も、空っぽだったよ」
「そうか……」
「デートでもするつもりだったのかい？」
突っ込んでみる。

「ばーか。あいつにデートなんて高尚なもん、分かるわけねぇだろ」
「たしかに」
ルーフェイアの鈍さときたら天下一品だ。人のことはすぐ気が付くくせに、自分のこととなると、女子だってことも理解してるかかなり怪しい。

「しっかしあんたも、よく我慢してつきあってるよ」
「しゃぁねぇだろ。つーか、ガマンとかしてねーし」
「そりゃまた。でもアンタにはそうかもね」
激ニブのところを除きゃ、あの子はえらくいい子だ。優しくて繊細で泣き虫で、思わずかばいたくなる。そのうえ素直で疑うことを知らないんだから、イマドが惚れたのも分かろうってもんだ。

「けどなんだって、あの子探してんのさ？」
なんとなく気になって訊いてみる。
「別に大したことじゃねぇんだけどよ、メシ作るからついでに教えようかと思って」
「……はい？」
ウソみたいな答えに思わず訊き返した。

「それってさぁ、なんかすっごいヘン～」
ミルがさらっと、ひどいことを言ってのける。

「そうは思うけどよ、なにせこないだ、泣きべそかきながら鍋と格闘しやがってさ。
あれじゃどうしようもねぇって」
これには爆笑。

「ルーフェイア、らしすぎ～♪」
「あの子、才能ぜんぶ戦闘に取られちまったんじゃないのかい？」

Episode：11

ルーフェイアの料理音痴――というより食べ物全般に対して無知――は、常識を遥かに超えてる。昔ローストビーフを見て「ローストなのに生だ」って言い出したときなんかは、さすがにみんなで硬直したもんだ。

昨日のケーキ作りの時も、けっきょくやったのは材料を量るのと泡立てるくらいで、あとはひたすら見てただけだったりする。

ただそれを言うなら、イマドもイマドだ。こっちは下手な主婦など遥かに上回って、家事全般が上手いってんだから。

二人ともいったいどういう育ち方をしたのか、いまだに不思議でしょうがない。

そこへひょいっという感じで、ナティエスが顔を出した。

「あれ、どしたの、イマド。ルーフェといっしょじゃないなんて珍しいね」

「いつも一緒にいるの、お前らの方だろ？」

このナティエスも食わせ物だ。大人しそうな外見に似合わず、スリは上手いわ毒付きの“苦無”を振るうわ、凶悪なことこの上ない。

「ナティ、あんたルーフェイアどっかで見かけなかったかい？」

「え？　あ、そういえば寮の渡り廊下でちらっと見たの、ルーフェとシルファ先輩だったかも」

人差し指をあごに当てて考えながら、彼女が答える。

「おや。んじゃ二人して、タシュア先輩のとこでも行ったのかね？」

「それだとルーフェ、また泣かされそうかも」

「おもいっきりアリだねぇ」

あのタシュア先輩ときたら毒舌で知られまくってるってのに、なんでかルーフェイアは懐いてた。それも毎度のように泣かされてるのにくっついて歩くんだから、もう立派としか言いようがない。

「まぁいいや。どうせ居場所なんてすぐ分かるしな」
探してたはずなのに、あっさりそんなことをイマドが言った。
そして一瞬、視線が宙をさまよう。
「あぁ、あそこか」
次の瞬間にはもう、どこにいるか分かっちまったらしい。

「いつもながらよく分かるね、あんた」
「まぁな」
イマドは必ず、ルーフェイアの居場所を言い当てる。
「やっぱそれって、愛の力〜♪」
ミルが得意げに胸を張ってバカなことを言った。

――それで世の中片付くんだったら、苦労ないっての。

「ったく、ない胸張ってなにバカ言ってんのさ」
「ぶ〜〜☆　なくないもん！」
ほっぺたを膨らませて怒るとこなんて、この子ときたらまるで六歳児だ。ホント、手がかかるったらありゃしない。
とりあえず小突いて黙らせといて、イマドに尋ねた。
「どこにいたんだい？」
「――――」
けど、答えない。
そして妙に厳しい顔になる。

「お前らさ、いったん寮へ戻って、メインの武器出したほうがいいぜ」

Episode：12

「どういうことさ？」
「それって、どういうこと？」

ナティエスと言葉がかぶる。
同じことをミルも思ったんだろう、きゃいきゃいと騒ぎたてた。

「どしてどして？　学院内っていちおう、武器の使用って禁止だよ～？」
「たぶん……ンなこと言ってらんなくなる。
――ああ、もう見えるか」
「？」

イマドが彼方を指差した。
つられて視線をやると、たしかに大きなものがいくつも海に浮かんでる。

「あ、船だ～♪」

こういうときもどっか抜けてるミルが、嬉しそうに言ってのけた。
ただあたしはそこまで、能天気には構えらんない。なんせ見えてるのったら、艦砲を備えた編隊だ。胡散臭いことこの上ない。

「ねぇ、誰かに知らせた方が良くないかな？」
不安げにナティエスが言う。

「いや、必要ないと思うね。あたしらが気付くんだ、先輩たちなんてとうの昔に知ってるだろうさ」

案の定、そこへ緊急事態を知らせる鐘が鳴った。

「――やだ、もしかして全部鳴ってる？」

「みたいだね」

東西南北と中央、五つ全部がいっせいに鳴り響いてる。つまり、「総員戦闘配備」だ。

合わせて通話石――共鳴現象を利用して互いに話せる特殊な石――を通して指示がでた。

『これから所属不明の船団および部隊と、戦闘に入ると予測される。よってA編成にて迎え撃つ。総員、戦闘配置に付け』

「やっぱそう来るか……」

ため息まじりにイマドが言う。

「あんたの言うとおり、部屋へ戻って装備を出した方がよさそうだね」

「わ～、ひっさしぶりに実弾撃てる～♪」

ミル、あんたどこまでズレてんだい。

ただこういうことは、たまーにあると先輩から聞いてた。

次々と優秀な兵士を送り出してるこの学院は、傭兵学校の老舗中の老舗だ。そのせいか、時々この学院を逆恨みしたり目の敵にしたりで、攻めてくるのがいるっていう。

しかも協定でＭｅＳはどこも原則、所属国が感知しない。だから内陸部ならまだともかく、うちみたいに陸から離れた島なうえに相手が所属不明とくりゃ、本当に知らん顔だ。

つまり、援軍は一切アテに出来ない。あたしらだけで、あの船団

をなんとかしなきゃいけないってことだ。

『攻撃隊は船着場と海岸へ即時展開せよ。それ以外は編成に従い、それぞれの場所で待機するように。

なお、これは演習ではない。全生徒そのつもりで当たるように。繰り返す、これは演習ではなく実戦である』

「A編成なら、あたし低学年の担当だ♪」

放送を聞き終えたナティエスが嬉しそうに言った。この子は小さい子の面倒をみるのが好きだ。

「ともかく一旦寮へ戻ろう。丸腰ってワケにはいかないだろうしね」

「うん」

バタバタとあたしら、一斉に寮へ戻った。

Episode：13

＞Ｒｕｆｅｉｒ

『攻撃隊は船着場と海岸へ即時展開せよ。それ以外は編成に従い、それぞれの場所で待機するように。

なお、これは演習ではない。全生徒そのつもりで当たるように。繰り返す、これは演習ではなく実戦である』

そう結んで通話石からの連絡は終わった。

この編成だと、資格保持者のほとんどが船着場と海岸への配置になる。船で上陸可能な場所はその二つしかないから、そこに重点をおく作戦なんだろう。

「作戦としては、少々安直な気もしますがね」

タシュア先輩が酷評した。

もっとも相手の戦力が未知数だから、編成のバランスをとるのはけして簡単じゃない。

なによりこの状況だと、上陸阻止以外の選択肢は選びづらいだろう。

「装備を整えてくる！」

シルファ先輩が部屋を飛び出す。

「あたしも……もう、行きます」

「そうですか」

さっきの放送だと、あたしの所属は建物の入り口付近になる。ただその前に部屋へ戻って、ありったけもう少しいろいろ出すつもり

だった。

――死闘になりそうな気がする。

認めたくないけど、朝からのあの感覚は本物だったらしい。

寮はどこも騒然としていた。

それはそうだろう。一斉に生徒が戻ってきて、各自装備を整えているのだから。

あたしも自室へと急ぐ。

「あ、ルーフェ。放送聞いた？」

「うん」

部屋にはもう、ナティエスが戻ってきていた。

「なんかさ、すごいことになっちゃったね」

「そうだね……」

なぜだろう、一段と嫌な予感に襲われる。

けど何気ないふうを装って、棚からとっておきのものいろんな物を取り出した。両親とも傭兵稼業をやってると、こういうものがイヤでも揃う。

太刀の方も、もう一度鞘から出して点検する。とある経緯でタシュア先輩からもらったもので、いつ見ても吸い込まれそうな刀身がなにより気に入っていた。

柄を握りなおして具合をたしかめる。

――いける。

胸のうちに確信が生まれた。

「ルーフェ、あたし低学年の担当だから、先いくね！」
小太刀の方も確かめていたあたしに、ナティエスが声をかける。
「うん、気を付けてね」
「だいじょぶ。
あ、そうそう。冷蔵庫のケーキ、勝手に食べちゃダメだからね？」
そう言って彼女は出ていった。

そのあとあたしもすぐ、普段のもの以外に予備の従属精霊――何らかの方法で従えた精霊を、魔力石に閉じ込めたもの――も持って部屋を出る。

「ルーフェイア！」
「イマド？」

渡り廊下のところで、今度はイマドと鉢合わせした。

「もう、装備はいいのか？」
やっぱりどこか、緊張感がただよっている。
「うん。
それよりイマド……間に合うの？　海岸でしょ？」
「まぁだいじょぶだろ。つか、お前もだろ？」
「え？　あたし、行かないけど……」
イマドが怪訝な表情になる。

Episode：14

「行かねーってお前、んじゃどこなんだ？」
「校舎の玄関前」
「――は？」

イマドが呆れ顔で聞き返してきた。

「ちょと待て、なんでお前がそこなんだよ！」
「だってあたしまだ、物理攻撃三級の検定、受けてないし……。
それに魔法も、従属精霊持ってるの……知られちゃうと困るから、ぜんぜん……」
「そういやそうだったな」

あたしはいろいろ事情があって、これなしにはやっていけない。
でも本来学院内で従属精霊の使用が許可されるのは、傭兵隊に所属する上級生だけ。あたしはまだその年齢じゃないから、資格がなかった。
だからこのことは、出来る限り内緒にしてある。
そんな理由で、バレてしまうような検定は、なかなか受けられない状態だった。

「まぁいいや。ともかく気をつけろよ――って、お前にゃ言うだけムダかもな」
「ううん、ありがと。
――そうだ、これ使って」

思いついて、イマドに予備の従属精霊を渡す。これがあるとないとでは、雲泥の差だ。開放して自分と同化させることで、いろんな

ことが出来る。

「いいのか？」

「うん。あたしはいつもの二体、ちゃんと使ってるから」

「そか。んじゃ借りるぜ」

なぜだろう、イマドが受け取ってくれてほっとする。

「ま、ともかく頑張ろうぜ」

「イマドも」

そう言って彼は海岸へ行くために左へ、あたしは右へと別れた。

大急ぎで廊下を駆けていく。

こんなふうに館内を走ったら普段は教官に怒られるけど、さすがに今日はそんなことを言う人はいなかった。教官たちまで走ってる。

「あら、ルーフェイア。あなた海岸じゃないの？」

「はい」

途中で先輩につかまった。

「いいじゃない、助かるよ。なにせこの子強いから」

一緒にいたんだろう、ロア先輩が後ろからぽんぽんとあたしの頭を叩く。

「そうね。たしかにこの子、上級傭兵隊並だものね。

さ、急いで行くわよ。そうそう、悪いけれど最前列に入ってもらうわね」

「了解です」

先輩たちと一緒に走って、着いたところで最前列の隊に入った。
船団がかなり迫って来ている。

――地獄が、始まる。

あたしはひとつだけ、深呼吸した。

Episode：15　戦端

＞Tasha　Side

「いよいよですか……」

シルファとルーフェイアが出ていった部屋で、タシュアはつぶやいた。

実を言えば昨日から、嫌な予感はしていたのだ。

戦場で育ったが故なのだろうか？　なにか大きなこと――それも悪いことばかり――がある場合は、事前に奇妙な感覚を覚える。

激戦になる。そんな気がした。

相手は分からないが、おそらく正規兵だろう。

（――有利とは言えませんね）

この学院が誇る（？）上級傭兵隊は、そのほとんどが派遣されて不在だった。タシュアたちも、とある契約をたてに拒否していなければ、今ここにいなかったはずだ。

僅か十数名の上級傭兵隊。

いくら従属精霊の力を借りているとはいえ、絶対的な数が少なすぎる。

しかも残る生徒の八割は、実戦経験が無い。所詮は「訓練生」なのだ。

さすがに厳しい表情のまま、タシュアは自室を出た。

騒然としている中、女子寮へと向かう。

「――タシュア！」
「準備は終わったのですか？」
向こうから急ぎ足で来たパートナーにそう尋ねる。
「ああ。といっても、いつもの装備だけなんだが……」
タシュアやルーフェイアの構え方を見たせいだろう。シルファは多少自信がなさそうだった。
「それだけ整えてあれば問題ないでしょう。
――行きますよ」
そのまま歩き出す。後ろからサイズ（大鎌）を手にしたパートナーが、ついてくる気配がした。
「タシュア、待ってくれ。いったい……どこへ行くんだ？」
本来向かうべき海岸へ行こうとしないタシュアに、シルファが尋ねる。
「教室へ行きます。低学年を守る人間が殆どいませんからね」
攻撃理由は定かではないが、この学院の兵力は基本的に金で買える。
いっぽうで迫る船団はどうみても、どこかそれなりの所属――小国かそれ以上――だろう。
それほどのところが金を出さずに包囲攻撃するということは、この学院を邪魔に思っているということだ。
兵力を見ても同じことが言える。
本土への交通手段さえ封じてしまえば、学院は折れざるを得ない。だがそれにしては、持ち込んでいる兵力が大げさだった。

もちろん、脅しのためにわざと、という可能性もあるが……だがタシュアにはどうしても、そうは思えなかった。
何かが違うのだ。
こういう状況を考え合わせると、低学年でも危険は免れないだろう。

しかも学院のその辺りの運用は、どうにも下手だ。子供たちをシェルターにでも入れるなら分かるが、出入り自由な教室にクラスごとに分散させて、気休め程度の上級生を引率につけた程度で、守れるわけがない。

「それなら私も行く」
命令違反を承知でシルファも同行する。
その時、裏庭の方で悲鳴が上がった。

「始まりましたか」

まだ船団は上陸していない。それなのに裏庭で戦闘が始まったというのなら、もはや校舎も安全とは言えないだろう。

「シルファ、急ぎますよ」

惨劇の幕が上がろうとしている学園の中を、二人は走り出した。

Episode：16

＞Ｒｕｆｅｉｒ

――まさか、どこかの正規軍？

接近してきた来た敵を見て、背筋を冷たいものが走る。
かなり厳しいバトルになりそうだった。なにしろこちらにはごく少数の上級傭兵隊の先輩以外は、プロと渡り合える人間がほとんどいないのだ。

船団から大きな巨鳥が幾つも飛び立つ。上陸が難しいとみて、先に空中部隊を出したんだろう。
裏庭の方で悲鳴が上がった。広いあっちにかなりの数が降りたらしい。
続いて衝撃音。足元が揺れる。艦砲だ。

「来るわよ！」

先輩の鋭い声が飛ぶ。
あたしは鞘から太刀を引き抜いた。刀身が太陽を反射する。
大鳥から飛び降りた敵兵が突っ込んでくる。真正面だ。
間合いを測る。
長剣を振りかぶる兵士のスローモーション。

――今。

ステップを踏んで左へ避けながら、太刀をふるう。
血しぶきがあがった。

それを背中で見ながら、いちばん近い敵へ。
目くらましを兼ねて初級魔法を叩き付け、その隙に切りかかる。
同時にかかってきた二人は、かわしただけで相打ち。

さらに別の兵士に向き直ったとき、視界のすみに銃を構える敵の姿を認める。とっさに呪文の詠唱を始めた。
敵が銃を撃ち、あたしの防御魔法が発動する。
きぃん、という音がして、銃弾が魔法の盾に阻まれた。

「ありがと、助かったわ」
狙われていたことに気付いた先輩が、あたしに向かって微笑する。
「いえ、当然のことですから」

気が付いた人間がフォローしなかったらバトルでは勝てないことを、かつての戦場生活であたしはイヤというほど思い知らされていた。

――それにしても。

敵の数が異常に多い。その上あたしの周囲へは、兵士が集まりだしていた。
太刀を手に猛威を振るう金髪の少女。これがどれほど目立つか。

左右からまた同時に切りかかられる。
考えるまでもなく身体が先に動いた。
身を少し低くしながら刃をかわし、まず左の兵へ下段から一撃を浴びせる。そして勢いを利用しながら向きを変え、残る兵士を打ち倒した。

そこへ通話石から連絡が入る。
運営の先輩（たぶん）の、切羽詰った声。
『手の空いてる隊、教室へ来てくれ！　低学年が襲われてる！！』
――なんてことを！
プロの兵士のくせに子供たちを襲うなんて。
でも一方で、あたしは知ってる。
戦争は場所を選んでくれない。そこが学校だろうが病院だろうが、戦場になるときはなる。
あたしは昔、そういう場所にいた。
刀身に一瞬辛い思い出が映る。
この学院に来る前、戦場で銃声を子守り歌にしていた頃の出来事だ。
あの時あたしは生き延びるために……。
――だめ、今は！
はっとして自分で自分を叱りつける。
いまは思い出にひたってる場合じゃない。
「遥かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ――」
敵集団がわずかに体制を崩したのを見て、あたしはすかさず呪文を唱えた。

Episode：17

「ケラウノス・レイジっ！」

瞳を焼く光芒が天からふりそそぎ、いかずちが大地に炸裂する。

――思惑どおり。

得意の多重魔法――発動ポイントも少しづつずらしてある――に、かなりの数の敵が巻き込まれた。向こうのの兵器も、電撃にさらされてつぎつぎショートする。

これでだいぶ、相手の数が減ったはずだ。

通話石――こっそり秘匿通話も聞こえるように改造してある――から、次々と情報が入る。

船団が海岸方面へ向かうらしいこと。教室が危険なこと。

――そういえばナティエス、大丈夫だろうか？

彼女、低学年担当のはずだ。何もないといいのだけど。

さらに情報が入る。

裏庭が多数の敵に襲われていること。そして被害が大きそうなこと。前庭から戦力を回して欲しいこと……。

「十四班から二十班……十三班も裏庭へ行って！」

戦闘の合間を縫って、ここの指揮を取っているエレニア先輩が命令を出す。

「ロア、この子たち連れて、裏庭へお願い」
「あ、ちょっと待って。ルーフェイア、あなたも来なさい」

いきなりロア先輩からお呼びがかかった。

「ちょ、ちょっと！　彼女大事な戦力なのよ」
「物理攻撃の四級を三人置いてくから、それで調整してよ。それにこの子の能力じゃ、ここは狭すぎるって」
「もう……！」

結局あたしは、裏庭へ回ることになった。もっともロア先輩には日頃いろいろ面倒を見てもらってるし、あたしのことを良く知ってるから、このほうが気楽といえば気楽だ。
けどそれ以前に、そもそもあたしは……。

「さあ、急ぐよ！　裏庭まで駆け足！！」
ロア先輩の号令が飛び、あたしは他の生徒と一緒に慌てて駆け出した。

＞Ｎａｔｔｉｅｓｓ

「お姉ちゃん！」

あたしのそばに、低学年の子が集まってくる。
見ているのは五年生。九歳の子達なの。

いちおう学院ってば傭兵学校だから、イザってときの対応は決まってるのよね。当然どの上級生がどのクラスを見るのかも、ちゃんと割り振られてたりして。

ただあたしとしてはラッキーだったかな？　ちっちゃい――今回はちょっとトウが立ってるけど――子達といるの、嫌いじゃないから。

「大丈夫。ただみんな、言うことはちゃんと聞いてよ？」
「うん」

まぁこの期に及んで、言うこと聞かない子もいないだろうな。
このクラスを見てる上級生は、あたしを含めて三人。十八人いるから、ひとり六人づづの割り振りってとこ。

「先輩、奥に行きます？」
「やめとこう。どうしてもになってからでもいいだろうし」
「ですね」

そのとき悲鳴が上がったのよね。裏庭の方で。

「あたし、見てくる」
同じクラスのアイミィが窓の方へ駆け寄ってみて。

「どぉ？」
「大変！　裏庭がもう襲われてるっ！」
「えっ――！」

Episode：18

だってまだ、船が上陸したとか聞いてない。それなのにどうして、襲われちゃったりするの？
悩んでたら轟音と共に足元が揺れて。

「ねぇどうしよう？　ここにいたら危ないのかな？」
「そんなこと聞かれても……。先輩、どうしましょう？」

さすがにこんな時どうしたらいいかまでは、ちょっとすぐには思いつかない。
逃げた方がいい気もするし、かといって廊下に敵がいたら困るし……。
いちばんいいのはたしかめに行くことなんだろうけど、そうするとこっちが手薄になりすぎちゃう。

――ルーフェイアだったらどうするんだろう？

あの子戦闘なれしてるから、こゆとき簡単に状況読むんだろうな。
みんなで必死に考えて……。
また悲鳴。それとガラスの割れる音。
さっきより近いの。

「どこ？」
「――隣だっ！」

いっしょにチビたちを見てくれてるクライブ先輩が、真っ先に気がついてくれた。
でもどうして？

どう考えても校内へはまだ、侵入されてないよね。
けどあたし、唐突に理由を知ったの。どうしていきなり隣が襲われたか。

「アイミィ、危ないっ！」

とっさに声をかける。
もちろん小さい子達も、急いで下がらせて。
窓ガラスに影が映って……ロープにぶら下がった敵になった。

――蜘蛛みたい。

一瞬、そんな場違いなことが、頭をかすめちゃったり。
でもあたし、のんき……だったのかな？　その時までは。
勢いをつけて兵士が体当たりしてきて、窓ガラスが割れて。

「痛っ！」

小さい子をかばった拍子に、ちっちゃい破片が背中に刺さったみたい。
だけど気にしてるヒマなんてないの。

「早くっ、廊下へ出てっ！」

飛び込んできた兵士はでも、一人だけでラッキー。アイミィとクライブ先輩が、すぐ戦い始めて。
だからあたしひとりで、ちびちゃんたちを全部になった。

「誰でもいいから！　隣と手を繋いで外へ出るの！」

子供たちが手を繋いで、次々と廊下へ出て。だけどまだ、少し奥に数人残ってるから……。
後ろで立て続けに絶叫。
慌てて振り向く。
「アイミィっ！」
叫んだけど、ムダなの分かってた。あれじゃもう助からない。
だって……上半身と下半身がサヨナラしてる。
アイミィの隣には首の無いクライブ先輩。
殺ったのは、こいつだ。
飛び込んできた、やたらデカいヤツ。
そいつが、あたしが叫んだのを聞きつけてこっちを向く。
総毛立つような薄笑い。
「どうして軍に、こんなのがいるのよ……」
思わずつぶやいちゃった。
――こいつ、イっちゃってる。
昔スラムにいた時、よく見た。ラリった挙句にどっかへイっちゃってるヤツ。
そいつらの目にそっくりなの。
それから気が付く。
こいつの足元……。
「リティーナっっ！！」

Episode：19

なんでよ！　どうしてこんなことするのよっ！！

低学年のリティーナ――あのキザで有名なセヴェリーグ先輩の妹――が、切り刻まれてる。

手を、足を、胴の一部まで切り落とされてまだ生きてる。

それをこいつ、嬉しそうに眺めて悦に入って……。

「たすけ……おにいちゃ……たす、け……」

虚ろな目で天井を見ながら、リティーナがつぶやく。

けど、助けたいけど、近寄れない。ただ見てるだけ。

だからあたし、自分の苦無を投げつけたの。リティーナに向かって。

苦無には即効性の猛毒が塗ってあるから、当たればすぐに息をひきとるはず。

――これで楽になるよね？

狙いたがわず苦無は飛んで……リティーナに突き立った。

この子の身体から力が抜ける。

「邪魔するんじゃねぇよ……」

そいつが初めて声を出した。

ヤな声。ザラザラしてる。

「お姉ちゃん！」

「早く行くのよっ！」

あたしの厳しい声に、慌てて最後のちびちゃんたちが部屋を出た。

――よかった。

とりあえず、生きてる子はこれで全部だ。

苦無を構える。

あいつの武器ときたら、あたしじゃ持ち上がらないような戦斧。

これじゃどうみたって、不利なんてもんじゃないかも。

でも、引き下がるもんか。

後ろには低学年がいる。あの子たちが安全な場所へ行くまで、時間だけでも稼がなくちゃいけない。

――先手必勝！

苦無を二本、立て続けに投げる。いくら大男だろうが力があろうが、かすればこっちの勝ち。

けど、甘かった。

戦斧が一閃して、苦無が叩き落されて。

その上あっという間に間合いを詰められた。

次の苦無を投げるよりまだ早く、戦斧が振り下ろされる。

とっさに腕をかざして身体をひねって……。

激痛。

左腕が切り飛ばされて、わき腹まで刃が食いこむ。

あたし悲鳴を上げたのかな？　よく分からない。

倒れたあたしの目の前に立ちはだかるこいつだけが、いやにはっきり見えて。
酷薄な笑い。
――愉しんでるんだ。
そのことに気が付いて歯を食いしばる。
悲鳴を上げて、こんなやつを喜ばせたくないもの。
睨みつけてやったら、こいつの表情が変わった。あたしの態度、気に食わなかったみたい。
――ざまみろっての。
ちょっとだけ楽しくなる。
でもこのサディスト、それだけじゃ終わらなくて。
もう一度戦斧が振り上げられる。
鈍い音。
今度は……両足。
――負けるもんか。
目をつぶって歯を食いしばって激痛に耐えて。
「助けて」なんて、死んでもコイツに頼まない。
まぁ……言う前に死んじゃいそうだけど。
『手の空いてる隊、教室へ来てくれ！　低学年が襲われてる！！』
切羽詰まった感じで、通話石に報告が入って。

――ちょっと……遅いってば。

その時、誰かの手があたしを抱き上げたの。そして急に痛みが消えて。

やっとの思いで目を開ける。

「タシュ、ア……せん……ぱい？」

瞳に飛び込んできたの、意外すぎる人だった。

「喋らないように。傷に障ります」

言葉遣いはいつもとおんなじ。けど、ずっと優しい感じ。

――そっか。

いつもルーフェイアが言ってたっけ。タシュア先輩はいい人だって。

ほんとだったんだ。

ならあの子たち、きっと助かる。

「せんぱ……あの子……た……おね……が……」

ひどく眠かった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：２０　狂気

＞Ｓｙｌｐｈａ

「始まりましたか」
校庭からの悲鳴を聞いて、タシュアがつぶやいた。

「シルファ、急ぎますよ」
「ああ」

二人で走り出す。
まだ船団が上陸しないうちから敵が攻めてきたのだから、急がないと低学年まで襲われかねなかった。
だがタシュアはエレベーター――年季が入った昔風のものだ――へ向かおうとしない。

「タシュア、上へ行くんじゃなかったのか？」
教室はすべて、二階以上の配置だ。

「そうです」
「エレベーターは向こうだが……？」
不思議に思ってそう言うと、タシュアが指摘した。

「エレベーターは危険です。いつ館内まで攻め込まれるかわかりませんからね。
それに万が一低学年を避難させるとすれば、階段の状況を確認しておかなければなりませんし」
そう言って、普段誰も通らないような場所へと向かう。

「こんなところに……」
人目につかない場所に非常階段があった。
「ここはまだ、大丈夫のようですね。
――さて」

言いながらタシュアは、階段入り口の扉を閉めてしまう。
たしかにこうしておけば、ちょっと見た目には階段があるとはわからない。鍵こそかけてはいないが、そう簡単に侵入されずに済みそうだった。

「どうやら通れるようですね。
退路も確保できたことですし、シルファ、行きますよ」
「あ、ああ……」

いつもながら彼の冷静さには舌を巻く。当然といえば当然なのだが、この状況でこれだけ効率よく動ける人間はあまりいないだろう。
二人で急いで階段を上がる。

――？
途中まで上がったところで、たしかに声を聞いた。

「タシュア、今のは……？」
「先に行きます」

一気にタシュアがスピードを上げる。こうなると私ではとても追いつかない。
ともかく急いで階段を昇り切ると、いくつかの教室から次々と、低学年の子たちが出てくるところだった。

「大丈夫か？」

「はい。タシュア先輩が来てくれましたから」
このクラスの担当らしい上級生が、はきはきと答える。
「この先に非常階段があります。それを使って地下まで移動しなさい。しばらくは安全なはずですから」
最後に出てきたタシュアが指示を出した。

「わかりました。
――みんな、行くよ」
手際よく年長の子が低学年をまとめて、安全な場所へと避難が始まる。
その時、絶叫が聞こえた。

「隣か？！」

今のは明らかに断末魔の声だ。
低学年の誰かが、犠牲になってしまったのか……。

『手の空いてる隊、教室へ来てくれ！　低学年が襲われてる！！』

やっと、緊急事態を告げる報告が入る。だがどう見ても遅すぎるだろう。
襲われたとおぼしき隣の教室へ飛びこむ。
その私の目に、信じたくない光景が飛び込んできた。

Episode：21

――ナティエスが！

この子は私もよく知っている。ルーフェイアの親友で任務に同行してもらったこともあるし、なにより昨日一緒にケーキを作っていたのだ。

その後輩が無残な姿を晒していた。

それだけではない。

奥のほうにはまだ、切り刻まれたとしか思えない遺体がいくつもある。

――最初に聞いた声は、まさかこの子たち？

そして、その前に立ちはだかるこの男……。

鳥肌が立つのがわかった。

かなり……やばい相手だ。

タシュアを磨き抜かれた名剣に例えるなら、眼前の男はさながらマシンガンのようだった。

大量虐殺を目的とした武器。

人を殺すことに悦を感じている。

苦しむナティエスを見て浸り切っている。

その彼がゆっくりと顔を上げた。

なぜだろう？　タシュアとこの男との視線が絡む。

にやり、と男が笑った。

「久しぶりだなぁ、タシュアのアニキ。会いたかったぜぇ」
タシュアは答えず、倒れているナティエスを抱き上げた。
左腕と両足が切り落とされている。わき腹も大きくえぐられて、内臓が溢れていた。
「今、呪文を……」
「シルファ、もう無駄です」
そう言ってタシュアが即効性の鎮痛剤を取り出す。
まだわずかに息のあるこの子を、少しでも楽にしてあげようというのだろう。
「タシュ、ア……せん……ぱい？」
鎮痛剤が効いたのか、ナティエスが目を開けた。
「喋らないように。傷に障ります」
穏やかなタシュアの声。
それに安心したのか、この子が微笑みを浮かべた。
「せんぱ……あの子……た……おね……が……」
「心配ありません。あの子たちは必ず私が守ります」
そのタシュアの言葉は、果たして聞こえたのだろうか？
がくりとナティエスの身体が力を失った。
――微笑みを浮かべたまま。
私のうちに、怒りが湧き上がる。
だがそれ以上の怒りを見せたのがタシュアだった。

私にナティエスを預けると、音もなく立ち上がる。

「バスコ……」

この場にそぐわない、あまりにも静かな声だった。

背筋に冷たいものが走る。

タシュアは……怒りが激しいほどに、その声音が冷たくなる。

「なにを怒っているんだぁ？　ガキどもを殺したことかぁ？」

対して愉しむような薄笑い。それがどうしたと言わんばかりの口調だ。

――狂っている。

その口調から、瞳から、表情から、狂気がにじみだしている。

いったい何が、ここまで彼を狂わせたのか。

それとも「戦い」という狂気そのものに、既に同化してしまったのか……。

「ヴィエンにいた頃は、敵なら降伏しても皆殺し、さらに味方すら見殺しにしたキサマが――死神とまで恐れられたキサマが、この程度で怒るか。

ずいぶんと変わったものだなぁ！！」

バスコと呼ばれた男が吼える。

一方で、対するタシュアはどこまでも静かだった。

大剣さえも構えず、ただそこに、在る。

その対峙するさまに、私は圧倒されて、立ちすくむだけだ。

Episode：22

「――なんでぇ、だんまりかよ？」

バスコが見下したような笑いを浮かべる。

「まぁ、戦いの最中に女を連れ歩くほど落ちぶれたキサマじゃなぁ。ムリねぇか」

どこか勝ち誇ったような響き。

瞬間、思い出した。

タシュアには弟がいると、聞いたことがある。そしてどこかの傭兵隊にいることも。

この弟は、兄にあたるタシュアを超えたいのだ。

だが上手く言い表せないが……彼が知っているのは多分、タシュアになる前のタシュアだ。

そして今のタシュアは、誰も手が届かないような高みへと昇りつづけている。

――自分を責め続けることで。

それを、この弟は知らないだろう。

「ほら、なんとか言ってみろよ」

「――シルファ。

ナティエスと低学年を、安全なところまでお願いします」

弟の挑発を、タシュアは完全に無視する。

「先ほど上がってきた階段を利用して地下へ降りれば、当分は安全なはずです」
「タシュア……」
彼が他人に頼み事をすることは、あまりない。だから断ることができなかった。
だいいち悔しいが、私がここにいてもタシュアの足手まといになるだけだろう。
「頼みましたよ」
「――わかった」
存分に戦えるようにと、急いで出口へ向かいかける。
「それからこれを」
「え？」
驚いて振りかえる私に、タシュアが眼鏡を外して差し出した。
血の色をした瞳が光にさらされる。
以前タシュアが言っていた。この眼鏡は見るために必要なのではなく……制限するためのものだと。
強すぎる力を制御するための、いわば手段だ。
それを私に預けると言うことは――。
「預かっておいてください。後から取りに行きますので」
その横顔には表情がない。
表情がないからこそ恐ろしかった。

――やはり、本気なのか？

私に怒りが向けられているわけでもないのに、身体が冷たくなる。

タシュアは本気で弟を……。

戦いが孕む狂気が、辺りを侵しつつあるようだった。

＞Ｉｍａｄ

海岸に顔を揃えたメンバーは、だいたい一個中隊ってとこだった。

資格が限定されっから、上級生のそうそうたる顔ぶればっかだ。

次々出る指示にも、反応が早えぇし。

――って、俺が最年少か？

けどもう一学年下で合格すんのはさすがにキビシいから、まぁそんなとこだろう。

「イ～マド♪」

「なんでお前がここにいるんだよ……」

さっきまで一緒にダベってたミルに声をかけられて、一気に不安になる。

――そりゃ、腕はたしかだけどよ。

ただこいつ、どう考えても性格が……。

「え～、あたしちゃんと、三級持ってるもん！　すごいんだから☆」

「分かった分かった！」

戦闘直前のピリピリしてるとこで、頼むから素っ頓狂な声で騒ぐ

なっての。
案の定、周囲が白い目で見てやがるし。
「おい、シーモアはどうしたんだよ？」
「あ、シーモアはねぇ、船着場行ったよ♪」
「――マジ？」
頭が痛くなる。
一縷の望みをたくして周囲を見回してみても、やっぱ同じクラスは俺だけってやつだ。
ってことは、俺がこいつのお守りか？
――冗談。
ンなことしてた日にゃ、戦う前に倒れちまいそうだ。
「ねぇねぇねぇねぇ、イマド、そ～いえばルーフェイアは？」
こいつやっぱ学習機能ついてねぇ。またきゃいきゃいと騒ぎ立てて、周囲のヒンシュク買ってやがる。
「あいつ、検定受けてねぇんだよ」
「え～、どしてどして？　なんでイマド、ちゃんと受けさせてあげなかったの？」
「俺に言うな！」
あいつの場合事情が事情だけど、それをここで言うわけにもいかねぇし。
「けどけどぉ、ルーフェイアいなかったらキビしいよね～」
「いいんじゃねぇか？　その分校舎の守備が堅くなるからな」

他にも向こうには、運営に関わってるような先輩たちが回ってる。
「向こうがきっちり守ってくれれば、俺らは考えないで済むんだぜ？」
「でもぉ」
その時……聴こえた。
「――悲鳴？　どこだ？」

Episode：23

「え～、なんにも聞こえないよぉ？」

ミルが騒ぎやがるけど、そりゃそうだろう。俺が聞いたのは声じゃない。

耳を――いや、心を澄ます。

眼前に裏庭の風景が見えた。

「――やべぇ」

「どしたの？」

ミルのヤツ、興味津々って顔だ。

「裏庭が――それに教室もかっ？！」

「だからぁ、どしたの～」

子犬じゃあるまいし、キャンキャン吠えるな。

「ヤツら空中部隊出してんだよ！

船団が上陸してから攻撃なんて悠長なこと言ってたら、こっちが全滅だ！」

「あ、それたいへんかも☆」

俺の話聞いて、こいつが絶対に分かってねぇっぽい口調で騒ぎ立てた。

――調子狂うんだが。

「けどさ、先輩に言わなくていいの？」
「言われなくたって行くっての」

ともかくここの指揮を取ってる上級傭兵隊の先輩――キザなことで有名だけど、能力は折り紙つき――のとこへ走る。

「先輩、セヴェリーグ先輩っ！」
「ああ、イマドか。どうしたんだ？」

幸いこの先輩とはけっこー長い付き合いだ。そのうえ俺の「曰く」も多少は知ってっから助かる。

「敵の出した部隊が、もう裏庭を襲ってます」
「本当なのか？　いや、君の能力を疑うわけじゃないんだが……まだ接触もしてないじゃないか」
「向こう、空中部隊まで出してんですよ。このままじゃ俺らが攻撃なんてする前に、こっちがやられます」

俺の言葉に、ほんの少しの間先輩が考え込んだ。

「――わかった。
十二～十八班、校庭へ回れ。オルディス、指揮を頼む。
残りの班は、ここに残って侵入を阻止する。急げっ！」
「了解！」

指示が飛んで、一斉に生徒が動き出す。
指名された連中が素早く裏庭へ向かった。これで少しは向こうも違うだろう。

「こっちは多少時間がありそうだな」

また先輩が少しの間考え込んだ。

「――常套手段で気に入らないが、待ち伏せといくか」

ありきたりだけど、確実な方法を先輩が選ぶ。

校舎があるこの島は、周囲が切り立った崖に囲まれてる。海へ出られるのは船着場と海岸――意外と広い――の二ヶ所だけで、どっちも崖の間の坂道を通らねぇと、校舎は絶対行かれねぇ作りだ。

待ち伏せするには絶好の場所、ってヤツだった。

そりゃもちろん敵も警戒してんだろうけど、だからって罠を張らない理由はねぇし。

「今のうちにトラップを仕掛けよう。腕に自信のあるやつは、前へ出てくれないか」

この言葉に俺を含め、十人ちょっとが前へ出た。

Episode：24

顔ぶれをセヴェリーグ先輩が確認する。

「そうだな……リドリア、きみにリーダーを任せる。どういうトラップにするかはそっちで相談して決めてくれ。
ただ、急いでほしいな」
「O．K．　手っ取り早く効果的にってわけね」

ロア先輩やエレミア先輩と同じ学年の女性上級傭兵隊が、面白そうに答える。

「まさか道具を取りに行ってる時間はないだろうなぁ……」
言いながらこの先輩が、ツールキットを取り出した。

「よし、決めた。オーソドックスに行こ。ワイヤーで行くわよ」

たしかにオーソドックスだ。
でもコイツなら、大抵の学院生は簡単に作れる。トラップに慣れてるやつならなおさらだ。
たちまちかなりの数の、細工した手榴弾が出来上がった。

「よし、そしたらワイヤー張るわよ。だめだめ、もっとピンと張って。そこじゃなくてもっと上！」

って、この人のトラップの仕掛けかたもヤなタイプだな。
発見した時には爆発してっから、効率いいのはたしかだけど。

「おっけー、じゃぁあとはその辺に二次用のも仕掛けて……」
「先輩すみません、俺、魔力石まいていいですか？」
俺はこっちのほうが得意だ。

「いいわよ。タイミングだけは間違わないでね。
――あ、あなたたち、少し石、分けてあげてよ」
コトを察した先輩が、手際よく他の生徒から魔力石を集めてくれる。

「これで足りる？」
「はい、十分です。すみません」

集まった石を、俺はさっさとばら撒いた。ワイヤーの仕掛けのもっと向こう、敵から見たら手前側になる場所だ。

「イマドってば凶悪～♪」
ミルが茶々入れてくる。
「お前ほどじゃねぇよ」

けどこれも、たしかに嫌われるタイプのトラップだろう。踏もうが何しようが発動しないからって無視して進んでると、いきなりドカンだ。

「よし、全員下がるんだ！」
「了解！」
班ごとに、崖上や道路わきの茂みへ身を潜める。

「そこ！　もう少し下がるんだ。そうしないと爆発に巻き込まれる。
音を立てるなよ。金属音は特にだ！」

準備が整う。
息詰まる時間。
敵の船が着いて、敵が走り出す。
そして……。

「かかった！」
誰かの声とともに、トラップが作動した。手榴弾が次々と爆発し、さらに誘爆する。

――今だ。

俺もタイミング合わせて魔力石を発動させた。
相乗効果で威力を増した魔法が紅蓮の炎となって舞い上がり、広範囲にわたって敵を捕らえる。

Episode：25

「きゃ～、すごいすごぉい♪」
「あ、ああ……」

一瞬めまいがした。
だけどともかく、これでかなり数が減っただろう。

「さ、あたしもやろ～かな♪」

ミルのやつが銃を構えた。
正確な射撃。
ウソみてぇな話だけど、引き金が引かれるたんびに悲鳴あげて敵が倒れる。

――違う。

俺が聞いてんのは……悲鳴じゃねぇ。そいつらの出してる感情が、モロにこっちへ来てる。
余裕があるときならともかく、普通は戦場じゃ相手にとどめを刺すより、戦闘能力を奪うほうが優先される。
逆に言えば苦しんだまま放っておくってことだ。

（――苦しい）
（――死にたくない）

すさまじい負の感情が俺の精神をえぐりにかかる。他の連中はともかく、これじゃ俺は精神攻撃を受けてるのといっしょだ。

かと言って、シャットアウトはできねぇ相談だ。
なぜなら……。

「ミル、右だ！　三班、五班下がれっ、グレネード来るぞっ！！」

これがあればこそ、向こうの行動を先読みできる。
俺がこれやめたら、ぜったい被害が増す。なんせ今だって、こっちにもけっこう負傷者出てる。

「あれ、イマド、大丈夫？　なんか顔色悪いよ～？」
「大丈夫じゃねぇ。でも大丈夫だ」

言いながら俺は魔法を放った。物陰の向こう側で絶叫があがる。

「ヘンなの。見えないのに」
「殺ったんだからどうでもいいだろ！」

肉眼じゃ見えないトコも、俺は確認できる。物陰だろうがなんだろうが、あんま違いなかった。

――にしても。

吐き気がする。
死にかけてる奴らの断末魔の声が、途切れなく俺を襲いつづけてやがる。

「よし、一旦下がるぞ。偶数班と奇数班に分かれて後退！」
さすが先輩だ。弾切れおこすやつが出たのを見て後退の指示を出す。

「弾幕を張りながら下がるんだ。やつらを誘いこんで魔法を放つ。
炎系を持ってるヤツは、合図で一斉に放ってくれ！」
「了解！」

次々と指示が下され、命令通り俺たちは後退した。
最後のヤツが後退を終える。

「よし、詠唱行くぞ！」
先輩の声で詠唱が始まった。

「星に眠る原初の炎よ、ここに目覚めて新たなる創世となれ――ランペィジング・ラヴァっ！」
初級から上級まで魔法が一斉に放たれて、炎が吹き上がる。
坂道が再び、灼熱の渦に飲みこまれた。

――！

同時に巻きこまれたやつらの苦しみが俺に襲いかかる。
身体を灼かれる感覚が流れ込んだ。

「イマドぉ？」
「おい、大丈夫なのか？！」

耐え切れなくて、いつのまにか膝をついたらしい。ミルとセヴェリーグ先輩とが俺を覗きこんでいた。

「やつらの想いを食らったようだね。動けるのかい？」
「すみません、大丈夫です」

まだ戦闘は序の口だ。ここで怪我もしないうちから、ぶっ倒れて

るわけにはいかない。
――負けるかっ！
歯を食いしばって、俺は立ち上がった。

Episode：26

＞Ｔａｓｈａ　Ｓｉｄｅ

ナティエスを抱いて、シルファが出て行く。
子供たちの足音が遠ざかっていった。
あちこちから聞こえる悲鳴。爆発音。
だが……ここだけはまるで、時が止まったようだった。
その中で、兄弟が対峙する。

「ずいぶんとよぉ、甘っちょろくなったもんじゃねぇか」

タシュアをを見下すようにバスコが言った。
すでに兄を超えたと思っているのだろう。

「神に抗う者だの大層な名前を喜んでた割にゃ、落ちたもんだなぁ！」
「たしかに……私は変わりました」
その弟に、静かに兄が言葉を返す。

「ですがその変化を、私自身が気に入ってもいます。守るべきものもできました。それを守るためならば、かつて以上に冷酷にもなれます。
――試してみますか？」

タシュアが初めて表情を見せる。
氷よりも冷たい微笑。

「な、なに笑ってやがる……」

死神の微笑みに弟の声が震えた。

「ですから、試してみなさいと言っているのです。
――私を超えたのでしょう？」
「だったら死ねっ！！」

バスコが戦斧を振り上げ、タシュアへと挑みかかる。
数え切れないほどの犠牲者の血を吸ってきた戦斧が、勢い良く振り下ろされた。
だが刃は、虚しく床をえぐっただけだ。

「おやおや、ずいぶんのんびりとした攻撃ですね。そのうち蠅がとまりますよ」

タシュアは軽々と後方へ跳び、簡単に避けてみせたのだ。
その顔には、どこまでも冷たい嘲笑。

「このぉっ！」

逆上したバスコが次々と斧を繰り出す。
常人なら決して避け切れないような鋭い攻撃。
が、どれも空を切るばかりだ。

「掛け声だけは勇ましいですねぇ。当たらない以上意味はありませんが。
それと備品を壊さないでいただけますか。どうせ弁償する気などないのでしょう？」
言いながらタシュアは教室内を移動し、一番前まで戦いの場が移っていく。

「なんだかんだ言って、逃げてるだけじゃねぇか！」
「そう言うのでしたら、逃げられないような攻撃をしてみなさい」
教卓に寄りかかりながらのタシュアの言葉は、まさに嘲ってるとしか言いようがない。
「もっとも、力任せに斧を振るうことしかできない脳細胞では、連続技など考えもしないのでしょうが」
「――！」
言葉にならない雄叫びをあげて、バスコが斧を大きく振り下ろした。鈍い音がして、刃が完全に教卓――端末も兼ねた、据え付けの大きなもの――にめり込む。
が、やはりそこにタシュアの姿はなかった。
「さて、どこを切り落としてほしいですか？」
バスコのすぐ隣で、死神が囁く。
「う……うおおおぉぉっ！！」
抜けないほど深く食い込んだはずの戦斧が、引き抜かれ薙ぎ払われた。
初めて二つの刃がぶつかり合う。
「なっ――！」
バスコが驚愕の色を見せた。分厚い戦斧の刃が、真っ二つに折り飛ばされたのだ。
「武器はただ振り回せばいいというものではないのですよ。
まぁあなたの単純な頭で、それが理解できるとは思えませんがね」

タシュアの大剣が閃く。
黒い残光としか言いようのないものが軌跡を描く。
あっさりとバスコの左腕が切り落とされ、脇腹まで黒い刃が食い込んだ。
激痛に弟が絶叫する。
「痛みだけは、人並みに感じるようですね」
言いながらタシュアが、容赦なく両足をも切り落とした。
――ナティエスと同じように。
「いかがです？　少しはやられる側の痛みがわかりましたか？」
冷酷なまなざしがバスコを射る。
「たっ……助けてくれ……アニキ……」
弟の、兄への懇願。
だがタシュアの答えは冷たかった。
「そう言った方々に、あなたは何をしてきました？」

Episode：27

ナティエスをはじめ、この教室で殺されていた子供たちは、明らかにバスコの敵ではない。
それをこの弟は、己の快楽の慰み物とした。
抵抗などしようのない子供たちを捕まえ、わざと苦しむような傷つけ方をし、そのさまを見て喜んでいたのだ。

「きょ、兄弟じゃねぇか……なぁ……」
「ずいぶんと都合のいい脳細胞のようですね。たった今その兄弟を殺そうとしていたのは、どこのどなたですか？
それに私にとって兄弟といえるのは、あの二人だけです」

必死の懇願に、タシュアはそう言い放った。
漆黒の剣が、再び大きく振るわれる。

「兄弟を殺しても何とも思わねぇのかよぉっ！！」
「――死ね」

バスコの首が飛んだ。
吹き上がった血が辺りを紅く染める。

その返り血を浴びるタシュアに、表情はなかった。ただ冷たい視線で、骸となった弟を一瞥しただけだ。
そして振り返る。
教室の奥にはまだ、倒れたままの子供たちの姿があった。
中でもいちばん小さい遺体にタシュアが歩み寄る。

「すみませんでした……」

この子はまだ十年と生きていない。
あと少し来るのが早ければ、全員を助けられただろう。その思いがタシュアの声を、沈痛なものにしていた。
上着を脱いで少女たちにそっとかける。

「あとで迎えに来ます。それまで寂しいでしょうが、我慢してください」

小さなリティーナを真ん中に、両脇に上級生のクライブとアイミィとを並べて寝かせ、そう三人に言い聞かせた。
そして従属精霊を取り出す。

「あまり使いたくはないのですがね……」

タシュアは普段はこれを使わない。
それは従属精霊に頼らない力をつけるためもあったが、なによりも更なる力を得た自分を制御しきれるかどうか、自信がないからだった。
だがこの期に及んでは、なんとしても押さえ切るしかない。

部屋を見回す。
割れた窓ガラス。叩き壊された机。血にまみれた床。散乱するいろいろなもの。無残な姿をさらす子供たち……。
狂気が走り去った跡は、あまりにも虚ろだ。
そのなかで自分だけがひとり、異質のように思える。

（――いえ、私自身も狂っているのかもしれませんね）

自分とて弟をこの手にかけているのだ。

あるいは何もかもが――狂っているのかもしれない。
ただここで立ち止まっているわけにはいかなかった。
まだ惨劇は続いているのだ。

「今は……悪夢を見ることにしますか」

タシュアとて人を殺すのが好きなわけではない。
それでも……。

もう一度、冷たくなった少女たちに視線を落とす。
この子たちは間に合わなかったが、自分にそれを止めるだけの力があることを、タシュアは承知していた。

「我が内に宿れ、黄昏の狼と地獄の番犬」

言葉に応えてあの独特の感覚が走る。
同時に従属精霊の力を得て、自分が人の範疇を超えたことも知る。

自分自身が殺戮のための道具と化すなど、まさに悪夢以外の何者でもない。
だが、それで助かる命もあるはずだ。
まだ吹き荒れる狂気から、ひとりでも多く救わなければならない。

Episode：28

＞Ｒｕｆｅｉｒ

裏庭の状況は、前庭の方なんて比べ物にならないほどひどかった。
完全な乱戦になっている。こうなるとどうしても、装備のいい敵の方が有利だ。
負傷者もそうとうの数にのぼっていた。これでよくいままで食い止められていたと感心するしかない。
ところどころで倒れたまま動かない制服姿は――たぶん死んでいるだろう。

「状況は?！」
ロア先輩の声に、ここの先輩たちが振り向いた。

「見てのとおりだぜ、先輩。どうにか食い止めてるけど、もう一回きたらあぶねえ」
「――負傷者と救護班を校舎前に下げなさい。戦える者は二人一組でかかること。必ずだよ！」
ロア先輩が矢継ぎ早に指示を出す。
「了解！」

ロア先輩、やっぱり頼もしい。
たぶん他の生徒も同じことを思ったんだろう、心なしか士気があがっていた。
こういう厳しい戦いの時に優秀な指揮官がいるのは、ほんとにありがたい。

「ルーフェイア、行くよ。思いっきりやんなさい！」

「――はい」

一度でいいからロア先輩とて実戦でペアを組みたいと思っていたのが、意外な形で叶った。

でも手放しで喜ぶわけにはいかない。友達が……死にかけているのだから。

そしてそれ以上に、「全力」というのが恐ろしかった。

「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時となせ――フロスティ・エンブランスっ！」

先輩が前方に魔法を放ち、たちまち辺りが凍りつく。そこへあたしが間髪入れずに踊り込んだ。

慌てた敵兵が、魔法を唱えようとする。

――遅い。

敵が呪文を唱え終わるより遥かに早く、あたしの太刀が閃いた。

振り向きざまにもうひとり。

「ルーフェイアっ！」

先輩の声。

同時に周囲に、すさまじい炎が巻き起こった。

敵兵が次々と燃え上がる。

その中をあたしは戦う相手を求めて駆け抜けた。

まさか訓練生がここまでやるとは思わなかったのだろう、あたしたちの反撃に驚いた敵が銃を乱射しだした。

一瞬あたりに視線をめぐらせて、場所を確認する。

――いた。

瞬間、敵とあたしの目があう。
敵が銃口をこっちに向けて狙いを定め、あたしは地を蹴った。

打ち出される銃弾。
ためらわず突っ込む。
魔法の盾が弾をはじく音。
斬撃。
あたしの太刀が血の軌跡を描く。
そのまま周囲を見回すと、敵の兵士があとずさった。

「ば、化け物……」

――ひどい。

あまりな言葉に、さすがにそう思う。
けど。

――それが事実なのかもしれない。

返り血を浴びながら敵を屠るあたしは、たしかに化け物にしか見えないだろう。
そのあたしが、たちまちその兵士も血祭りに上げる。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：２９

一歩、出た。
怯えた悲鳴があがる。
完全に浮き足立ったあたしの周りに向かって、すかさずロア先輩がこんどは雷系呪文を叩き込んだ。
また何人もがいかずちの餌食になる。
でも、中心にいるあたしは無傷だ。
太刀を構えると、周囲から敵が引く。
その時、後ろで絶叫があがった。
――セアニー？
この声、同じクラスのセアニーだ。声から判断して致命傷。
でも、そっちへ振り向く余裕さえない。回復魔法をかけるなんてなおさらだ。
――ごめん、セアニー。
あたしは心の中で謝りながら、再び敵に突っ込んだ。
キリがない。
普通だったらこれだけ戦えば、どっちかに戦局が傾き始めるはずなのに。いったいこの敵は、どれだけの兵力を投入したのか。
と、敵兵を運んできている大鳥が、堕ちていくことに気がついた。
鳥の翼が燃えている。きっと誰かが魔法で……。

――そうか！

船団にどのくらいの兵がいるかは分からない。でも輸送手段をなくしてしまえば補充は出来ないし、船からの上陸は地点が限られる。きっと今やってるのは、タシュア先輩だと思った。いち早くそのことに気づいて、まず鳥を落しにかかったんだろう。

「ロア先輩！」

敵を切り倒し、わずかに空いた時間に叫ぶ。

「鳥です！　あれを落さないと！」

「鳥……？　あ、そういうことか！」

再び指示が出る。銃火器持ちと魔法に長けた生徒がどうにか集められ、空を舞う鳥を攻撃し始めた。

堕ちた鳥と兵には、接近武器を持つ生徒がとどめを刺す。

――あれ？

倒された大鳥の足に付けられてる、識別環。見たことがある。

隙を見て近寄って、外してみた。

「ロア先輩、これ……」

「なにこれ、ロデスティオ国の傭兵隊の紋じゃない」

あの国の傭兵隊は、汚れ仕事をするので有名だ。ただ証拠はなくて、そういう「噂」だけだった。

所属不明の敵と、そういう傭兵隊の紋。

混乱させるためにわざとやってる可能性もあるけど……たぶん外し忘れだろう。そのほうが、兵装なんかが納得行く。

でも、理由が分からない。
ロデスティオの誰かがここを邪魔だと思ったんだろうけど、そう考えた根拠が掴めなかった。
「まぁいいや、これ、あたしが預かるから。さ、ルーフェイア、出て」
「はい」
そう。悩むのはあとでも出来る。
先輩が拾った識別環の報告をするのを聞きながら、あたしはもう一度切り込んだ。
兵を運んでた大鳥を落としたのが良かったらしい。少しづつだけど、敵の数が減ってきている。
けど……それでも劣勢だった。
生徒たちの悲鳴が、叫びが、途切れることなく続く。そのなかには明らかに、死のうとしている声が混ざってる。
「俺らの学院、好き勝手になんかさせるかよっ！」
誰かが叫んだ。
はっとする。
――「俺らの」なんだ。
この学院にいる生徒のうち、かなりの数が孤児だ。シーモアもナティエスもイマドも……やっぱりそうだ。
当然頼る人もなく帰る場所もない。この学院以外に居場所がない。

けどあたしは――違う。

戦場を渡りあるっているとはいえ両親は健在だ。
それにたとえこの学院を辞めても別に困ることもない。路頭に迷うということ自体が、あたしの場合はありえなかった。

みんなはこの学院を、家を守るために戦っている。

――じゃぁ、あたしは？

答えは虚ろだ。
長い年月、血統を重ねた傭兵の一族が生みだす、血の結晶。
それがあたしだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：３０

幼い頃から考えるより先に身体が動いた。
呼吸するくらい自然に刃を振るい、戦場を駆けた。

――今も。

突っ込んできた敵の剣を、身体を入れ替えてかわす。その間に手は自然と太刀を振り上げて……一閃。
相手が倒れる。
それを横目で見ながら、今度は敵が固まってる場所に上位の攻撃魔法。

――あたしは、なんのために？

背後から襲いかかった相手には、後ろを向いたまま下位の炎魔法。
怯んだ隙に反転して斬撃。

――理由なんてなかった。

戦場で毎日を過ごしながら、本当はすぐにでも逃げ出したかった。
そうしなかったのは……周囲の期待と、勝手に動く身体とをもてあましたからだ。

あたし自身の思いとは関係なく、才能だけはあった。まるでプログラムされているかのように、身体は勝手に動く。

たまたま戦場にいて、なおかつそれだけの力があって。
ただそれだけの理由で、戦っていたことに気付く。

誰もが必死に戦っているこの場所で、自分だけがひどく浮いている気がした。

虚ろなまま手を血に染める狂った小娘――それがあたしだ。

「――来ないで」

唇から言葉がこぼれる。

三人同時ならと思ったのだろう、確信の表情で迫る敵兵。

「だめよっ！　来ちゃだめっ！！」

でもあたしの叫びなど聞くわけもなく……数呼吸後には彼らも、物言わぬ死体の仲間となる。

不意に風が舞い上がった。

あたしの長い金髪が踊る。

周囲を敵が取り囲んで、一斉に襲いかかってくる。

「お願い、来ないでっ！」

迫る幾つもの刃。

だがそれが、あたしに触れることはない。

「死にたくなければ来ないでぇっっ！！」

願いは届かず――炎が吹き上がった。

剣を振り上げた体勢のまま彼らが燃える松明と化し、たちまちのうちに灰となる。

こぼれた涙が、小さく炎にはぜた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：３１

＞Ｉｍａｄ

防衛ラインは、徐々に奥へと移ってきてた。

どうみたって不利だ。なんせ向こうときたら、きっちり装備整えたプロ出してやがる。

なのにこっちは上級傭兵隊がたった二人、他に従属精霊使ってるのが俺一人。戦力差は歴然だ。

こっちが防衛側で地の利があるのと、場所が狭くて向こうが一度に入ってこれねぇからどうにか防いでっけど、このままじゃジリ貧ってとこだろう。

「ったく、キリねぇな」

剣を振るいながら思わずつぶやく。

「ほぉんと、どっから湧いてくるんだろね～？」

ミルのやつが能天気な調子で答えてきた。

――誰もお前の答えなんか期待してねぇって。

にしてもこの期に及んでもけろっとしてるのは、多分こいつひとりだろう。

しかも平気な顔して、敵の眼前へふらふら出ていきやがる。

「はぁい、そこどいてくださ～い♪」

「な、なんだお前はっ！」

いや、訊くだけ無駄じゃねぇかな？

「やだぁ、おじさん知らないの？　ミルちゃんだよ～♪」

そう言いつつこいつ、サブマシンガン乱射しやがるし。

たちまち数人が倒れる。

しかもどういう神経をしてんのかミルのヤツ、にこにこしながら死体またぎ超えて、次の獲物を探しに行っちまいやがった。

――頼むからとどめ刺してくれ。

貫通力の高いサブマシンガンあたりだと、よほど当たり所が悪くねぇと即死しない。

当然苦しんだまま放置ってことになる。

ただこれをやられると俺の場合、そこら辺でうめいてるやつの苦しみがモロにぶつかってくるからヤバい。

――ちきしょう！

歯を食いしばって気合を入れた。

ケガもしてねぇうちから、戦線を離れるわけにはいかない。だいいちこの状況で精霊持ちの俺が下がったら、かなりの戦力ダウンになる。

にしてもミルのヤツ、ここのエースか？

むちゃくちゃなやり方とはいえ確実に敵を倒してやがる。しかも得物が俺らみたいな剣じゃないから、ある意味効率がいい。

もっともいくらミルの狙いがよくても、相手の人数が多すぎだ。掃射をくぐりぬけて肉薄してくるやつが後を絶たねぇ。

俺に向かって剣が振り下ろされる。
たぶん向こうは仕留めたと思ったはずだ。
切っ先が届く直前で身を引きながら、左へ避ける。
同時に電撃。
俺が右手で放った魔法石からの放電に、敵が絡め取られる。

「悪りぃな」

一瞬動きが止まったところで胸を突いた。
同時に来る相手の感情は、必死に聞かないようにする。

「イマド、やるじゃん♪　じゃ、あと頼むね～」
「おい、どこ行くんだよ？」

すぐ脇を後方へと走りぬけるミルに、思わず問いただした。

「弾ないも～ん。気が向いたら帰ってくるから♪」
「お前なぁ！　気が向かなくても戻って来い！！」
「ぶ～☆」

例によってのブーイングは無視、とりあえず敵を片付けにかかる。

「おい、リドリア、お前のクラスのタシュアはどうしたんだ？　あいつもここだろう？」
「あたしに聞かないでよ！」

すぐ向こうで、そんなやりとりを先輩たちが交わしていた。

Episode：32

――そういやタシュア先輩、たしかに見かけねぇな。

ってもあの先輩じゃ、命令なんか素直に訊くわけねぇし。ついでにシルファ先輩も見当たらねぇから、きっと二人して好きなとこで戦ってんだろう。

「まったく困ったやつだな。シルファもいないところをみるとあの二人、一緒か？

――イマド、居場所を掴めないか」

「ムチャ言わないでください。戦闘中にンなことしてたら、『殺してください』って言うようなもんですよ」

だいいちこの状況で精神集中して感応なんざした日には、探し出す前に他の連中の苦しみの念で、こっちがどうかなるだろう。

「それにあの先輩じゃ、絶対こっち来ませんって。そりゃ、いれば楽でしょうけど」

セヴェリーグ先輩が一瞬沈黙する。

「……まぁ、そうなんだろうが……。

にしても厳しいな。仕方ない、もう一度魔法いくぞ。後退しろっ！」

「了解」

いつまでも途切れない敵の攻撃に、やむなく先輩が後退の命令を出した。

カバーしあいながらの後退が始まる。

ただ退却ってのは突撃よりよっぽど難しい。

俺の隣にいた女の先輩が、後退し損ねて撃たれた。

とっさにその身体に手を回して、抱きかかえて連れていく。まだ生きてるのにこのまま放っておいたら、魔法で焼死体になるのは確実だ。

「助けて……痛い……」

「助かりたかったら黙って我慢しろっ！」

思わず怒鳴りつけた。

他の連中ならともかく、俺の場合は痛い痛いと騒がれっと、こっちまで被害こうむる。

けど人の身体ってやつは重い。俺も力がない方じゃねぇけど、普通には動けなかった。

「イマド、頭下げてっ！」

ミルの警告に、とっさに体勢を低くする。

頭上を弾が通り抜けて、後ろの敵が絶叫を上げた。

こんな言い方したくねぇけど、即死してくれたおかげでさして念を食らわずに済む。

どうにかこの先輩を抱えたまま、後退しきった。

「悪りぃな、助かったぜ」

「べっつに～。でもあとで、お礼にご飯作ってね♪」

――このヤロ。

ちゃっかりしてるとはこのことだ。

「これで全員か？」
「――あとは死んでます」
メンバーを確認してる先輩に、気配を探って報告する。
また吐き気がした。
「そうか。誰か魔法使わないやつ、彼女を奥の救護班のところへ連れて行くんだ。
よし、もう一度魔法いくぞっ！」
さっきと同じように、炎系の魔法が一斉に放たれる。
あの灼かれる感覚もどうにか振り切った。
「思ったほどの効果はなしか。さすがに向こうも馬鹿じゃなかったようだな」
先輩の言葉に炎が収まった坂道を見ると、どうにか防ぎ切ったらしい敵が性懲りもなく来てやがった。
一応プロなだけあって、同じ攻撃はそうそう通用しないらしい。
――だったらこっちはどうだ。
俺にしか使えないテを試す。
魔法は防ぐ手段があるだろうが、これはそうはいかないはずだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：３３

いったん心を閉じ込めてから、周囲に溢れる苦痛の念に同調する。
自分が巻きこまれないギリギリのところでバランスを取りながら、そいつを集めて増幅させて……。

――行け。
一気に放つ。

俺みたいにしょっちゅう他人の念に晒されて生活してるならともかく、普通の人間がいきなりこんなもの食らったら、まずひとたまりもない。
思惑通り、いくつもの絶叫があがった。
狂気があたりを覆い尽くす。
怯え、怖れ、錯乱し、倒れてのたうちまわり、そのままショック死するやつも出る。

――まぁいいとこか？
もっとも俺のほうもそれなりにダメージは来て、荒い息で膝をつく羽目になっちまったけど。

「いったい……何をしたんだ？」
セヴェリーグ先輩が呆然としながら訊いてきた。

「一種の精神攻撃ですけど、上手く説明できません」
それに説明したって、どうせちゃんと理解はできないだろう。

「そうなのか……？　まぁいい、だいぶ敵も減ったことだしな。

で、君は大丈夫なのか？」
「少し休めば、大丈夫です」
――多分。
ただこの状況じゃ、ダメですとはさすがに言えない。
「そうか。とりあえず君のおかげで攻撃も下火になった。少し奥で休んでくるといい」
「――すみません」
先輩の言葉に甘えて、救護班のあたりまで下がる。
「あれ、イマドどしたの？　どっかケガ？」
どういうわけかミルのやつがいて、ごちゃごちゃと話しかけてきやがった。
「なんでもねぇよ」
「あ、そぉ？　でもさでもさ、さっきのすごかったね～♪　なにしたの？」
「るせぇなっ！　黙れよっ！」
気づいた時には俺、こいつを怒鳴りつけてた。
「イマドぉ？」
「――悪りぃ。ひとりにしてくれ」
「は～い」
ミルが離れてく。
自分がかなりイラついてるのが分かった。
もっともずっとこの苦痛に晒されてることを考えれば、よく持ってる方だとは思う。
ともかく少しでも休もうと、感覚を遮断して閉じこもった。

――ダメか？

周囲の狂気を、シャットアウトし切れない。向こうの方が強すぎる。

冬の窓から冷気が忍び込むように、俺の中へ入ってくる。

いや、もしかすると、俺自身が狂気そのものかもしれなかった。

そして周囲をを惹きつけてるんだろう。

「イマド、出られるか！」

不意に呼ばれて、現実へ引き戻される。

時間は長かったのか短かったのか分からない。

「すまない、前線へ出てくれないか」

「――了解」

剣を手に立ち上がる。

本来あったはずの大義名分がどこかへ押しやられて、誰もが狂ってくように思えた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：３４　抵抗

＞Ｓｙｌｐｈａ

低学年の避難を終えるのに、意外と時間がかかった。
だが避難したのが百人どころじゃないうえ、六歳の子までいることを考えれば、これは仕方がないだろう。

最後のクラスと一緒に地下へと降り、扉を閉める。
ナティエスを静かな場所に寝かせてから、私は後輩たちのほうへ振りかえった。

「みんな……無事だったか？」
この問いに、クラスの面倒を見ていた上級生がうつむく。

「そうか……」
だが落ち込んでいるわけにはいかなかった。戦いはまだ始まったばかりだ。

ざっと地下を見回してみる。
出入り口は全部で五つ。うちエレベーターは止められたようだから、さほど心配ないはずだ。
残りの四つは、扉の向こうが階段。敵兵が見つけたら、たちまち侵入してくるだろう。

この学院の構造を必死に思い浮かべる。
いま降りてきた北西の階段は、私も知らなかったほどだ。北東側の階段も割合見つけづらい。

やはり危険なのは、南側の二つだろう。

「シルファ！」

「――ディオンヌ？」

同じクラスの彼女も、上級傭兵隊だ。

「そっちの被害は……ってだいたいがシルファ、低学年担当じゃないでしょ？」

「え？　あ、その……」

どう言えばいいのか分からなくなる。なにしろ私のしていることは、命令違反だ。

思わず口篭もった私を見て、ディオンヌが笑った。

「ま、とりあえず聞かないでおくけど。けど地下へ避難なんて考えつかなかった。やるじゃない」

「いや、これは私じゃなくて……」

「ということは彼氏？　ま、シルファの彼氏ときたら性格はともかく、優秀だしね。

で、このあとはどうしろって？」

悪戯っぽい調子で彼女が尋ねてくる。

「その、そこまでは……」

だいいちタシュアに訊いたとしても、「そのくらいは自分で考えてください」と言われるだけだろう。

「なんだ、ちょっと期待したんだけど。

まぁいいや。そしたらどうするか、さっさと決めないとね」

「ああ」

彼女と二人で子供たちをみている年長クラスを一旦集めて、人数を確認する。

「この人数で、チビちゃんたちみきれるかな？」

そんな独り言をいいながら、ディオンヌが後輩たちを分けていった。

傭兵隊か候補生にあたる一六歳以上を守備に回し、十歳から一四歳の子にはさらに年下の子の世話を、頼むことにする。

「いい、あなたたち。ちゃんと言うこと訊くのよ」

「うん、わかった」

口々に低学年の子供たちが答えた。今が非常時であることは、さすがにこの子達も分かっている。

「ディオンヌ、できれば南の出入り口二つには、私たちが……」

「手分けするわけね」

全部言い終えるよりも早く、ディオンヌが察してくれる。

「たしかに上級傭兵隊はあたしたちだけだし、それがいちばんいいかな？

北の二つは分かりづらいみたいだから、他の子でも大丈夫だろうし」

「そう思う」

北側の二つに後輩を回し、南には私とディオンヌ、それになるべく年上の者がくるように調整する。

中央のエレベーターには一応、銃火器を持つもの少数充てた。

「後は待つばかりか」

肩をすくめながら彼女が言う。

「来ないと……いいんだが」

そんな言葉が口をついた。

Episode：35

この地下はたしかにいちばん安全だが、一方で逃げ場が少ない。なんとしても食いとめなければ、またこの子たちが犠牲になってしまう。

そして気が付いた。

「ディオンヌ、その……あの子たちの場所を、変えたほうが……」

「え？　どういうこと？」

訊き返される。

私が説明が苦手なせいで、上手く伝わらないようだった。

「いや……あの場所だと、だから戦闘の時に、あの子たちがもろに目に……」

「――？　あ、そういうことね」

今度もどうにかディオンヌが察してくれた。

低学年は今、エレベーターの手前側にいる。この位置はたしかに広いし動きもとりやすいのだが、ひとつ問題があった。

南を向いているのだ。

激戦が予想される南側にいては、この子たちが殺戮の様子を目の当たりにすることになる。

学院にいる以上はいつか目にする光景ではあるが……今から見せたくはなかった。

なにかの事故でもない限り、六歳そこらの子供が目にするようなことではない。

「エレベーターの向こう側に移動させようか？　向こうなら、さほどでもないだろうし」
「そうだな」
すぐに子供たちを移動させてやる。
「たぶん……出入り口で戦闘になると思う。けど私たちが必ず防ぐから、いい子にしてるんだ」
全員にまたよく言い聞かせた。こう言っておくだけでも、かなり違うだろう。

そして――待つ。
息詰まる時間。

物音が聞こえた。
扉が破られる。
その瞬間を逃さず、私はサイズ（大鎌）を振るった。
血しぶきがあがる。
さらにもうひとり、何が起こったのかも分からずに立ち尽くしているところを切りつける。

これを合図にしたかのように、扉の所で死闘が始まった。
ディオンヌが回っている向こう側でも、さほどの間を置かずに戦闘が始まる。
ただ「扉」という障害物があるため、幸いにも敵が雪崩こんでくることはなかった。
足元に転がる死体が、徐々に増えていく。

――まさに、死神だな。
ふっとそんなことを思う。

低学年の子たちが見ようものなら、私のさまに怖れをなすだろう。
タシュアがよく言っていた。「戦争の狂気に飲み込まれるわけにはいきません」と。
だが今の私は、どうだろうか？
ためらいもなく刃を振るう私は……狂気に飲み込まれているのではないだろうか？

ぬめる足元。
向こうで子供たちが、息をひそめているのを感じる。
自分たちが助かることを願いながら、この恐ろしい時間に耐えているのに気がつく。

瞬間、なにかが吹っ切れた。

あの子たちを守るためならば、それが狂気であろうともいい。
今は何より、力が要るのだ。

Episode：36

突っ込んでくる兵士たちを、ことごとく血祭りにあげる。
同じ場所を守っている後輩たちも、魔法を使いあるいは剣を振るい、必死に防戦する。

それにしてもキリがなかった。
いったいどれほどの戦力が投入されたのか、ともかく尽きることがない。
一回きりならともかくこれだけ戦闘が続くとなると、いくら地の利がいいとは言え厳しかった。

またひとり倒れる。

「誰か、この子を下げてくれ！」

そう指示しながら、目の前に出てきた兵士に迷わず刃を叩きつける。
が。

――しまった！

一瞬血糊に足を取られて、十分に踏みこめなかった。斬撃も浅いまま終わる。
当然次に来るのは敵の反撃だ。

意外なほど鋭い太刀筋を、でどうにか受けとめる。
そこへ更に、別の敵が斬りかかってきた。
避け切れない。

「先輩っ！」
「シーモア？」

聞き覚えのある声とともに、立て続けに銃声が響く。
どさりと重い音を立てながら、次々と敵が倒れた。

「大丈夫ですか？」
「ああ、助かった。　だがどうしてここに？」
この子の持ち場がどこかは分からないが、少なくともここへ来る理由はない。

「タシュア先輩に言われたんです。
あたしら船着場のほうにいたんですけど、最初の予想と違って裏庭やら教室やらが大変なことになってるから回れって」
「そうか……」

さすがタシュアというべきだろうか。
もっともロクな戦闘もしないうちに移動させられたシーモアは、不満そうだった。

「ったく、最初からこうしてくれりゃいいものを」
「そうは言っても……相手が上陸しないうちから来るとは、さすがに……」
「それはそうなんですけど」

口ではそう言うが、憤懣やるかたないという感じだ。

「ともかく、まだ敵がいる。戦線に……入れるか？」
「問題ありません。なにせまだ、戦ってませんから」

頼もしい答えが返ってくる。

「指揮取ってる先輩、今連れてきますよ」

「すまない」

だがこの思いがけない援軍で、守るのがかなり容易になった。もちろんそれだけ、小さい子たちの生き延びる確率も上がる。

船着場部隊のリーダーと共に、戦力を急いで割り振り直して、もう一度私はサイズを構えた。

――ここは渡さない。

どれほどの狂気が押し寄せようとも、必ず退けてみせる。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：３７

再び押し寄せ始めた敵へと踊りこんだ。
薙ぎ払い、切り倒し、ひたすらサイズを振るう。
ただ今度はシーモアたちの援護があるので、かなり楽だ。

狭い扉を挟んでの攻防が続く。
その敵の数が、少しづつ減り始めた。
やがて、誰も来なくなる。

「引いた……のか？」
やっといなくなった敵に、思わずつぶやいた。

「先輩、上見てきましょうか？」
シーモアが気を利かせてそう言ってくる。

「そうだな……危険だとは思うが、行ってくれるか？」
「心配ありませんって」

おどけた調子で肩をすくめると、後輩はさっさと出て行ってしまった。
ただあの子なら心配はないだろう。

――疲れた、な。

さすがにため息をつく。
周囲には数えたくない人数の敵兵が倒れていた。
よくこれだけ倒したと呆れるほどだ。

「シルファ、大丈夫？」
「ああ。
そっちは……？」
ディオンヌが戻ってくる。見たところ彼女にも、怪我はなさそうだった。

「あたしはね。ただ後輩がけっこうやられたわ。こっちも……そうみたいね」

彼女の言うとおりだった。
私は従属精霊を使っているおかげもあって怪我はないが、何人か重傷を負って奥へと下がっている。軽傷となるとその数倍だ。

「助かると……いいんだが」
「さぁねぇ……。
けどともかく、今のうちに手当てしてあげなくちゃ」
「ああ」

それぞれの扉の前に何人かづつ残して、一旦奥へ下がる。
残念ながら既に二人が亡くなっていた。

「――すまない」
それ以外、後輩たちに言う言葉がない。

子供たちを守るためとはいえ、他に方法はなかったのだろうか？
それとも、これでよしとしなくてはならないのだろうか？
ただ、まだこれで戦闘が終わったわけではない。
ここだけは何があっても、守り切らなくてはならないのだ。

「ディオンヌ、もう一度戦力を、割り振りたいんだが……」

「そうね。敵が引いてる今のうちにやっておかないと、どうなるかわかんないし」

すぐに上級生が集められた。

どうすればひとりでも多く生き残れるか、それだけを考えながら戦力を割り振る。

これ以上狂気に、後輩たちを渡すわけにはいかなかった。

Episode：38

＞Ｒｕｆｅｉｒ

波が……引いた。

どのくらい戦ったかはわからない。ただ鳥を落としたあたりから、襲ってくる敵の数が徐々に減り、気づくと完全にいなくなっていた。

周囲を見回す。

――あたしが。

数えたくない数の骸が足元に転がっていた。

生きている者はない。

――文字通りの皆殺し。

その中央に立って、あたしは虚ろだった。

何も感じない。感じたくない。

機械的に遺体を乗り越え、向こうに集められている負傷者の方へと行く。

別に義務感に刈られたわけではなかった。

ただ何かをして、考えないでいたかったのだ。

目に付いた生徒から順番に、傷の程度に合わせて回復魔法をかけていく。

惨憺たる有様だった。

立っていられるのはまだいいほうで、自力で動けない生徒がかな

りの数にのぼっている。そしてそのうちの何割かは、このままだったら死ぬだろう。
セアニーはもう、息をしていなかった。お腹を裂かれて内臓が見えている。
――ごめんね、セアニー。
こっちで頭を潰されているのは、カノンのようだ。指輪に見覚えがある。
どうみても生きている生徒のうち半数は、もう戦うのは無理だった。
負け戦。
その言葉があたしの頭をかすめた。
諦めるつもりはないけれど、確率としてはかなり高い。そしてあたしは、負けることの悲惨さを、この身で味わったことが何度もあった。
傷ついた仲間を見捨て、やっと逃げ延びて……。
けどこの学院に、逃げ場はない。もし負けることになれば、低学年でさえ死は免れないはずだ。
最低限、痛み分けに持っていく必要があった。
だが……勝ちは少なそうだ。
だいいちこちらがこの有様なのに対して、向こうはまだ無傷の戦力が残っている。
「ルーフェイア、キミ、大丈夫？　どっか……おかしいよ？」
「大丈夫です」

あたしよほど疲れてる顔でもしてたんだろうか？　ロア先輩が心配気に訊いてきた。

「そぉ？　それならいいけど。でもムリしないでよ？」

「はい。

――それより先輩、このあとどうしますか？」

先輩が肩をすくめた。

「……どうにもならないよ。かと言って、引き下がるわけにもいかないけど」

それはそうだろう。

どんな手を使ってでも向こうに兵力を引き上げさせなければ、あたしたち自身の命がない。

かといって、方法はないに等しかった。

向こうはおそらく相打ちでも構わないと思っている。でもこちらは、これ以上死傷者をだすわけにいかない。

条件的にかなり分が悪いのだ。

「ともかく守りきらなきゃね。

ルーフェイア、裏庭はキミが頼りなんだから、しっかり頼むよ？」

「……はい」

そう言われてさっきの光景がよみがえる。

周囲に折り重なる死体。

うめく者さえない、物と化した人の群れ。

本当は……逃げ出したい。

戦いのない場所で閉じこもっていたい。
けどそれが許されるわけもないことを、あたし自身がいちばんよく分かっていた。
あたしは、戦力なのだ。
例えば戦車や機関銃と同じように。

そしてふと思う。
「戦うこと」。それ以外にあたしに、価値はあるのだろうか？
そもそも戦うこと以外なにも出来ないあたしに、どんな存在理由があるのだろうか？

兵器としてみるなら――あたしは間違いなく優秀だ。
でも、人としては？
殺すこと以外知らないあたしは、果たして……。
その時。

『――学院長のオーバルです』
通話石から聞こえた声に、誰もが顔を上げた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：３９

＞Ｉｍａｄ

やっと波が引いて、どうにか俺らは一息ついていた。
ただそれも、三度にもわたる一斉魔法攻撃でどうにか凌ぎ切ったって状態で、かなり死傷者が出てる。
従属精霊使ってる連中はともかくとして、それ以外でまだ普通に戦えるのは、かなり少なくなってた。

「まったくどこの誰だかは知らないが、ソイツはそうとう学院が嫌いらしいな」

セヴェリーグ先輩が誰にともなくつぶやいた。
もっともそう言いたくなる気持ちはわかる。ヤツらぜったい、こっちを根絶やしにしようってつもりだ。

――まぁそうじゃなきゃ、あんな戦力持ちこまねぇだろうけど。
それにしたってこっちは訓練生ばっかだ。プロ相手じゃ分が悪すぎる。

「次が勝負だろうな」
「ですね」
って言うか、次で決まらなかったらかなりの確率で負けだ。

――冗談じゃねぇって。

この学院は早い話、俺らの『家』だ。
別に比喩なんかじゃない。ここに来てる生徒のうち、帰る場所が

ないヤツはかなりの数にのぼる。
向こうの兵士連中は帰る場所があるかもしれねぇけど、俺らには後なんかありゃしなかった。
学院は文字通り、俺ら孤児たちの命を繋ぎ止めてる。
どっかの正規軍だろうが悪魔だろうが、カミサマ相手でも明け渡すワケにはいかない。

腹を括る。
もう出し惜しみなんざしてられねぇ。
その時。

『――学院長のオーバルです。これから学院の地下にある“門”を復活させ、開放します』
通話石から聞こえた声に、思わずみんな顔を上げた。

つかここ、そんなモンあったのか……。

「門」って呼ばれるワープゲートは、この星のあちこちに昔から点在してる。どういう仕組みかはまだ分かってねぇけど、かならず対になってて、片方から入るともう片方へ出られるってヤツだ。

ただ、ヘタに使うとヤバい。大人でも通ると目まいがしたり倒れたりするシロモノで、年寄りとか子供だと、けっこうな率で死体で出るハメになる。
あとどれも枯れる傾向で、使えなくなって放棄された門は数え切れねぇほどだ。
学院長が「復活」って言ってるとこからすると、ここにある門も、そういう枯れたヤツなんだろう。

――けど、復活ってやべぇだろ。

通るだけでも衰弱するってのに、それを復活させようなんてしたら、ピンピンしてる大人でも間違いなく死んじまう。
学院長は続けた。
『敵は未確定ですが、幾つかの物証から、ロデスティオの傭兵隊と思われます』
敵の正体を聞いて、みんながどよめいた。
確かに……あの隊相手じゃヤバい。つか、ここまで持ったこと自体が奇跡だ。
『正直なところ、彼ら相手に当学院では、勝ち目がありません。ですからどんな手段を使っても門は復活させ、撤退することとします。門が復活したら、低学年から順に――』
指揮取ってる先輩たちの抗議の声が、いっせいに通話石にあふれた。
つか、もし学院の全員の声を伝えられる設定なら、全生徒の抗議で絶対石が割れてるってヤツだ。
「冗談じゃねぇぞ学院長！　死ぬ気かよ！」
「そうよ、それにそんなとこにチビたち通して、殺す気なの？！」
聞こえねぇのを承知で、誰もが学院長に対して叫ぶ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：４０

『いろいろ考えましたが、他に確実な方法がありません。ですからこのまま全員が死ぬよりは、一人でも多く生き延びるほうを、私は選択したいと思います』

また盛大なブーイング。

「チビたち死なせて、俺らだけ生きろってことじゃん」
「さすがにンなマネしたら、明日っから夜眠れねえっての」
「そもそもチビたち嫌がって、門入らないんじゃない？」

一理ある。
そのとき、とんでもない声が通話石に割って入った。

『がっくいんちょー、ミルちゃんにイイ考え、あっりまーす！』

声が耳に突き刺さって、周り中がいっせいに顔をしかめる。
つか、なんで一般生のミルが、全体通話に紛れ込めるんだよ……。
こいつぜったい人間じゃねぇと、改めて思う。

『いま、そっち行っきまっすねー♪』
『いや、ですからミルドレッド、今そういうわけには……』

学院長に同情。こんなときにミルのヤツに入ってこられて振り回されっとか、マジでサイアクだ。

『ですけど学院長の案より、助かる率が高いと思います。私にはアヴァンがあります』

――え？

一転しての、いつもとは似ても似つかない落ち着いたミルの声と内容に、思いっきり面食らう。

数瞬の沈黙。

『……ミルドレッド、本当に可能ですか？』

『門さえあれば』

なんつーか、こいつ何者？？

――あ。

そういや確かコイツ、隣のアヴァン国の貴族連中に、かなりのコネ持ってた気がする。

直接それが今の状態と、どう結びつくんだかはさっぱりわかんねぇけど、なんかやる気なんだろう。

とりあえずこれは、振り回されるアヴァンの連中に合掌だ。

『1分だけ、時間をください』

言ってミルのヤツが、俺のほうに振り向いた。

「イーマド♪」

いつもの調子のにこにこ顔が、なんかすげーヤな予感だ。

「門、開・け・ら・れ・る・よ・ね♪」

「ちょっ――ミル待てっ！」

慌てて、他の生徒から離れた場所へ引っ張る。

「デカい声で言うんじゃねぇっ！」
知られたくねぇ話を平然と言いふらす無神経さは、コイツぜったい宇宙一だ。
「あ、ゴメンゴメン。でもさぁ、開けられるよね？」
「そりゃまぁ、開けられるけどよ……」
そういやコイツ、前に俺が似たようなマネしたの、見たことあったっけ。
「じゃぁキマリ。あたしと一緒に来てね～♪　あ、セヴェリーグ先輩、イマド借りま～す」
勝手に貸し出されたうえ、ミルのヤツ俺の腕を掴んで走り出した。
「てめー放せよ」
「ヤだ。イマドってばルーフェ以外が相手だと、ぜったい逃げるもん」
「あたりまえだろ！」
こんな地球外生物と、一緒にいる義理はない。
けど、他人の話聞くようなヤツじゃないわけで。
『学院長、話ついて準備できました～♪　今そっち行きますねー』
勝手に話進めてやがるし。
「いったい、何する気なんだよ」

Episode：41

「うん、イマドにケンディクの、おとーさんのとこ行ってもらうだけ～」

意味が全くわかんねぇし。

確かにこいつの親父さんケンディクにいるけど、それが俺らが助かることと、どう繋がるのかサッパリだ。

「オヤジのとこって、ならお前が自分で行けよ」

「あーダメダメ、あたし人質やらなきゃだし～」

さらにワケわかんなくなる。

「攫われてもねぇのに、なんで人質なんだよ」

「包囲されてるから～」

いつものこととは言え、この状況でこういう言動ばっかされると、マジでイライラしてくるんだが。

「いい加減にちゃんと説明しろよ！　帰っぞ俺は」

「あ、怒った？」

この言葉にゃさすがにキレて、本気で帰りかける。

「怒ったらダメだってば～。ちゃんと説明するからぁ」

「――いくら戦闘落ち着いてるからって、やっていいこととあることがあるだろ！」

「ゴメンゴメン」

ぜったい悪いと思ってなさそうな顔で、ミルのやつが謝った。
そして一転、マジメな表情で話しはじめる。

「例えばさ、このユリアス国の領海内に、外国船が侵入したとして。その攻撃で、滞在してた他国の要人に何かあったら、完全に国際問題でしょ？」
「そりゃまぁ……」

国際問題で済みゃいいけど、場合によっちゃ戦争だ。
つかその前に、そこまでよそ者を侵入させんなって思うし。

「でさ。あたしに何かあると、アヴァン国が黙ってなかったり～」
「――冗談はあとにしろよ」

つい口が滑る。

「あのねぇ、今こーゆー状態なのに、いくらあたしだって冗談言わないってば～」
「だってお前、存在自体が冗談じゃねぇか」

なんかいろんな意味でイラついてるのもあって、半分八つ当たりだ。
けどミルのヤツ、意外にも笑い出した。

「それって、言いえて妙かも～♪　イマドって時々、おもしろいこと言うよね～」

ぜったいコイツに意味通じてねぇ……。
頭抱えたくなる。

「まぁ冗談はこのくらいにして。
アヴァンの支配層は、あたしに何かあったら大問題なんだよね。で、ユリアス国も自国の領内でそんなこと起こったら、やっぱり困るし。
だから、それ利用して圧力かけるの」

なんかとんでもねぇことを、あっさり言いやがる。

「そんなん、ホントにできんのかよ？　つか、なんで行くの俺なんだ？」
「さっき言ったでしょ、あたしは人質だって」

もう忘れたのかって顔で怒られる。
――ミルに言われるとか、なんかすげー腹立つんだが。
教官に意味不明のことで怒られるほうが、まだマシってヤツだ。

「あたしが学院の外に出ちゃったら、アヴァンは万々歳で、ユリアス国に圧力かける必要なくなっちゃうじゃない。あたしがここに居て危ない目に遭ってなきゃ、ダメなの」
「あー、そゆことか」

やっとなんとか、話を飲み込む。

Episode：42

要するにミルのヤツ、アヴァン国の貴族連中にやたらコネあるの利用して、こっちの政府を動かそうってんだろう。　んでそのために、自分をエサにするってことだ。

「けどよ、このシエラ学院ってＭｅＳだぜ？　ＭｅＳがたとえ攻撃されても立地国は感知せず、がキマリだろ。
そんなんで圧力ったって、かけようねーじゃん」
「そうでもないんだな～」

狡猾、って言いたくなるようなミルの笑み。

「確かにＭｅＳには感知せず、が原則だけど、領土は領土だよ？
そこへ侵入許して攻撃させ放題で、あげくに要人に被害出たりしたらね～。
領海外からやってるなら、そりゃ話は別だけどね♪」
「――オニだなお前」
「そぉ？　駆け引きって、こゆもんだと思うけどな～」

ミルのヤツ、アヴァン国に同じこと言わせるつもりだ。
領海外から攻撃されたならともかく、領海内なのだから責任を取れ――こういう言われ方されたら、このユリアス国に逃げ道がない。

こんなこと考え付くとか、コイツ底ナシに腹黒い。

「ホント言うとさ、本土に連絡さえ出来れば、さっさとこれやれたんだよね」
ミルが珍しく、低いテンションで言った。

「でもほら、こないだの騒ぎで、学院外への通信できなくなっちゃってるから……」

騒ぎってのは、ちょっと前に副学院長が出てっちまった時のことだ。

あん時は実権握りたい副学院長が大騒動やらかして、教官までごっそり連れてっちまったわけだけど、アイツついでに高位通話石まで壊してった。

「あれやられちまうと、復旧大変だからなぁ」

細かい通話石を束ねる高位のヤツは、同じものを作るのが難しいから、壊れるとエラいことになる。

幸いこの学院はＭｅＳなだけあって、予備が用意されてたけど、それでも学院外との通話はまだ未設定だ。　本土から人呼んでやり直すのに、あと何日かかかるって話だった。

「包囲されたら逃げようないし、これはダメかなーって、あたしも今度ばっかりは思ったんだけどね。

けど、門があるなら話が別でしょ。そこを通れば、向こうに連絡出来るもん」

「なるほどな……」

普段の言動からは思いもつかねぇほど、抜け目ねぇヤツだ。

「そゆわけだからイマド、しっかり伝言係してね～」

気楽に言われる。

「まぁダメかもしれないし、そうなったらチビちゃんたちに、門通ってもらうしかないんだけどさ」

本人にその気はねぇんだろうけど、言ってる内容は思いっきり俺

への脅しだ。

「でもさ、なーんにもしないより、ずーっとマシだと思うんだ～」

「まぁ確かにな」

ンな話しながら走って、校舎の前まで来る。

惨状に、思わず足が止まった。

「ひでぇな……」

「ちょっとここまでとは、思わなかったねぇ」

かなりの数のケガ人だ。　それがまともな治療もナシのまま、大半がほっぽっとかれてる。

少し離れた場所、あっちこっちで倒れてるのは……死んで放置されてんだろう。　回収する余力なんざ、残ってねぇから。

Episode：43

ルーフェイアの姿は見えなかった。けどまさかケガするとも思えねぇから、場所移動したんだろう。

「ミルドレッド！　こちらです」

玄関のほうから学院長の声がして、二人で慌ててそっちへ行く。

前へ着いたとこで、ミルが学院長に手短かに、どうするかを説明した。

「つまりミルドレッド、あなたがここに居るのを利用して、間接的に敵に圧力をかけるわけですね」

「ですですー。それとあと、門はイマドに開けてもらって～、本土もイマドに行ってもらいます～♪」

さすがの学院長も、これには驚いた顔だ。

「あなたではなくて、イマドに……ですか？」

「そうでーす」

ミルのほうは驚かしたのが面白かったんだろう、ニコニコしてやがる。

どういうことだと、学院長が俺を見る。

「えーっと、俺、門とか開けられて、通るほうも平気なんで……」

俺の言葉のあとを、ミルが引き継いだ。

「それにほらー、あたしが学院から出ちゃったら、圧力にならないですー♪」

「なるほど、そういうことですか」
学院長はいろいろ最初から事情知ってるんだろう、大して説明ナシで話を飲み込む。
「イマド、もう一度確認しますが……門のほうは本当に、大丈夫なのですね？」
「だいじょぶです」
即答する。この期に及んで、隠したってどうにもならねぇし。
「……分かりました、門を開けるのと本土へ渡るのはイマド、あなたに任せます。どこへ何をどう連絡するかについては、ミルドレッドから詳しく聞いてください。
ミルドレッド、あなたの申し出に感謝します。ですが、すべてをこれに委ねるわけにはいきません。動きがないようなら、当初の計画通り門を通って全生徒を非難させます」
「はい」
声が重なる。
「門は祠の地下です。すぐ行きましょう。
ミルドレッド、あなたもいっしょに来て、道すがらイマドに本土へ渡ってからを説明してください。私はその間に、全校生徒に状況を説明します」
「はーい♪」
相変わらずミルのヤツ、緊張感のカケラもねぇ返事しやがる。けど考えようによっちゃ、こいつが深刻になったらオワリかもしんない。

『学院長のオーバルです。先ほどの作戦を少々変更します――』
全体への説明を聞きながら、俺らは「門」へと急いだ。
――学院を守るために。

シエラ学院に拾われたことが、いいか悪いかは知らない。
けど、ここで俺らは育った。
ここに拾われなかったら、今ごろどうなってたか分かんねぇヤツもかなりいる。
下級生は上級生に育てられて、そいつらがまた大きくなって下級生を育てる。
そうやって今まで、肩をくっつけるようにしてやってきた。

だから……絶対に渡さねぇ。
俺らの未来は、ここから始まるのだから。

Episode：44

＞Ｓｙｌｐｈａ

『学院長のオーバルです。先ほどの作戦を少々変更します』

なぜかミルが通話に乱入したあと、しばらくの間を置いて、再び学院長が話し出した。

「よかった、学院長やめる気になったんだ」

隣でディオンヌがつぶやく。

「いくら劣勢だからって、チビたちを門に押し込んで死なせるんじゃ、サイアクすぎよね」

「ああ」

実際にはそうなるのは一～二割らしいが、それでも納得できるものではない。

『本校に、門を開けられる生徒が存在しました。また、救援要請のルートも確保できました。ですのでまず彼に門の開放と、本土への救援要請をさせることとします』

誰だろう、と思う。

タシュアはやれば出来そうだが……正直、やるとは思えない。ルーフェイアかとも思ったが、それなら「彼」ではなく「彼女」だろう。

――イマドか。

学年主席で桁外れのルーフェイアがいるため、陰に隠れてあまり

知られていないが、次席の彼も相当だ。
それに彼はルーフェイアとは別の意味で、何かいろいろ変わっているところがある。何というか、普通の人間とは違った世界にいるのだ。

『門を開けて救援要請を出してから、一時間だけ待ちます。その間何か状況が動いたという報告がなければ、当初の予定通り低学年から、門を使って脱出します』

ディオンヌがため息をついた。

「まぁしょうがないか。脱出とかやりたくないけど、救援がダメだったら仕方ないものね。
まさか、玉砕するわけにいかないし」

彼女の言うとおりだった。
選びたくはないが……選択肢がない。
最後まで戦うのもひとつの方法だが、勝てる見込みは少なかった。そしてもし負ければ、低学年の子たちも終わりだろう。

『敵軍は編成を立て直して、再度の侵攻を試みると思われます。こちらも編成をし直して、迎え撃ちます。
いずれにせよ、あと長くても二時間です。そのあいだ上級生は、侵攻を何としても防いでください。
――この学院に、未来を！』

そう締めくくった学院長の言葉に、ディオンヌが笑った。

「言ってくれるじゃない。これじゃムリでも、やるしかないわね」
もっともその顔はどこか、楽しそうにも見える。

――やはり、ＭｅＳの生徒なのだな。
だが、私も同じだ。

「よし、これがラストよ。もう後が無いわ、みんな全力で！」
「了解！」

志気があがる。

「指示に従って、みんな移動して。あと回復手段を持ってる人いたら、出してちょうだい。少しでも戦力を増強したいから」

この言葉に、一気に辺りが騒がしくなった。
救護班が、少しでも戦力を増強しようと奔走をはじめる。

「おい、これ使えよ。その程度なら間に合うはずだ」
「回復魔法使うから、ちょっと待ってね」

いつ終わるとも分からなかったせいで出せなかった回復手段を、誰もが差し出す。

「これなら、思った以上にいけるわね」
「そうだな」

さすがにほっとする。この調子なら、ここに相応の戦力を残したとしても、かなりの数を上陸地点の防衛に回せるだろう。

「ディオンヌ、行こう」
この場を後輩たちに任せ、私たちも地上へと向かった。

Episode：45

＞Ｔａｓｈａ

「学院に未来を、ですか」

学院長の言葉を聞き終えたタシュアがつぶやいた。

戦闘に関しては、学院生以上の英才教育を受けてきた彼にしてみると、最初から作戦の立て方が間違っていたようにしか思えない。

（――もっとも、やむをえませんか）

そもそも今回に限っては、高位通信石が壊されて外へ連絡が出来なかったり、指揮の要となるはずの教官が居なかったりと、かなり条件が悪い。

この状況で訓練生の集団がここまで防いだだけでも、たいしたものだろう。

何より通信石が壊されていなければ、タシュアはじめ学院内の通信技術に長けた者たちがどこからか情報を拾って、今回の侵攻を事前に察知していたはずだ。

（先日の騒ぎ……繋がっていたのかもしれませんね）

いろいろな意味で弱体化した学院を、タイミングよく狙ってきたのだ。副学院長が敵とグルだったと考えたほうが、納得がいく。

オーバル学院長を追放して、ここを掌握できればよし。ダメなら混乱させた上で実力行使という、二段構えの作戦が取られていた可能性が高かった。

（まぁ、いまさらですが）

それが分かったところで、この状況が何か変わるわけではない。事が済んでから、真相を追究すれば十分だ。

最大の防衛ラインとなるはずの、海岸へと向かう。

余力のある生徒たちが徐々に集まってきていた。

その中にルーフェイアの姿を認める。

（――この点だけは、さすがですかね？）

一般常識などにはどうも疎いうえ、事あるごとに泣き出すような少女だが、その戦闘能力は下手な傭兵隊を完全に上回る。当然怪我をした様子もなかった。

それどころか、普段気に入って着ている制服を脱いで、戦闘服だけになっているのを見ると、やっと本気になったというところなのだろう。

だがその彼女に、タシュアは違和感を感じた。

「ルーフェイア、なにかありましたか？」

「いいえ先輩、なにも……ありませんけど？」

一見受け答えには、おかしなところはない。ただそれでもタシュアには、表情がどこか違うように思えた。

例えて言うなら魂のない人形のような……ある種機械がプログラムを実行しているだけのような印象を受ける。

「ルーフェイア」

「はい？」

少女が振り向いたとたん、ぱんっという音が辺りに響いた。

タシュアが頬を軽くはたいたのだ。
瞬間、ルーフェイアの顔に感情が戻る。
驚愕、哀しみ、怖れ……さまざまなものが瞳に揺らめいた。
その碧い瞳から、涙がこぼれだす。

（――殺すことに耐えられませんでしたか）

脆すぎるほどに繊細なルーフェイアだ。殺戮を繰り返すことに耐えきれず、自分を閉じ込めてしまったのだろう。

「ルーフェイア、しっかりしなさい。今まではともかく、今度は生半可なことでは勝てませんよ」

そう静かに言うと、少女は必死に首をふった。

「あたし、あたし……殺すばかりで……」

その意味するところは、タシュアにも分かった。
かつての自分と同じように、この少女は「戦うために」育てられてしまった。
逆に言うなら、それ以外に何もないのだ。
大義名分も、守るべきものも。

この状態で人を平然と殺せる人間は、そう多くはない。例え誤魔化しであろうとも、人は人を殺すことに理由を必要とするのだ。
ましてやこの少女は、自分が何をしているのか十二分に承知している。
自分がなんの理由もなく、ただ戦場で居合わせたというだけの理由で、屍の山を築いていることを。
誰も死なせたくない――タシュアに言わせれば甘すぎるのだが―

―ことだけを願うルーフェイアにとって、この状況はまさに地獄だろう。

「殺すだけ……壊すだけ……なんのために……」

泣きながら少女がつぶやく。

この問いに答えられるのは恐らく、同じ戦場で育った自分だけだ。

「ルーフェイア、いいのです。

友人を守る――それだけの理由で」

「え……」

少女が涙に濡れた顔を上げた。

「あなたには友人が大切にしているこの学院を、守るだけの力があります。

ならば彼らのためにその力を使いなさい。そのために例え誰かを殺すことになろうとも、誰もあなたを責めはしません」

「あたし……」

ルーフェイアがうつむいて自分の手を見、ゆっくりと顔を上げた。

Episode：46

＞Ｒｕｆｅｉｒ

頬に鋭い痛みが走ってはっとした。
急に目の前の光景が現実味を帯びる。
自分のしたことを実感する。
あたし、また……。

「ルーフェイア、しっかりしなさい。今まではともかく、今度は生半可なことでは勝てませんよ」

先輩の言葉に、思わず首を振った。
――殺したくない。
他のみんなのように学院を守るためならともかく、あたしはただ単に、意味もなく殺しているだけだ。
それがなにより嫌だった。

「あたし、あたし……殺すばかりで……」

あたしは、殺戮機械でなんていたくない。
人でありたい。
それなのに、それなのに……。

「殺すだけ……壊すだけ……なんのために……」

涙が止まらない。
どうしていつも、こんなことになるんだろう……。
そのあたしに、タシュア先輩が声をかけてくれた。

「ルーフェイア、いいのです。
友人を守る――それだけの理由で」
「え……」
驚いて顔を上げる。
「あなたには友人が大切にしているこの学院を、守るだけの力があります。
ならば彼らのためにその力を使いなさい。そのために例え誰かを殺すことになろうとも、誰もあなたを責めはしません」
「あたし……」
初めて言われた言葉に、思わず自分の手を見つめる。
――あたしに、力が？
ただ殺すだけのあたしが、守る側になれる……？
信じられなかった。
これほど血に染まった手で人を守れるなんて。
でも先輩は嘘は言わない。
なら……そうかもしれない。
――どうする？
自分に尋ねる。
殺すのは嫌だった。
けど友達が死ぬのはもっと嫌だ。
なら、どちらを選ぶ……？
答えは当然ひとつしかない。

自分の意思で顔を上げて、この光景を見据える。
目の前に広がる屍の群れ。
唇を噛みしめる。
もういちどこれを、今度はあたしの意思で……。
タシュア先輩はもう、向こうへと歩き出していた。

「――ロア先輩」
後ろまで来ていた先輩に声をかける。
「他の生徒を下げていただけませんか？　ここはあたしとタシュア先輩とで食い止めます」
「えっ？」
一見自殺行為ともいえる言葉に、ロア先輩が聞き返してきた。
けどあたしに、そのつもりはない。
「あたしとタシュア先輩が全力を出したら、間違いなく他の生徒は巻き込まれます。
ですから別の場所へ、下げていただけませんか？」
「けど……」

Episode：47

「ロア、この子の言うとおりにしてやってくれないか？」
予想外の声に驚いて振り向く。
「シルファ先輩？」

今まで姿を見かけなかった――いつもタシュア先輩と一緒なのに――黒髪の先輩が、いつの間にか後ろにいた。
目が合ったシルファ先輩が、あたしを見て微笑む。

「ロア、ここは私たちに任せて、船着場へ回ってくれ。
それと地下に低学年が避難している。そっちの守りと誘導にも、人を割かないと」

言われてロア先輩が考え込む。

「そうか、教室からちびちゃんたちは避難したのか。
――わかりました、船着場と地下へ戦力を回しましょう。そのほうが被害も少なくなりそうですし」
ここでは最高の決定権を持つ先輩が、そう決断する。

「ルーフェイア、任せたよ。容赦なんてしなくていいからね」
「――了解」
他の生徒たちも動き出す。

『おいルーフェイア、だいじょぶか？』
「イマド？」
通話石から突然聞こえた声に、驚く。直通設定だ。

「ダメよイマド、今非常時だから、私信は禁止でしょ」
『学院長に許可もらったっての。つかお前、まずそれ言うのかよ』
「あ、ゴメン……」

思わず謝る。

『まぁいいや。んでさ、俺ちょっと門開けて、ケンディクまで行ってくっから』
「え……」

なんでイマドに私信の許可が出たのか、これで理解できた。
確かに彼は門を開けて通れるけど、それでもぜったい安全とは言い切れない。
あって欲しくないけど、もしものことを考えて、学院長が許したんだろう。

『すぐ帰ってくっからさ、ケガとかすんなよ？』
「あたしは、だいじょうぶ。イマド……気をつけて」
『ああ』

そこで会話は途切れた。

「覚悟はいい！？」
「負けるもんかよ、来るなら来い！」

そう。
友達のために。
あたしたちの学院のために。
「生」という名の未来を、手にするために……。
それぞれの思いをそれぞれの胸に抱いて、最前線へと駆ける。

「行くぞ、ルーフェイア」
「はい」

シルファ先輩といっしょに、先行していたタシュア先輩の後ろへつく。
坂を下りて、海岸に出る。
それからどのくらい待っただろう？
一時間か、それ以上か。大きな音が遠くから聞こえ始めた。

「始まったな」

船はどれも船着場へ回ったみたいだから、そっちでいち早く戦闘になったんだろう。
一方でこっちは静かだ。
けどあたしも先輩たちも、このまま終わるとは思わなかった。
そして……。

「やはりこちらへ、上陸部隊が来ましたか」

Episode：48

大きく広がる入り江の影から、水面をすべるようにたくさんの小船が現れた。
船着場に戦力を回したとみせかけて、こちらに上陸部隊を出す。常套手段だ。

「ゴミばかり集めても、粗大ゴミが増えるだけなのですがね」
タシュア先輩が毒舌を放つ。

シルファ先輩が静かに目を閉じた。
その身体が、淡く輝きだす。
手持ちの精霊を開放して、同化する荒業だ。普通はこれをやったら喰われてしまうけど、シルファ先輩はよほど相性がいいらしくて平気だった。

揚陸艇が、遠浅の砂浜へ乗り上げる。
その前に立つ、あたしたち。

「我は呼ぶ、黒き雷を纏いし空の飛礫よ、現世（うつしよ）にその姿を留め、全てを消滅せん――」
先輩の詠唱が始まる。

「鳴り響く時の内に棲む者よ、その稲妻持ちて我が敵を打ち砕け――」
あたしも召喚呪文を唱えた。

「――滅裂黒雷弾っ！！」
「――来いっ、アエグルンっ！！」

同時に呪文が完成し、瞬時にあたしたちの周囲が帯電する。
なにしろちょっとした建物ならまるごと破壊する魔法が、同属性でニ重にかけられたのだ。

先輩の呪文が生み出したいくつもの雷球から、無数の雷撃が放たれてあたりを薙ぎ払う。
あたしの呼び出した精霊からも、文字通りの「雷の嵐」が放たれた。
天から地へ、地から天へ、数十条のいかずちが駆け上がり駆け降りる。
空気がすさまじい放電を見せ、轟くほどにスパークした。
あの独特の匂いがあたりに立ち込める。

そしてもうひとつ、肉の焼ける匂いも。
許容量を遥かに超えた電圧がプラズマとなって、敵兵とその兵器とを襲ったのだ。
たちまちのうちに、人が焼け爛れ弾け散る。
強い電磁波に晒された生体の末路だ。

さらにシルファ先輩が、残像を描きながら切り込んで、生き残りに容赦なくとどめを刺す。
――殺戮兵器。
その言葉が脳裏をよぎる。
今のあたしと先輩たちは、まさに無差別殺戮のための兵器だ。

やがて……いかづちが収まる。
あたしたちを中心にした広範囲の円の中は、ひどく静かだった。
時折機械がショートする音が聞こえるだけだ。

「タシュア、何をのんびりしているんだ！」
向こうのほうから、シルファ先輩に怒られる。
「やれやれ、焦ったからといって、どうなるものでもないでしょうに。
――行きますよ」
歩き出しかけた先輩が、一瞬体勢を崩した。
「先輩、大丈夫ですか？！」
慌てて回復魔法を唱える。
あたしの精霊召喚と違って、先輩の魔法はその生命力を削る特殊なものだ。当然その効果が大きいほど、削られる分も大きい。
「ルーフェイア、これには回復魔法は効果がありませんよ」
言いながらタシュア先輩が、愛用の両手剣を抜く。
「あ、すみません……」
あたしも愛用の太刀を抜き放った。

Episode：49

向こうから、難を逃れた兵士たちが迫ってくる。

先行しているシルファ先輩に続いて、タシュア先輩が出た。幸い心配したほど、体調が悪いわけじゃないみたいだ。

その周囲へ、敵兵が殺到する。

――それなら。

敵の陣形を見た瞬間、なにをすべきかが分かる。

これがあたしの……力だ。

「空の彼方に揺らめく力、絶望の底に燃える焔、よみがえりて形を成せ――フラーブルイ・クワッサリィっ！」

先輩たちめがけて、炎系最上位を放つ。

周囲に集まっていた兵士たちが、劫火に晒され灰になる。

「やれやれ、無茶をしてくれますね」

タシュア先輩が苦笑する声を聞く。ただその声は、どこか面白がっているようだった。

炎の中から光の尾を引いて、シルファ先輩が敵陣へ踊り込む。

淡く光る髪と身体。紫水晶の双眸。

大鎌が風を鳴らし、舞うように弧を描く。

刃が閃くたび、敵が倒れていく。

さらに猛火の中から漆黒の剣をたずさえて、タシュア先輩が歩み

出る。
焔に照り映える白銀の髪。白い肌。紅い瞳。
そしてなにより、冷たい死神のまなざし。
「おや、他の方は見ているだけですか？　それでよく、軍隊として成り立っていますね」
揶揄するような口調。
「うわぁぁぁぁっ！！」
耐え切れなくなったのか、兵士たちが闇雲に突っ込んできた。
白と黒の刃が閃く。
たちまち先輩たちの周囲に、骸の山が築かれていく。
そしてあたしは。
「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時となせ――フロスティ・エンブランスっ！」
魔力全開の冷気魔法を、立て続けに後方へ放つ。厚い氷壁が出来て、ここから学院へ続く唯一の道がふさがれる。
こうしておけばいくらプロの兵士でも、そう簡単には侵入できないはずだ。
さらに足止めされた兵士たちに、呪文を叩きこむ。
「猛き龍の咆哮、風の悲しみは天（そら）へといのちを返す――ウラカーン・エッジっ！！」
放たれた竜巻が辺りを薙ぎ払い、風の刃が兵士たちを切り刻んだ。
恐らく初めて目にしたのだろう。常識を無視した魔法戦に敵がひるむ。

瞬間、容赦なくシルファ先輩のサイズが振るわれた。
一閃、二閃。
たちまち骸が積み重なる。

「――ば、化け物っ！」
「言うことはそれだけですか？　もう少し、独創性がほしいものですね」

先輩の辛辣な言葉。
そしてあたしも、その兵士の言葉に傷つくことはなかった。
化け物でもいい。
この学院を、あたしは――守る。

Episode：50

さらに次の呪文を唱える。
「――アシッド・ディゾリューションっ！」
魔法で生み出された水が、彼らの上に覆いかぶさる。

「馬鹿にするなよ、この程度の呪文――」
たしかにこの程度の呪文じゃ、ほとんどダメージは与えられない。
――けど。

「ケラウノス・レイジっ！」
上級雷系呪文が水を伝って、本来よりも遥かに広い範囲を射程に納める。範囲のせいで威力こそおちたけど、いかづちが一瞬のうちに相当数の兵士を感電させ、身体の自由を奪う。
魔法にはこういう使い方もあることを、彼らは知らない。
そこへ先輩たちが突っ込み、鮮やかに切り込む。

飛び散る紅い滴。
上がる絶叫。
――一方的な、虐殺。
戦いの狂気がここへ収束していく。

「やむをえん、あれを出せっ！」
敵の将校が叫んだ。

「おや、この期におよんで、まだ何かおもちゃでも出すつもりですか？」
当然だけど、将校の答えはない。
代わりになにか隠者っぽい人が、呪文を唱えた。

空気が揺らめいて、巨大な生き物の姿に変わっていく。

「まさか、魔竜……？」

「そのようですね」

先輩が肯定する。

その辺りをウロウロしている竜とは、まったく異なる生き物。

精霊を喰らって力を得た、そう言い伝えられている、人間を嫌う無慈悲な存在。

『ひ弱な人間ふぜいが何をするつもりだ？　滅びる宿命の身で、我にかなうと思うか？』

竜の口から、意外にも人の言葉が放たれる。

「そういう割には、その人間ふぜいとやらに、あなたは従っているようですがね」

すかさずタシュア先輩が言い返した。

「自分の主を見下して、ようやく精神の均衡でも保っているのですか？　だとすれば、ずいぶん情けない話ですこと」

低いうなり声。あまりな言われように、さすがに気を悪くしたのかもしれない。

ゆら、と竜が動く。

『愚かすぎて、己の立場も分からぬらしいな……』

その顎が大きく開く。

シルファ先輩がわずかに動いた。紅いくちびるから、呪が紡ぎだされる。

あたしも別の詠唱を始めた。
「根源の焔、時の風……」
ごう、と音を立てて、炎が吐き出される。
焔が周囲で踊った。
「それで、これがどうかしましたか？」
平然とタシュア先輩が言う。
シルファ先輩が張った結界と、それぞれが元から持っている精霊の力とが、炎を防ぎきっていた。
『きさまら、何者……』
竜の言葉に驚愕が混ざる。
「いま光の波となり、世界の境界を越えてここに集え――」
あたしの呪文が完成する。
「ルドラス・アグネアスっっ！！」
究極ともいえる魔法が炸裂した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：５１

太陽が落ちたかのような光が辺りを灼く。魔竜の苦しげな咆哮が響く。
隙を逃さず、シルファ先輩が両足を切り飛ばした。
地響きをたてて、竜の巨体が倒れる。

『その、呪文を……易々と使うなど、お前は……』
「人間を甘くみて、長々と能書きなどを言っているからですよ」

タシュア先輩が答えて、漆黒の大剣を振り上げた。

「これに懲りて次からは気をつけるのですね。
――もっとも次はなさそうですが」

一瞬の残像。
魔竜の首が落とされる。

「どれほどの力があろうとも、使い方を知らなければ無意味なのですよ」

そう言う先輩の前で、音もなく竜の身体が崩れ始めた。
巨体が徐々に輪郭を失い実体を失い、やがて砂の山に変わる。

「さて、あなたがたの切り札とやらはこの通りですが？」
目の前で起きた予想外の事態に、兵士たちが硬直する。
「やる、というのでしたらかまいませんよ。本当の恐怖というものを教えて差し上げます」

息詰まる沈黙。
どちらも引き下がるわけにはいかない。
空気が張り詰めていく。
だが、それが破れる事はなかった。

突然彼らのあいだに、ざわめきが広がる。
慌しく人が行きかい始める。
その間も先輩は、警戒を解こうとしなかった。むろんあたしもだ。

――今までいちばん長い時間。
と、通話石に報告が入る。
『停戦に成功しました。敵が攻撃をやめた場合は、あなたたちも応じてください』
そして……彼らが武器を捨て始める。

「我々の部隊は停戦を申し込む。貴殿らの温情ある措置を願う」
「善処しましょう」

タシュア先輩が将校たちとやりとりするのを、あたしはただ見ていた。
これで本当に、終わったんだろうか……？
あまりにもとつぜん過ぎて実感が湧かない。

――あんなにたくさんの人が死んだのに、こんな風に簡単に終わるなんて。

どうしていいか分からずに、辺りを見まわした。
累々と折り重なる屍の群れ。
狂気の、結末。
これを招いたのは、まちがいなくあたしだ。

「う……」
「えっ？」

うめく声に驚いて声の主を探す。
――生きてる！
敵のひとりが無惨な姿で、それでもまだ生きていた。
慌てて駆け寄る。

「いま、呪文を」
「お嬢ちゃん……むだ、さ……」
「でも！」
このまま放っておくことなどできるわけがない。

「いいんだ、もう……」
その言葉に、どう答えていいか分からなかった。

Episode：52

「ごめんなさい、ごめんなさい……」
涙がこの人の上に落ちる。

「優しい、な……。
そんなに……優しくちゃ、さぞ……辛いだろうに……」
彼が、そっとあたしの手を握った。

――温かい手。
あたしたちと何も変わらない。

「ごめんなさい、あたし……なのに……」
「気に、するな。
これが……戦……争……」

ふっと、彼が目を閉じた。

「ごめんなさい……」

その場からあたしは動けなかった。
あたしたちが生き延びるために、どれだけの未来が絶ち切られたんだろう？
どうしてみんなで、一緒に生きていけないんだろう？
どうして……。

「やっと通れたー。この氷の壁って何？」
「うわ、こっちすごいね」

他の場所も一段落したのだろうか？　どこからか他の生徒たちが集まってきた。

「これ、たった三人で？　信じらんない」

「これじゃ軍隊いらないな～」

みんなが口々に感想を言う。

「やっぱＡクラスだな」

「Ａどころかｓｓじゃない？」

あたしたちに贈られる、賞賛の言葉。

――聞きたくなかった。

「いったい何人殺したんだろうな？」

「数えてみれば？」

「――やめてっ！」

思わず叫ぶ。

周囲がしんと静まり返った。

「お願い、やめて……言わないで……」

また涙がこぼれる。

殺したくなんてなかった。

ひとりだって傷つけたくなかった。

それなのに……。

「学院の生徒にしては、ずいぶん安直な考えですね。

『人を殺す』ということがどんな意味を持つのか、それさえ理解

していないのですか？」

泣いているあたしに代わってそう言ったのは、タシュア先輩だ。

「仲間のため、学院を守るため、理由はいろいろ付けられますが、所詮人殺しには変わりないのですよ。

もう少しよく考えなさい」

さっきまで敵に向けられていた冷たい視線が、今度は生徒たちに向けられる。

Episode：53

「言っておきますが、ルーフェイアはそれを承知で相手を殺しています。
上級傭兵隊になろうなどと言うのなら、その程度のことはあなた方もわきまえるのですね」

みんながばつが悪そうに下をむいた。

「――ルーフェイア、行きますよ」
「あ、はい……」

先輩にうながされて立ち上がる。
周囲のあたしを見る眼が怖かった。

みんなが責めているわけじゃないのは分かる。
ただそれでも……見られるたびに、自分のしたことを思い知るのだ。
――殺すだけの自分を。
やっと戦いという狂気が去ろうとしている中、あたしは逃げるようにして館内まで戻った。

「ルーフェイア、だいじょぶか！」
玄関のところでイマドと出会う。

「あたしは……大丈夫。でも……」
泣かないように唇を噛みしめて……でもやっぱり涙がこぼれた。

「泣くなって」

「けど！」
「わかってる。
んでルーフェイア、魔法使えるやつは、別棟のホールまで来いってさ」

彼が急に、ぜんぜん違うことを言い出した。
なぜか少しほっとする。

「別棟のって……あのセレモニーとか、するところ？」
「ああ」

訊けば負傷者が多すぎて、診療所に収容しきれなくて、急遽そこが治療場所に選ばれたのだという。

「お前魔力強いからな。急いで来てくれって、ムアカ先生から伝言だぜ。
それからタシュア先輩とシルファ先輩も、同じ理由で急いで来てほしいそうです」
「そうですか、わかりました」

それだけ言って、先輩たちがホールへと向かう。
あたしも続いた。
近づくにつれ、血臭が漂う。

「ひどい……」
中は、そうとしか言いようのない有様だった。

野戦病院でもこれほどひどいのは、そう多くはないだろう。
これでは簡単な裂傷や軽い火傷程度の生徒は、放って置かれているに違いなかった。

「良かった！　あなたたちすまないけど、こっちへ来て手伝って！」
大声でムアカ先生――この学校に併設の、診療所の先生――に呼ばれる。
向こうに寝かされてるのは、よくこれで生きているというほどの重傷者ばかりだ。

「回復魔法は使えるでしょ？
胸の上に怪我の部位と、どの魔法使うか書いたのが置いてあるから、かけてやって」
「はい、わかりました」

あたしの答えを待たずに、医療器具を片手にムアカ先生が駆けて行った。
教官や救護班の生徒、手の空いている先輩たちとまさに総出だ。
その中へあたしも加わる。

――これでみんな、助けられるんだろうか？

そんな疑問が浮かんだ。
これだけの負傷者だ。例え大都市の病院でも対応しきれないだろう。
ましてや学院にあるのは、薬も機材も限られた量だけだ。
あれだけ失って、まだ失くさなければならないんだろうか？
戦いという名の狂気は、どれだけ奪ったら気が済むのか……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：５４　勝敗

＞Ｔａｓｈａ　Ｓｉｄｅ

負傷者の集められたホールは、とても治療をする場所には見えなかった。

薬も機材も、それどころか寝かせるためのマットさえ足りない。

「タシュア……その、大丈夫か？」

「私はなんでもありませんよ」

パートナーとそんな会話をしながら、立て続けに魔法をかけていく。

だが死んでいく者も多かった。

運び込まれる者。

運び出される者。

生と死が交錯する。

その中で黙々と、タシュアたちは作業を続けた。

できる限りの応急手当をし、使えるだけの魔法を使い……。

ただその魔法も、十分なほどにはかけてやることができない。なにしろ負傷者の数が多すぎるのだ。

この設備では、とても対応しきれなかった。

と、タシュアの姿を認めたのだろう。ロアが険しい表情で詰め寄ってきた。

「ちょっとタシュア、聞きたいことがあるんだけど？」
「今はそれどころではないでしょう。怪我人の治療がなにより先決です。そんなこともわからないのですか？」
「その怪我人がでたの、誰の責任よ！」
彼女の声はいつになく厳しい。
「キミ、海岸の部隊のはずなのに、いなかったっていうじゃない。いったいどこ行ってたのよ！　キミがいれば、助かった人間もかなりいたはずよ！」
「……」
タシュアは答えなかった。答えるつもりもなかった。
言ったところでどうなることでもないのだ。
「言えないってわけ？」
ロアの声がもう一段荒くなる。
真っ直ぐな性格のロアは、自分本位に振舞うことの多いタシュアをかなり嫌っていた。
そこへこの騒ぎだ。
穏やかになどいくわけもない。
「それとも何？　普段は偉そうなことを言ってるのに、いざ実戦となったら怖じ気ついたとでも言うの？」
「そんなことないです！」
とっさにそう叫んだのはルーフェイアだ。
「それにあの鳥たちを最初に落として、戦局を変えたの、タシュア

先輩です！」
必死に少女がタシュアをかばう。
「そうかもしれないけど、それとこれとは別でしょ。だいたいがタシュア、あんたいつも好き勝手に――」
瞬間、乾いた音がホールに響いた。
「シルファ先輩……？」
頬を押さえるロアの前に、シルファが立ちはだかっている。
事実を知らずに言いつのる後輩に、彼女が平手打ちを食らわせたのだ。
「それ以上タシュアを侮辱することは、私が許さない」
普段は物静かなシルファが、怒りをあらわにしていた。
「タシュアは年少組のことを考えて、教室に回ったんだ。
それだけじゃない。教室にいた年少組が安全な場所へ避難するまで、ずっとひとりで守り抜いていたんだぞ！」
「え……？」

Episode：55

驚いたロアからは怒りの表情が消えたが、それでもシルファはおさまらなかった。

「何よりタシュアは自分の弟を――」

「シルファ！」

タシュアが鋭く制止する。

「だが！」

それでも何か言おうとするシルファに、タシュアはかすかに首を振った。

これは……学院とは無関係のことなのだ。

そしてロアのほうに視線を向ける。

「言い訳をするつもりはありません。ですが今やらなくてもいいでしょう。

――手当てが先です」

「――分かった」

ロアもそれ以上追求することなく、怪我人の手当てへと戻る。

彼女の怒りの原因を、タシュアは分かっていた。海岸へ回った彼女の同級生――いちおうタシュアの同級生でもある――が、何人も死んでいるのだ。

そのやり場のない思いが、こちらへ向いたのだろう。

（――はた迷惑ですがね）

だがそれも、仕方がないのかもしれない。

誰もが疲れ、苛立っていた。

最後の戦闘で船着場が破壊されたため、本土へ船が出せない。イマドが再び門を通って――彼は無傷で通れる――助けを求めに行ったようだが、それもすぐには来ないだろう。

薬も既に底をついている。個人が持っていたものさえも使い切ってしまい、もう頼りは魔法だけだ。

もちろん、魔法を使える者は総動員されている。特に精霊持ちの上級生たちは、魔力も強いためずっと休みなしだ。

だがそれでも……間に合わない。

「あ……」

隣にいたルーフェイアが、立ち上がりかけて膝をついた。

この少女も魔力が並外れて高いため、戦闘終了直後からずっと魔法を使いつづけている。

だがこの子はまだ十四歳だ。しかも女子で小柄な上に、戦闘開始直後から最前線で死闘を繰り広げていたのだ。

もう体力の限界など、とうに超えているはずだった。

「ルーフェイア、あと少しです。頑張りなさい」

タシュアが声をかける。

休ませてやるべきなのは百も承知だ。だがそれさえ出来ないほど、状況は追い詰められていた。

「はい」

少女も戦場で育っただけあって、事態を良く理解しているのだろう。気丈に返事を返して手当てを続ける。

（これでどこが――勝ったと言うのでしょうね？）

勝利の歓喜など欠片もない。
あるのはただ……空虚さとうめき声と、死。
終わらない悪夢の中を、学院はさまよい続けていた。

＞Ｒｕｆｅｉｒ
「もうこれでいいから。みんなご苦労さま」
そうムアカ先生が言ったのは、もう時間も分からないほど手当てを続けた後だった。
「後はこっちで引き受けるから。あなたたちはもう、部屋へ帰って休みなさい」
「はい……」

最後の回復魔法をかけ終えて、あたしは立ち上がった。
ふらつく足元に力を入れて、どうにか歩き出す。
頭が痛かった。それに吐き気がする。疲労が限界を超えているせいだろう。

「ルーフェイア、大丈夫か？」
見かねたのか、シルファ先輩が声をかけてくれた。
「はい、大丈夫……です」

やっとそれだけ答える。
本当はここへ倒れてしまいたかった。でもそんなことをしたら、治療の邪魔になってしまう。
出口までがひどく遠い。

「あ……」

また足元がふらついて、手から太刀がすべり落ちる。

態勢を立て直せない。
――倒れる。
そう思ったとき、誰かがあたしの身体を支えた。
「シルファ、私とルーフェイアの武器を持ってくれませんか？　私はこの子を連れて行きますから」
タシュア先輩が言いながら、あたしを抱き上げてくれる。
「すみません……」
それだけ言うのが精一杯だった。
意識が遠のく。
必死に繋ぎとめようとしたけど、どうすることも出来なかった。

Episode：56

＞Sylpha

やりきれなかった。
たしかに命令を無視したのは事実だ。だがそうしなかったら、低学年の被害はこの程度では済まなかっただろう。
タシュアは……すべきことをしたのだ。
弟をその手にかけてまで子供たちを守った彼を、誰が非難できるというのか。

だが、タシュアは言わない。
いつもそうなのだ。
そうして周囲は勝手な憶測で誤解して……。

「もうこれでいいから。みんなご苦労さま」
ムアカ先生の言葉で、はっと現実に帰る。

「後はこっちで引き受けるから。あなたたちはもう、部屋へ帰って休みなさい」
それを聞いてほっとする。

――やっと休める。

身体がひどく重かった。
すぐ向こうでもルーフェイアが立ち上がったが、かなり辛そうだ。
今にも倒れそうに見える。

「ルーフェイア、大丈夫か？」

「はい、大丈夫……です」

そういう声にも、まったく力がない。

無理もなかった。華奢な上にずっと最前線に身を置き、そのあとも休みなしで手当てに奔走していたのだ。

むしろよく頑張ったと言うべきだろう。

「あ……」

そのルーフェイアがよろけ、太刀が音を立てて落ちた。

とっさに手を伸ばす。

だがそれよりも早く、タシュアがこの子を支えた。

「シルファ、私とルーフェイアの武器を持ってくれませんか？　私はこの子を連れて行きますから」

「わかった」

ルーフェイアの太刀を拾い、タシュアの大剣を受け取る。

少女をタシュアが抱き上げた。

「すみま……せ……」

それだけ言うと、この子が目を閉じる。

「大丈夫なのか？」

「気を失っただけでしょう。休ませれば回復するはずです」

言いながらタシュアが歩き出す。

私も慌てて後に続いた。

静まり返った館内。

――墓場のようだな。

不意にそんなことを思って頭を振る。
ここはそんな場所ではない。
そう自分に言い聞かせるが、あまり効果はなかった。
焼け焦げ。遺体。血の跡。
時折すれ違う生徒も疲れ切って生気がなく、どこか亡霊を思わせる。

早く部屋へ戻りたかった。
平穏さを残してる場所へ。
血の臭いのしない場所へ。
だから惨劇の跡がない寮へ来たときは、心底ほっとした。ここは生徒がいなかったせいで、ほとんど被害を受けていない。

Episode：57

まず三階へ上がり、ルーフェイアの部屋へと向かった。
「いけない、鍵が……」
手が塞がっているタシュアの代わりにドアを開けようとして、気が付く。
「ルーフェイア、起きてもらえますか？　部屋を開けますから鍵を貸してください」
「……え？　あ、はい……」
タシュアに起こされたルーフェイアが、鍵を差し出した。だがぼうっとしていて、またすぐに眠ってしまいそうだ。
受けとって急いでドアを開ける。
寝室まで入ったタシュアが、一旦この子を椅子にかけさせた。
「シルファ、クローゼットからこの子の着替えをなにか、出してやってもらえませんか？
ルーフェイア、辛いでしょうが服だけは着替えなさい。返り血を浴びたままではベッドに入れませんよ」
ぼんやりとルーフェイアが目を開ける。見ていても可哀想なくらいに疲れ切っていた。
「タシュア、私が着替えさせるから」
「では私は向こうにいます」
タシュアが隣の部屋――二人部屋の共用部分――へ出ていったのをたしかめて、この子を清潔な服に着替えさせる。それからタオル

を濡らし、顔や手足を拭いてやると、汚れと返り血とでタオルが赤黒く染まった。
きれいになったこの子をベッドへ移して毛布をかけたが、身動きひとつせず眠ったままだ。

きっと、辛かっただろう。
だがそれでも、ルーフェイアは一言も弱音を吐かなかった。繊細で泣き虫だが、こういうところは気丈だ。
頭をそっと撫でてから、私も共用スペースのほうへ移動した。

「――タシュアは大丈夫なのか？」
心配になって尋ねる。
私やルーフェイアほどではないにしろ、タシュアも疲れているはずだ。

「私も完全とは言い難いですね。普段の六～七割程度です。まぁ、二、三日もすれば回復しますが」
言いながらタシュアが、ルーフェイアの太刀を手に取って手入れを始めた。
「放っておいたら傷みますからね。かといって今のルーフェイアでは、やれと言っても無理でしょうし」

それは同感だった。
当人は必死なだけだったのだろうが、ルーフェイアの働きは間違いなく学年一だろう。全校生徒の中でも、上級生を差し置いて上位に入るはずだ。
だがそのせいで、限界以上に疲れ切ってしまっている。
「かなり疲れているみたいだ。今も……身動きさえしなかった」
「そうでしょうね」

それだけ言って手入れを続けるタシュアの隣に、腰を下ろす。

「タシュア……さっきは、その、すまない……」

「なんのことですか？」

「いや、つい兄弟のことを……」

タシュアは自分のことを知られるのが嫌いだ。なのにとっさとはいえ、思わず口を滑らせてしまった。

だが落ちこむ私に、タシュアが僅かに微笑む。

「かまいませんよ。私の方こそかばってもらって、ありがとうございます」

――他の誰もが見たことのない表情。

冷酷、毒舌で通っているタシュアがこんなことを言うなど、他の生徒には想像さえ出来ないだろう。

「今度から、もっと気をつけるから……」

「ですから、気にしないでください。

――それにしても幸運でしたね」

とっさに意味が掴めない。

「その、何が幸運だったんだ？」

「向こうの戦力があれだけだったことと、脅しがよく効いたことですよ。

もし私ならそんなものは無視して、今のこの時を狙って軍を再編し、急襲しますね」

さらりとタシュアが言う。

「慣れない戦闘が終わり、ほとんどの生徒が疲れ切って気が抜けています。余力のあった生徒も、怪我人の治療に奔走しているわけですし。

――間違いなく殲滅できますよ」

「……たしかにそうだな」

言われて初めて、たしかに幸運だったことに気付く。

Episode：58

先ほどの猛攻はどうにか凌いだが、ルーフェイアはあの通り動く気力さえ残っていない。私もそうとう疲れているし、タシュアでさえ本調子ではないのだ。
当然だが、他の上級傭兵隊も似たり寄ったりだろう。

「タシュアが……向こうにいなくてよかった」
そう言うと当人が笑った。

「さて、これでいいですかね」
ざっと手入れした太刀を、タシュアが鞘に収める。
彼が倒れた後輩の武器まで面倒をみるなど、知らない人間には信じられないだろう。そう思うと可笑しくなる。

「なにが可笑しいのですか？」
「いや……なんでもないんだ」

――だが、だからこそルーフェイアがまとわりつくのだろうな。

あの子は私と同じように、タシュアの本当の姿を知っている。人を寄せつけない外見の奥にあるものを。
そして思い出した。
「そうだ、タシュア、これを……」
預かっていた眼鏡を差し出す。

「ありがとうございます」
タシュアが静かに受け取って、いつもどおりに眼鏡をかけた。

「やっぱり……少し、違うな」
「何がですか」
「その、眼鏡をかけていた方が……少し柔らかい気がする」
本当はもう少し違う言葉のような気もするが、これ以外に思いつかなかった。
「そうですか？
――そうかもしれませんね」
言いながらタシュアが僅かに視線を落とした。なにかを思い出しているのかもしれない。
と、彼が立ち上がった。
「部屋へ戻りましょう。これ以上ここにいても、仕方ありませんからね」
「そうだな」
ルーフェイアを起こさないように、そっとドアを閉めて廊下へ出た。
そして歩き出す。
「タシュア……」
「なんですか？」
一瞬だけためらう。
「その、今夜は……一緒にいてくれないか？」
ひとりでいるのが心細かった。

たぶん私も、参っていたのだろう。

「すみません、今夜はひとりにさせてもらえませんか」

だが意外にも、タシュアが断る。

こんなことは初めてだった。

「タシュア……？」

思わず彼の顔を見て、どきりとする。

そうか……。

今日何があったのかが思い出された。

「すまない、気が利かなくて……」

「いいえ、私こそ勝手なことを言ってすみません。

――また明日にでも」

消えてしまいそうな後ろ姿。

――そうやってまた、自分を責めるのだな。

なにも言えない自分が悔しかった。

タシュアはいつもそうなのだ。

なにもかも自分ひとりで抱え込んで……。

虚しい思いを抱いたまま、私も自室へと戻った。

Episode：59

＞Ｉｍａｄ

ひととおり事後の騒ぎが済んだあと、俺は自室でぶっ倒れてた。

――頭痛てぇ。

限界まで魔力を使い切っちまったのと、何度も門を通って往復したってのもあるけど、それ以上にまだ終わらない精神攻撃がキビしい。

今夜ひと晩聞いてたら、ぜったいどうかなるってヤツだ。

と、ドアがノックされた。

「すまない、僕だ」

「セヴェリーグ先輩？　今開けますから」

急いでドアまで移動して、鍵を開ける。

――動くと吐き気しやがんの。

かなり重症だ。

ただ先輩が来てくれたのは、どっちかってとありがたかった。誰かと話でもしてたほうが、気がまぎれる分ダメージが少なくて済む。

ドアが開いて先輩が入ってくる。

「――先輩？」

ひどく落ちこんでるっぽかった。

「しばらくここにいてもいいかな？
みっともないとは思うんだが……部屋にいられなくてね」
「かまいません。俺もちと、ひとりじゃキビしかったんで」
「すまない」

そう言って先輩が、椅子にかけた。
底のない悲しみが伝わってくる。
何があったのか、聞かなくても分かった。

「先輩、飲みます？」
冷蔵庫に放りこんであった飲みかけの酒を、グラスといっしょに差し出す。

「いや、別に……ああ、きみは分かるんだったな」
「はい」

まさか、リティーナが死ぬとは……。
あの子のことは俺もよく知ってる。先輩が学院へ来た五年前はまだ五歳で、半年くらい先輩といっしょに、この部屋で寝起きしてた。

学院への入学資格は六歳以上だから、あん時のリティーナは資格を満たしてない。けど預けられた施設で、ずっと泣きっぱなしの妹を先輩が不憫がって、学院長に頼みこんでここへ引き取った。
昼間はムアカ先生に面倒を見てもらって、夕方からはよく俺と先輩とで手分けして相手してた。
なのに……。

「僕は……五人兄弟のいちばん上だったんだ」
自分に言い聞かせるみてぇに、先輩が言う。

「リティーナとの間に、弟が二人と妹がもう一人いてね。よく騒いで叱られたよ」
「そうだったんですか……」

初耳だ。
亡くなった兄弟がいたっぽいのは、まぁうすうす感じてたけど、まさかそんなに亡くしてたとは。

「ロデスティオと隣接する、小さな国にいたんだ。いまはもうないけどね」
力なく先輩が笑う。

「父はリティーナが産まれる少し前に亡くなったけど、そこそこ裕福な家でね。あんまり苦労はなかった。家族六人、けっこう楽しくやってたよ。
――町が襲われるまでは」

ある日とつぜん、隣国のロデスティオが攻めてきたと、先輩は言った。

「なんの前触れもなく、町に兵士がなだれこんできてね。家まで踏み込んできたんだよ」

先輩のイメージが伝わってくる。
テーブルの上に並べられた夕食。集まってきた兄弟。

――平和な風景。

けどいきなりドアごしに銃弾が撃ち込まれて、母親が倒れる。

Episode：60

「母に言われて、夢中で裏口から逃げ出したんだ。みんなを連れて。ただ子供の足なんて、たかがしれてるだろう？　もたもたしてるうちに、町中戦場になっててね」

それでも必死に、逃げられるだけ逃げたんだっていう。

「けどある場所で、いきなり機銃掃射さ。とっさに伏せてしのいだけど……気付いた時には僕と僕が抱いてたリティーナ以外、全員死んでたよ」

グラスを一気に先輩があおった。

「あとはどこをどう逃げたかもわからない。気付いたらリティーナと二人近くの町にいて、運良く誰かが保護してくれたらしくてね。学院への入学手続きなんかもしてくれたらしい。

――もっとも僕も動転してたらしくて、よくは覚えていないんだが」

また先輩がグラスを空ける。

「来月僕が二十歳になって卒業したら、ここを出て二人で住もうと思ってたんだ……」

やり切れない思い。

俺も……何も言えなかった。

先輩の、いや学院中の嘆きが聞こえる。

とつぜん命を断ち切られた者の嘆き。
とつぜん大切なものを失った者の嘆き。
怒り、苦しみ、戸惑い……さまざまな感情が渦を巻く。
めまいがした。

「先輩すみません、俺ちょっと、向こうで横になってます。
帰るの面倒だったら、隣の部屋のベッド使ってください。空いてますから」

それだけ言って、寝室へ引っ込む。

「結局……誰も守れなかった……」

先輩の背中から悲痛な声が聞こえる。
いろんなものに、押し潰されそうだった。

セヴェリーグ先輩は結局酔いつぶれて、隣のベッドに寝た。
けど、俺の方はそうもいかない。

――やべぇな。

まだ声が聞こえる。
戦闘中に比べればマシだけど、苦しみと怨嗟の声とがずっと聞こえてやがる。
あまりのすごさにぜんぜん寝れねぇし、マジで参りそうだった。

実戦自体は、まったく初めてってワケじゃない。ただ……ここまで負の感情を浴びたのは、初めてだ。
本当の「声」なら、ドアを閉めて耳を塞いで、毛布でもかぶって

りゃ聞こえないだろう。
でもこれはそうはいかない。
心へ直接聞こえる嘆きの声は、締め出せねぇ。
かなりヤバいくらいの吐き気がする。
痛い……　熱い……
死にたくない……　助けて……　苦しい……
終わらず続く叫び声。
そこかしこにうずくまる、死んだ連中の影。
傷つき、血を流し、焼け爛れて……。
さすがにこれ以上は、耐えらんねぇと思った。
机の引出しを開けて、錠剤の入った瓶を二つ取り出す。
片方は精神安定剤。もう片方は睡眠薬。
以前似たような状況になった時に、見かねてムアカ先生が出してくれたやつだ。
――使いたくねぇんだけどな。
けどこのままだったら、遅かれ早かれ気が狂うだろう。
どっちも規定より量を増やして、まとめて口に放りこむ。
そこまでしてようやく……落ちつかないながらも、俺は眠りに落ちた。

Episode：61

＞Ｓｙｌｐｈａ

私は眠れなかった。
気が昂ぶっていたのか、それとも参っていたのか、自分でもよくわからない。

どちらにしても落ちつかなくて、部屋を出て食堂へと向かった。
校舎の廊下までは侵入されて酷いことになっているが、ここは寮と同じく戦闘時は生徒がいなかったために、被害は軽微で済んでいる。
さすがに営業はしていなかったが、テーブルを使うのはかまわないようだった。
飲み物を持ってきて、適当なところへ座る。

こんなところにいる自分が悔しかった。
タシュアにとって私は、いったい何なのだろうか？
彼は決して、人に弱みを見せない。

――それが例え私でも。
そして独りで抱え込んで、乗り越えて行くのだ。

だがそうなら、私は何のためにいるのだろうか？
ただそばに……居るというだけではないのか？
タシュアにはいつも助けられ癒されているのに、私は彼に何か、返しているだろうか？
それならいったい、なんのために……。

そうやってめぐる考えを持て余していると、人の気配を感じた。
「あらシルファ、こんなところでどうしたの？」
「ムアカ先生……？」
いったいどこから持ってきたのだろうか、ワインまで手にしている。
そしてそのまま厨房へと入っていくと、グラスを二つ手にして戻ってきた。
「一杯、どう？」
「いいんですか……？」
教官が生徒にアルコールを勧めたなど、聞いたことがない。
「ま、いいわよ。状況が状況だし、あなたもうすぐ卒業だしね。だいいちあたしも、独りで飲んでちゃつまらないし」
言いながらグラスにワインを注ぐと、一つを私へと差し出す。
受け取ると中で、金色の液体が揺れた。
思ったより甘めのそれを、一気に飲む。
「――あなたとタシュアのおかげで、年少組の被害が少なくてすんだわ」
二人してしばらく無言で飲み続けてから、ぽつりと先生がもらした。
「いえ、私は何も……」
何かしたというのなら、タシュアのほうだろう。

「そんなことはないと思うけど。あなたがきっちり采配振るったから、低学年が無事だったんじゃないの？」
「それは……タシュアが二階に残って、敵を食い止めたから……」
「そう自分を貶めるもんじゃないわ。
タシュアだって恐らく、あなただから安心して、二階に残れたんだと思う」

その言葉が、胸に突き刺さった。
――タシュアにとって、私は？
さっきの問いが再び沸き起こる。

Episode：62

「――どうしたの？」
私のグラスにまたワインを注ぎながら、先生が尋ねる。
「私は……何もできないから……」
少し酔っていたのだろうか？　ついそんな言葉が口をついた。
「タシュアに頼るばかりで、自分ではなにも……」
努力はしている。少しでも追いつきたいと、必死に努力はしている。
だがタシュアはそれ以上で、差が開くばかりだった。
それを知るたびに自分の無力さを思い知らされるのだ。
「だけどタシュアは、あなたを必要としてるように見えるわよ？」
その問いにも答えられなかった。
落ちこんでいたタシュア。
それなのに私は、かける言葉さえ持たない。
タシュアはいつだって私を支えてくれるのに、私はこんな時でさえ力になれない。
「私は……タシュアにとって、いったい……」
「しっかりしなさい、シルファ」
不意に先生が厳しい声を出した。

「あの子は……タシュアは、人を拒絶してる。
昔、何があったかは知らない。あんな風になるんだから、おそらくとんでもないことなんでしょうけど。
けどシルファ、あなただけでしょ？　そんなタシュアに近づくことが出来るのは。
だったらこんなところで油売ってないでほら、さっさと行って慰めてらっしゃい」

「先生……」

どうするべきか迷う。
タシュアは、ひとりにして欲しいと言っていた。
なのにそんなところへ押しかけようものなら、嫌われてしまうのではないだろうか？

他のことはどうでもいい。ただそれだけが怖かった。
タシュアをなくしたら私は……。

「シルファ＝カリクトゥスっ！」
「は、はいっ」

とつぜん鋭く名前を呼ばれて、思わず反射的に答える。

「あなた、自分とタシュアと、どっちが大事なの！」
「それは……」

考えるまでもない。
そして、気がつく。
自分がなにをすればいいのか。

「先生、ありがとうございます」

そう言って立ち上がった。

足元がふらつく。

「大丈夫？　あなた意外に、飲んでたものねぇ。

ともかく、しっかりやってらっしゃい」

ムアカ先生に励まされて（？）食堂を出た。

急に動いたせいか、頭がぼうっとしてくる。

それでも真っ直ぐ、私はタシュアの部屋へ向かった。

Episode：63

＞Ｔａｓｈａ　Ｓｉｄｅ

端末の前に腰掛けて、ぼんやりとタシュアは考えこんでいた。
弟を殺したことを後悔しているわけではない。むしろ放置していたことを後悔していた。
実を言えば以前から、彼がロデスティオの傭兵隊にいることは知っていたのだ。

――そしてその心が、壊れてしまっていることも。

もっと早くに手を打つべきだった。それが兄としてすべきことだったはずだ。
だがそれを……自分はしなかった。
どうにかしたほうがいいとは思いつつも、ついそのままにしておいた。
その代償が、これだ。

「ナティエス、リティーナ……」

自分のミスのために、死ぬ羽目になった後輩たち。
些細な事と読み違えたがために、取り返しのつかない事態を招いてしまった。
あの時低学年を守るためにバスコの前に立つのは、ナティエスではなく自分だったはずだ。
なによりもう少し早く行ってやれば、誰も死ななかっただろう。

――あの時もそうだった。

学院へ来る前の苦い経験。
自分に力がないばかりに、些細な事と取り違えたために、三人は死んだのだ。

後悔してもなにも変わらないことは分かっている。
だからこそ自分が許せなかった。
そして二度と繰り返すまいと、自分に言い聞かせてきた。
だが……。

（――変わっていないということですか）

結局やったことは同じミスだ。
これが自分の限界なのか……。
その時、部屋の外で気配がした。

（――シルファ？）

ああ言って別れたのにわざわざ彼女が来るなど、普通では考えられない。
だがともかく、タシュアはドアを開けた。

「シルファ、どうかしたのですか？
――え？」

どうみてもパートナーは酔っている。
前後不覚と言うほどではないが、それでも普通の状態とは言い難かった。

「大丈夫ですか、そんなに酔ったりして……。

ともかく中へ」

急いでシルファを招き入れる。

と、その彼女が真っ直ぐに見つめてきた。

「――タシュア」

「なんですか？」

だが次に彼女が取った行動には、さすがのタシュアも慌てる。

「シルファ、落ちつきなさい！」

「落ちついている」

「それのどこが落ちついていると言うんですか！」

落ちついているなら、いきなりブラウスのボタンに手をかけたりはしないだろう。

「だいぶ酔っているのでしょう？　ともかくベッドで休んで……」

「休まない」

「シルファ！」

いったいどれほど飲んだのだろうか？

Episode：64

一瞬魔法で眠らせてしまおうかとも思ったが、さすがにそれはためらう。

「ともかく脱ぐのはやめてください」

タシュアにしてみればこんな状態のパートナーに、乗じてそんなことはしたくないだけだった。

が、シルファはそうではなかったようだ。

「私は、私は……」

彼女の紫水晶の瞳に涙が浮かんだ。

「タシュアにとって、私は……」

泣き出してしまった彼女を見て、今更ながらに気付く。

「すみません。心配させましたね」

「違う、そうじゃない！」

酔っているせいもあるのだろう。珍しく強い口調だった。

「タシュアは、いつもひとりで……なのに、私はなにも……」

シルファの瞳から、また涙がこぼれる。

「なにも……なにも出来ない……タシュアに、返せない……」

「そんなことはありませんよ」

子供のように泣きじゃくる彼女を、タシュアはそっと抱き寄せた。

優しいシルファ。
辛い経験に閉じこもってしまった自分を引き上げたのは、シルファのこの優しさだ。

もう十分、返してもらった。
いや、返してもらったのではない。
――与えられたのだ。
彼女に必要とされなければ、今も自分はあのままだったろう。

「タシュアに、タシュアに……」

そう言って泣きつづけるシルファの頭を、ゆっくりと撫でる。
何もいらない。
今度は自分が返す番だ。

「私にとってあなたは……」

言いかけてタシュアは苦笑した。
まだ小さく泣きながら、だがパートナーは腕の中でうとうとしている。

無理もなかった。
夕方のルーフェイアではないが、シルファもまた疲れ切っているはずだ。そこへ酔った挙句にこれだけ泣いては、体力が持つわけがない。

「ゆっくり休んでくださいね」

抱き上げてそっとベッドへ移してやる。
降ろした時にシルファは少し目を開けたが、そのままま寝入っ

てしまった。

――泣きながら。

「すみませんでした……」

自分に余裕がなかったばかりに、彼女まで傷つけてしまった。

あれほどの経験をして、平気なわけがない。あんな狂気に晒されて平然としていられるなど、もはや人ではないだろう。

終わったあとでもいいから、守ってやるべきだった。

自分が狂気の残滓を、退けてやるべきだった。

手を伸ばす。

起こさないようにしながら頭を撫でてやると、やっとパートナーの寝顔が安心したものになった。

「――シルファ」

その彼女に語りかける。

「私にとってあなたは……最高のパートナーで、最愛の女性なのですよ」

聞くものは、いない。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：６４（後書き）

期待させてごめんなさい。何事もないです。

Episode：65

＞Ｒｕｆｅｉｒ

ぼんやりとあたしは目を覚ました。
なんとなく枕元の時計を見る。

――九時半？！

びっくりして飛び起きた。これじゃ授業に間に合わない。
けど慌てて着替えようとして、枕元に畳んであった服に気が付く。
べったりと赤黒く着いているのは……血だ。

――そうだっけ。

昨日の激戦をようやく思い出す。
まだ疲れているのか頭が痛かった。それにひどくお腹が空いている。
とりあえず何か食べようと、冷蔵庫を開けた。

――あ、ケーキ。

思いもかけず甘いものを見つけて嬉しくなる。急いで取り出してフォークも出した。
でもなにか……忘れている気がする。
なんだったろうとしばらく考えて、あたしはようやく思い当たった。
昨日バトルの前にナティエスに、「勝手に食べるな」と言われたのだ。

「ナティエス？」

向こうの寝室に声をかける。けど返事はない。
疲れて、まだ寝てるんだろうか？
起こさないようにと思って、そっとドアを開けた。

――いない？

ベッドは空だ。
もしかしてあたしみたいにお腹が空いて、食堂にでも行ったんだろうか？
なんとなくふらつくけれど、着替えて外へ出る。

校内はまだ、惨劇の跡が生々しく残っていた。
遺体こそ殆ど片付いているけれど、あちこちに血がこびりついている。これじゃ今日はきっと、掃除に駆り出されるだろう。
こんな状態でどうかと思ったけれど、とりあえず食堂へ行ってみる。

――開いてるといいんだけど。

少し不安に思いながら廊下を曲がった。
意外にも人の出入りがある。さすがに食べることをやめるわけにはいかないから、ここは最初に復旧？したようだった。

ただ中を見回しても、シーモアもナティエスもミルもいない。
みんな、負傷者の手当てをしにホールへ行ってしまったんだろうか？

「ルーフェイア、もう大丈夫なのか？」
「あ、シルファ先輩」
振り向くと先輩がいた。
けどこんなに近づかれるまで気付かないなんて、よほどぼうっとしてたらしい。
「今日は起きられないんじゃないかと、心配してたんだが。大丈夫そうで良かった」
「すみません……」
それにしても先輩、トレーの上に山盛りの料理を乗せてる。どうみたって一人前以上だ。
「先輩も、お腹……空いたんですか？」
「私じゃなくて、タシュアだ」
シルファ先輩が苦笑した。
なんでもタシュア先輩、昨日は何も食べてないとかで、今朝はひたすら食べることに専念してると言う。
「あんなに急に食べたら、お腹を壊すんじゃないかと心配なんだが。――ルーフェイアも、いっしょに食べるか？」
「いえ、あたし……ナティエス探しに、来ただけで……」
急に先輩の顔が曇った。

Episode：66

「先輩？」
「ルーフェイア……こっちへ」
「？」

言われるままに後をついていく。
奥まで行くと、タシュア先輩が一皿食べ終えたところだった。
どういうわけかこの先輩もあたしを見て、一瞬表情を変える。
うながされて先輩たちの間に座った。

「ルーフェイア、これをあなたに」
タシュア先輩がポケットから、見覚えのあるペンダントを取り出す。

「これ、ナティエスの？　先輩、拾ったんですか？」
「彼女は……亡くなりました」
「え？」

先輩、何を言ってるんだろう？

「ナティエス、ホールへ……手当てしに、行ったみたいですけど？」

ここへはもしかしたらと思って寄っただけだ。
なぜか先輩たちが顔を見合わせた。

＞Sylpha

「ナティエス、ホールへ……手当てしに、行ったみたいですけど？」
ルーフェイアの言葉に、胸を締めつけられるようだった。
戦場で育ったこの子だ。タシュアの言葉の意味が、分からないはずがない。
恐らく……事実を受け入れられないのだろう。
「だからルーフェイア、ナティエスは――」
「シルファ」
タシュアが私の言葉を遮る。
「ルーフェイア、とりあえずそれを持っていてください。
それから時間があるのでしたら、付き合ってもらいたい場所があるのですが」
「あ、はい」
不思議そうな顔をしながら、ルーフェイアが答える。
何も理解していないその表情が辛かった。
「飲まないか？」
ジュースの入ったグラスを差し出す。
「ありがとうございます」
一気に半分ほど飲んでしまったところを見ると、それなりにお腹は空いているらしい。
ただ昨日の疲れもあって、正常な判断ができなくなっているようだった。
「朝食も食べていないのだろう？　いま少し、分けるから」

「え、でも、悪いです……」
遠慮する少女の前に、少しづつ取り分けてやった皿を半分押し付けるように置く。
「このくらいなら入るだろう？」
「すみません……」
食欲さえ無くしているのではないかと心配したが、幸いそうではなかったようだ。華奢な手にフォークを持って、ゆっくりと食べ始める。
「けど先輩、どこへ……行くんですか？」
その様子がやりきれない。
「すぐに分かります。
ともかくそれを食べてしまいなさい。私も自分の分を片付けますから」
「はい」
素直にルーフェイアが食べ物を口に運ぶ。
だが私は心配でならなかった。タシュアは……この子をナティエスに会わせようというのだ。
――耐えられるだろうか？
人一倍繊細なルーフェイアでは、どうかなってしまうのではないだろうか？
かといって、先延ばしにするわけにもいかなかった。
遺体は早ければ今日中、遅くても明日には荼毘（だび）に付すことになっ

ている。今を逃せば、もう二度とナティエスの顔を見ることはできない。
それからしばらくして、タシュアが立ち上がった。
「ルーフェイア、行けますか？」
「はい」
ルーフェイアも立ち上がる。
この子を間にはさむようにして、私たちは歩き出した。

Episode：67

＞Ｒｕｆｅｉｒ

先輩たちといっしょに、あたしは食堂を出た。

――どこへ行くんだろう？

ナティエスのペンダントを握り締めながら思う。
でもこのペンダントが見つかったなら、ナティエスは喜ぶだろう。
たしか両親の形見だと言って、とても大事にしていたのだ。

――あれ？

けどホールのほうへ先輩たちは行かず、そのまま廊下を歩いて、エレベーターの前まで来る。
そして立ち止まって、下へのボタンを押した。
それにしても、地下になにかあっただろうか？　戦闘中は年少組を避難させたというけれど……。

そしてやっと思い出す。
地下は昨日たしか、遺体を……。
足がすくんだ。
さっきの先輩の言葉がよみがえる。

「ナティエスが……死んだ……」
急にめまいがして立っていられなくなる。

「ルーフェイア、大丈夫か？」

横からシルファ先輩が支えてくれた。
「無理にとは言いませんが……彼女に会えるのもこれが最後でしょう。早ければ今日の午後には荼毘(だび)にするそうですから。
――どうしますか？」
「行き……ます……」
自分のものとは思えないような、かすれた声だった。
足が思うように動かなくて、半分かかえられるようにしてエレベーターに乗る。
――怖い。
けど、ナティエスは親友だ。それに孤児の彼女は、あたしやシーモアたち以外、泣く人もいない。
エレベーターが止まって、扉が開いた。
「あ……」
累々と並ぶ遺体。
これにはさすがに、シルファ先輩も衝撃を受けたようだった。
「いったい、何人……」
「敵兵も合わせると、百どころではではないでしょうね。
ルーフェイア、こっちです」
先輩が一つの遺体の前で立ち止まった。
かけてあった布をそっとめくる。
「ナティエス……」

穏やかな表情で、眠っているようにしか見えなかった。
でも……左腕がない。両足も。
そっと頬に触れると、氷のようだった。

「ナティエス……苦しかった？」

涙があふれて、ナティエスの上に落ちる。
いろいろなことが思い出された。

最初は……あたしのことを嫌ってた。「どこかの金持ちのお嬢さんが、道楽で入学してきた」と思ったんだそうだ。
でもそのあとあたしのことを分かってくれてからは、ずっと仲良しだった。

シーモアとミルとあたしとナティエス。四人でいろいろなことをした。
他愛ない話をしてみたり、みんなでケンディクへ買い物に行ったり、シルファ先輩の任務に同行したことまであった。
ロア先輩が個室に移ってあたしの相部屋が空いた時も、何も言わずに引っ越してきてくれた。

あの笑顔を覚えてる。
あたしが困っているといつも、「しょうがないなぁ」と言いながら手伝ってくれた。

「約束……したんです。バトル終わったら、ケーキの残り食べようって。
なのに、なのに……」

次々と涙がこぼれる。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：６８

「――すみません。私の責任です」

タシュア先輩の思いもかけない言葉に、驚いて振りかえった。

初めて見る先輩の表情。

「彼女を殺したのは私の知り合いです。

もっと早くに……始末をつけておくべきでした」

「いいえ……」

あたしは首をふった。

ナティエスが死んだのは、たぶんあたしのせいだ。

「あたし……精霊、渡さなくて。

まだ予備、あったのに……イマドには渡したのに……」

精霊を持ってれば、ナティエスは死ななかったんじゃないだろうか。

ナティエスの前に座りこんだまま、あたしは泣きつづけた。

「ごめんね、ナティエス。ごめんね……」

＞Ｓｙｌｐｈａ

心配した通り、ルーフェイアはそこへ座りこんで泣き始めてしまった。

私もタシュアもかける言葉がない。

「ごめんね、ごめんね……」
ただそれだけを言いながら、この子が泣き続ける。
タシュアが黙って、その頭をそっと撫でた。

ルーフェイアが泣きやむ気配はない。それほどにナティエスを大切に思っていたのだろう。
あまりにも可哀想で、隣にしゃがんでこの子を抱きしめる。
今日はたぶんあちこちで……同じような光景が繰り広げられているに違いなかった。

（――シルファ）
不意にささやき声で、タシュアが話しかけてくる。

（遺体の身元確認に呼ばれました。ルーフェイアを頼みます）
（わかった）

タシュアが教官の方へと歩いていく。全生徒の顔と名前を覚えている彼は、この役には適任ということなのだろう。

だが……辛い役目だ。

昨日ムアカ先生から聞いたのだが、生徒の死者は二割にものぼったという。そして最も被害が大きかったのが、ルーフェイアたち六年生から九年生（十一歳～十四歳）だった。
なにしろいちばん大きいルーフェイアたち、九年生のAクラスでさえ四人もの死者、なかには半数近くが死んだクラスまであったらしい。
当然重傷者も多く、無傷で済んだのはごく少数との話だった。

ただ幸いにも、低学年の方は被害が軽かった。

面倒を見ていた生徒たちが命懸けで守ったことと、タシュアの的確な判断とが子供たちを救ったのだ。
――それでも、ゼロというわけにはいかなかったのだが。

ルーフェイアはまだ泣いていた。このままでは一日中泣いていそうだ。
かといってこの冷えた地下――遺体の保存のため、冷気魔法で作った氷が置いてある――でずっと座りこんでいたら、今度はこの子が体調を崩すだろう。

「ルーフェイア、いったん部屋へ戻った方がいい。なにかあったら、すぐ呼びに行くから」
「あ、はい……」

泣きながらルーフェイアが立ち上がる。

「さぁ、行こう」

促すと、この子がゆっくりと歩き出した。
並ぶ遺体の間を歩いて、エレベーターへと向かう。
その途中で、教官に呼びとめられた。

「君たちは手が空いているのか？　もしそうなら、いろいろやってもらいたいことがあるんだが……」

たしかに遺体の確認や搬送、重傷者の手当て、館内の掃除や修繕など、やるべきことは山積みになっている。動ける生徒は貴重な労働力だった。
だが今のルーフェイアになにかしろというのは、あまりにも酷だろう。

「その……この子はちょっと、参ってて……」
「ん？　あ、ルーフェイアか。それは仕方ないな。
――そうしたらシルファ、君だけでも頼む。彼女を部屋へでも送って、ここへ戻ってほしい」
「わかりました」
ルーフェイアの繊細ぶりは、学園内に知れ渡っているらしい。

「……先輩、あたし……部屋へ、ひとりで帰れます」
意外にもちゃんと話を聞いていたらしく、涙を拭きながらこの子がそう言った。

「本当に大丈夫か？」
途中でまた泣き出してしまうのではないかと心配になる。

「だって……寮までですから……」
「それはそうだが」

だがたしかに寮までなら、帰れないこともないだろう。

「そうしたらルーフェイア、気をつけて戻るんだ。私もあとで行くから」
「――はい」

Episode：69

気落ちした後ろ姿で、ルーフェイアが歩き出す。
ただ昨日と違って足取りはしっかりしているから、寮までなら大丈夫そうだった。

「それで先生、私は何を……」
「これを頼む。嫌な仕事だとは思うが、まさか下級生に任せるわけはいかないんだ」

差し出されたのはリストだ。

「兄弟でここにいる者で、死亡したケースをまとめてくれないか。なにしろ生き残った方も重傷を負っていたりで、まだ完全に連絡できていないようでね」
「了解です」

渡されたリストを見る。
兄弟でこの学院へ保護されているケースはそう多くないが、それでも相当の人数だった。
ここから死亡者を洗い出すとなると、けっこう時間がかかるだろう。
急いで作業に入った。

クラスごとに安置されている遺体の名札を見ながら、チェックを入れて行く。
下は六歳から上は私と同じ十九歳まで……。

「シルファ、ルーフェイアはどうしたのですか？」

うろうろしていると、タシュアが戻ってきた。

「その、ルーフェイアは部屋へ戻ったんだ。それで私は、これを頼まれて……」

タシュアにリストを見せる。

「兄弟のリストですか……。

ここは二人とも亡くなりましたね。こちらは姉が重傷ですが、弟は無事です」

次々とタシュアがチェックしていく。

昨日負傷者の手当てに当たっていた際に記憶したのだろう、名前を見ただけで即答だった。

そのタシュアの言葉が……途切れる。

「どうしたんだ？」

「いえ、なんでもありません」

「――？」

気になってタシュアの手元を覗きこんだ。

「あ……」

リティーナ＝マルダー。

あの子だ。

昨日の光景がよみがえる。

たった九歳で、未来を絶ち切られてしまった少女。

――助けてやれなかった。

深い悔恨が私を捕らえた。

こんな小さな子では自分を守れるわけがない。なのに私たち上級

生は、なにをしていたのだろう。
わかり切ったことだというのに。
ほんの数メートル先の、この子のところへ行く。
おだやかな表情をしているのが救いだった。

「ナティエスの苦無が刺さっていましたから……あの子がみかねて死なせたのでしょうね」
「ああ……」
ナティエスはいつも、苦無にかなり強い毒を塗っていた。そのせいで苦しんだ様子がないのだろう。

「可哀想なことをしました」

私は何も言えなかった。
今回のことでは、タシュアもまた……。

「すまない、どいてもらえないだろうか？」

後ろから声をかけられて振り向くと、同じクラスのセヴェリーグがいた。
この子の兄だ。
その彼がそっと少女の隣にしゃがみこむ。

「リティーナ、これを……持っていくといい」

好きだったのだろう、可愛いぬいぐるみをその手に持たせていた。
当然かける言葉などない。

「セヴェリーグ……」

そう言うのがやっとだ。
だがセヴェリーグが返してきたのは、まったく違う言葉だった。

Episode：70

「タシュア、ひとつ訊きたいんだが」
「なんでしょう」
私ではなく、タシュアに問いかける。
「リティーナを殺したのが君の知り合いというのは……本当なのか？」
「――はい」
タシュアの静かな答えに、空気が険悪なものになった。
セヴェリーグが立ち上がる。
「この子のクラスメートの話じゃ、そいつは狂ってたそうじゃないか。
なぜそんなものを放っておいたんだ」
「……」
タシュアは何も答えなかった。
こういう時、彼は絶対に言い訳をしたりしない。
「答えろ、タシュア！
この子が――リティーナが何をした？　リティーナが悪かったとでも言うのか！」
セヴェリーグがタシュアの両肩をつかむ。
普段なら決してそんなことは許さない彼が、黙ってされるがままだ。

「なんでそいつを、さっさとどうにかしなかったんだっ！」
「――セヴェリーグ、やめてくれっ！」
思わず叫ぶ。
聞いていられなかった。
「頼む、言わないでくれ。
タシュアをそれ以上、責めないでくれ……」
セヴェリーグが辛いのはよく分かる。
だがこのことではタシュアも……傷ついているのだ。
「頼むから、もう……」
「シルファ……」
セヴェリーグが、そっとタシュアから手を放した。
彼もまた、悲しさを通り越したとしか言えない表情をしている。
「――すまない。後輩相手にみっともないところを見せたな」
「私には何も言うことはできません……」
どう表現していいのか分からないほど、重い雰囲気。
もう一度セヴェリーグが、少女の隣へしゃがみこんだ。
「すまないが、向こうへ行ってもらえないか？」
「あ、ああ……」
二人でその場を離れる。
――なぜこんなことになったのだろう？

ルーフェイアではないが、ふっとそんなことを思った。
やっとの思いで生き延びて、ようやく穏やかに暮らし始めたのに、なぜこんな殺されかたをしなくてはならないのだろうか？

私たち上級傭兵を狙うのなら分かる。
だがこんな小さな子の、どこが恐ろしいというのか……。

「シルファ、大丈夫ですか？」
「え？」

私が黙ってしまったからだろうか？
タシュアの心配そうな顔がそこにあった。

「まだ疲れているのでしょう。部屋へ戻って休んだらどうです？」
「いや……大丈夫だ」

それよりもタシュアの傍にいたかった。
なにもできないならせめて、隣にいたい。

「そうですか。
そうしたら急いで、このリストを完成させましょうか」
「ああ」

もう一度、辛い仕事に手をつける。
戦いと言う名の狂気が残したものは、あまりにも無惨だった。

Episode：71

＞Ｒｕｆｅｉｒ

シルファ先輩にうながされて、あたしは寮へと戻った。
途中で食堂へ寄って、のどだけ潤す。

差しこむ陽の光。
優しく抜ける風。
昨日の朝と、どこが違うというのだろう。

でも……ナティエスはいない。
あっという間にあたしたちの前からいなくなってしまった。

――ごめんね、あたしのせいだね。

あたしが、精霊を渡さなかったから……。
歩いているうち、寮の入り口が目に入ってくる。
ここだけはなんの跡も残していないくて、それがひどく奇妙に思えた。
人影がある。

「――イマド？」
「なんだ、お前か」

思いつめた表情だった。

「どうしたの？」
「いや、なんかさ……」

イマドがため息をつく。
「俺、学院やめようかと思って」
「……そう」
とつぜんの言葉に、どう答えていいかわからなかった。
でもその方が、いいのかもしれない。
ここは……平和とは程遠いのだから。
「――それだけなのか？」
「え？」
思ってもみなかったことを、イマドに返されて戸惑った。
「お前、平気なんだな」
「――なんの、こと？」
イマドが……いつもと違う。
「さすが戦場育ちだよな。この程度じゃ平気ってわけか」
「そんなこと、ないわ！」
つい声が大きくなる。
「そう言いながら、そこら辺の血の跡だの遺体だの見て、お前平気な顔してるじゃねぇか！」
「それは……慣れてるから……」
そうとしか答えようがなかった。
なにしろ戦場にいた頃は、毎日こういうものを目にしていたのだ。

「よく、そんなこと言えるな」
「だって……」
もうどうしていいか分からない。
何より、イマドにこんなことを言われるのがショックだった。
「だって、前は毎日見てて……隣で食事とかもあったし……」
「お前にはその程度なのか？」
イマドの声が厳しくなる。
「分かってんのかよ！　こんだけ仲間が死んじまって、それで『慣れ』だと！！
ふざけんなっ！！」
「ふざけてないわ！」
思わずあたしもカッとなった。

Episode：72

こんなに何人も友達が死んで、ふざけていられるほどあたしは強くない。

「分かってないのイマドじゃない！
それにこれでも、まだマシなんだから！」

戦争なんて、なにかのドラマみたいにカッコよくなんかない。辛くて汚くて泣きたくなるようなことしか、そこにはない。
だいいちあたしが見てきた地獄は、こんなものじゃなかった。それをあたしは、学院の最年少の子より小さい時から、この瞳で見てきた。

だけど平気なんかじゃない。こんな辛い思い、できるなら二度とゴメンだ。
――だいいちあたしがそう思ってるの、イマドだって知ってるはずなのに。
それなのに！

「やめればいいじゃない！　この程度でネをあげるんじゃ、戦場じゃ生き残れないもの！
――さっさとアヴァンへ帰ったら？！」
「てめぇ……！」

半分キレたイマドが、あたしの胸倉をつかむ。
互いの瞳が合った。
琥珀色の哀しい瞳。
悔しさ、切なさ、やるせなさ、自責の思い……そういったものが

混ざった瞳。

――あたしと同じだ。

不意にそのことに気付く。

理由は知らない。けどイマドもまた……傷ついてる。

それもひどく。

「――ねぇイマド、もうやめなよ。

なにもわざわざ……こんな世界にいること、ないもの」

イマドの瞳にあたしはつい、いつも思っていたことを口にした。

この学院の生徒は半数以上が孤児で、みんな帰る場所を持たない。

けど彼は違う。

両親こそもういないものの、いつでも遊びに行ける親戚があって、

前から引き取りたいと言われているのをあたしは知ってる。

――だったらこんな世界、早く去った方がいい。

「アヴァンへ帰って、普通に暮らした方が……絶対いい。

あたしみたいに……決められてるわけじゃ、ないから……」

イマドがはっとした表情を見せる。

「そう……だったな……」

彼が手を離した。

「お前は、他にないんだよな……すまねぇ」

「ううん……」

そのまま二人で、言葉を失う。

あたしは辺りを見まわした。
あの綺麗だった校舎は、見る影もなく荒れ果ててしまっている。
大好きな学院。
――あたしの夢の場所。
けど普通なら、わざわざ傭兵学校へ行こうとは思わないだろう。
「イマドは……アヴァンに伯父さん、いるんだもの。いつだって、帰れるでしょ。
だからこんなとこ、やめた方がいい……」
あたしのように傭兵学校が夢の場所なんて、いいわけがない。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：７２（後書き）

ルーフェイアの激昂、かなり珍しいですね

Episode：73

「それに、あたしといっしょじゃ……きっとロクなことに、ならないから……」

代々傭兵として生きてきたシュマーという家。そういう家にあたしは産まれた。

でもあたしはそれが嫌で嫌で――なのに実力だけは一人前で――イマドに偶然誘われた時、逃げるようにこの学院へ来たのだ。

以来イマドは、ずっとあたしと一緒にいてくれている。

ただ外の人間が、シュマーの総領家に関わるとロクなことにならないのは、内々じゃ知られた話だった。

「ごめんね、イマド、ほんとは関係ないのに。

でもイマド、優しいから……」

そう。イマドは関係ない。

偶然あたしたちの時間が交差して、いっしょになっただけだ。

けど今ならまだ間に合う。

「もう、あたしのことなんていいから」

あたしは……帰らなければいけない。あの戦場へ。

そしてまた褒めそやされるのだ。

――人殺しが上手いと。

「だから、イマドはイマドで……」

なぜだろう、涙が出てくる。
もうここにいられなくて、あたしはイマドに背中を向けた。
「ごめん、あたし……部屋に、帰るね……」
「待てよ！」
イマドがあたしの手をつかむ。
「悪かった」
真っ直ぐな瞳。
「俺……昨日からずっと死んだヤツらの念食らってて……。いや、それは関係ねぇな。
――俺が悪かった」
羨ましいぐらいに真っ直ぐな視線。
あたしまた、泣き出しそうになる。
「――イマドのせいじゃ、ないでしょ」
やっとそれだけ言った。
と、急にイマドが笑い出す。
「なんか、普段と逆だな」
「え？　あ、そうかも」
言われてあたしも、ちょっと可笑しくなる。
でもまたすぐ、二人で黙ってしまった。
「リティーナって俺のよく知ってる低学年の子、死んじまってさ…

…」
ぽつりとイマドが言う。
「ナティエスも――死んだの」
「――そうだったのか」
あたしも、イマドも、他のみんなも、誰かを亡くしたのだと気付く。
友達、先輩、後輩、そして兄弟……。
「なんで、こんなことに……なっちゃったんだろう」
「さぁな……」
答えはけして出ないだろう。
ただ虚しい思いだけが、心にこだましていた。

Episode：74

＞Seamore

あたしは……また、庭のベンチにいた。

――あいつが死んじまうとはね。

正直まだ信じらんない。なにせギリギリまで、ここで話してたんだ。

で、待ってる。馬鹿げてるとは思いながら、なんとなくここでナティエスを待ってる。

「シーモア、いた～」

「――ミル」

さすがのこいつも、今日はトーンが低かった。

「ナティエスには、もう会ったのかい？」

「うん」

昨日と同じように、ミルが隣にかける。

「他もみんな……会ってきたよ」

「そうかい……」

ひどく長い死亡者リストには、うちのクラスの仲間も四人ほど名を連ねちまった。他にも重傷者が、何人もでてる。

裂傷ですんだあたしなんざ、かなり運のいいほうだろう。

「シーモアも左腕、痛そうだね～」
「仕方ないさ」
最後の防衛戦の際に創った傷だ。ただあたしがうっかり油断して切りつけられたから、誰も悪かない。
「そういやあんたは、ケガなかったのかい？」
ふと訊いてみる。
「したよ～」
けどミルのヤツ、ざっと見たところはケガした様子がなかった。
「いったいどこをケガしたって言うのさ？」
「手首～♪　捻挫しちゃったんだ」
思わずなんでもない右手で、こいつを殴りつける。
「それのどこがケガだい！」
「え～、だって昨日は痛かったから、湿布までしたんだよ？」
「……」
何も言えなくなって黙る。
――だいたいこれで、どうリアクションを返せっていうんだか。
「あ、そだ☆」
しばらく黙ってると、またこいつが性懲りもなくなにか思い出した。
「今度はなんだい」

「シーモアってさ、これからどうすんの？」
「は？」
唐突にそんなことを言われて、思わず聞き返す。
「んとね、ほら、けっこうみんな、学院辞めちゃうみたいだからさ」
「ああ、その話か。
――あたしはこのままだよ」
「そなの？」
ミルが意外といった顔になった。
「シーモア、辞めちゃうかなって思ってた」
「そりゃ参っちゃいるけどね。でも今更帰る場所があるわけじゃなし。
だいいちンなことで学院辞めたら、ナティエスが承知しないさ」
あの子だったら絶対、「あたしのせいで辞められたら迷惑」と言うだろう。
「そっか」
分かってるのか分かってないのか、ともかくミルが納得する。
「けどクラス、減っちゃったね」
「ああ」
シエラはもともと、一クラスが二十人に満たない少人数編成だ。
なのに四人もいなくなったら、空席がひどく目立つ。
「そのうちクラス替えがあるんだろうけど……しばらく寂しいだろ

うね」
「クラス替えかぁ。来年まではヤだな～」

珍しくこいつが神妙なことを言う。
もっともこの意見には、あたしも賛成だった。
そんなあっさり隙間が埋まったら、死んじまった連中に悪い気がする。

「かといって……これぱっかはね。教官の考えることだし。
それよりナティエス送るのに、なにか持たせてやらないか？　とっておきのやつを」
「あ、それいい考え～♪　んじゃさ、部屋に行ってなんか探そうよ♪」

昨日のあの時と同じように、あたしとミルは寮へと向かった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：７５

＞Ｒｕｆｅｉｒ

合同葬儀はけっきょく、激戦の三日後になった。あまりの死者の多さに、身元の確認に手間取ったのだそうだ。

もう少し正確に言うと、本当はまだ全員が確認されたわけじゃないという。

ただこれだけの遺体を安置しておくのがもう限界で、ともかく分かった人だけでも荼毘に付すことになった。

遺体が次々と裏庭へ運び出される。

たいていは友達が、時々は先輩や後輩が、稀に兄弟が遺体に付き添っていた。

あたしたちもクラスの男子といっしょに、ナティエスはじめ亡くなった四人を、そっと横たえる。

「これで……お別れか」

ぽつりとシーモアがつぶやいた。

その言葉にまた、涙が出てくる。

あの日からあたし、ずっと泣きっぱなしだ。どうかしてるとは思うのだけど、どうやっても涙が止まらない。

ただ今はさすがに、あちこちからすすり泣きが聞こえていた。

「ヤだ、ヤだよっ！　お姉ちゃんといっしょにいるっ！」

向こうでは低学年の子が、大泣きしながら遺体にすがりついている。

どうみてもまだ六歳くらいのあの子には、お姉さんが亡くなった

事が理解できないのだろう。
「お姉ちゃん、ねてるんだもん！　だからこんなとこ、おいてったらダメなんだもん！」
辺りに悲しみが満ちる。
あの子が……独りになってしまった事を知るのは、いったいいつだろうか？
お姉さんの友達らしい上級生が、その子をなだめながら、抱き上げるようにして連れていった。
「そしたらルーフェイア、あたしらも向こう行くからね」
「――うん」
シーモアたちが離れて行く。
他の生徒たちも徐々に離れて行って、この辺りに残ったのはあたしと、上級傭兵隊の先輩たちばかりになった。
累々と並ぶ、白い布に包まれた遺体。
風が吹き渡る。
「全員、整列！」
オーバル院長の号令。
ざっと音を立てて、先輩たちが横一直線に綺麗に並ぶ。
あたしの右にはタシュア先輩が、左にはシルファ先輩が並んだ。
「我らが家であるシエラ学院を守るべく、犠牲となった者たちに敬礼！」

ここにいるあたしたちと、向こうへ退避している生徒全員とが、一斉に敬礼した。
そして誰からともなく、呪文の詠唱が始まる。
「時の底にて連なる炎よ、我が命によりて形を取り、うつつの世に姿を現せ……来いっ、サラマンダーっ！」
あたしの召喚呪文がいち早く完成し、ついでタシュア先輩の、そして他の先輩たちの召喚呪文と火炎系魔法とが、次々と放たれた。
天高く炎が舞い上がる。
周囲で焔が踊った。
その中で……遺体が灰になっていく。
「――ナティエス、さよなら」
そっとつぶやく。
こぼれた涙が、小さな音を立ててはぜた。
その時。
――影？
燃え盛る焔の中で、たしかに何かが動いた。
例えて言うなら、炎の中に別の焔があるような……。
「タシュア、あれは……？」
シルファ先輩の言葉で、目の錯覚じゃないことを知る。
そしてみるみるうちに、影は一つの形を取った。
焔をまとった鳳（とり）の形に。

「まさか……？！」

従えることの出来ない、伝説の精霊。焔に身を投じて生まれ変わるという不死鳥。

それが目の前に、現れようとしていた。

鳳が啼く。

喜びと哀しみとが混じった、不思議な声で。

その声が胸に沁みて、またあたしは泣いた。

翼が大きく広がり、焔の色が変わる。

何よりも熱いという、白い焔に。

そして、鳳は羽ばたいた。

風の代わりに焔が舞い上がり、不死鳥が大空へと飛翔する。

――魂を乗せて。

遥かなる高みへ、ナティエスたちが駆け上がって行く……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：７６　追憶

＞Ｔａｓｈａ　Ｓｉｄｅ

目の前に、はるかに広がる海があった。

あの激戦から半月がすぎ、学院生はようやく、ケンディクの町へ出ることを許されている。

町はにぎわっていた。

この国第二の都市ケンディクは、同時に観光都市でもある。春を過ぎて初夏に近くなるこの季節は、町中が花に彩られることもあって、観光客が多いシーズンのひとつだ。

学院生も相当な数がここへ来ているはずだが、町を行きかう人々にまぎれてしまい、姿は見かけなかった。あの惨劇で傷つききった生徒が多いが、今日はきっとどこかの喧騒の中で、少しは笑顔でいるのだろう。

ただ……ここだけは静かだ。

もう二十年近くも前、西と東の大陸を結ぼうと始まった大計画。

だがその夢はうたかたと消えた。

工事に着手して間もなく大戦が始まり、計画は僅か数ヶ月で中止されたのだ。

まるでその悲しみを留めたかのように、この建物と残骸だけは錆びついたまま、今もひっそりとしていた。

大戦は、タシュアにも大きく影響を与えている。それ以外にもこの学院では、あの戦争で孤児となった者も多かった。

遥か先に視線を移す。

海の向こうは――ヴィエン。

タシュアにとっては生まれ故郷だ。
もっとも楽しい思い出はほとんどない。無機質と激戦と喪失が彩る記憶ばかりだ。むしろヴィエンを出てこの学院に保護されてからの方が、よほど人らしい生活だったと言えるだろう。
かつて七人いた弟と妹も、すべて死んだ。残ったのは自分ひとりだ。
自分にとって、そして妹や弟たちにとって、ヴィエンで過ごした日々はなんだったのだろうか？
答えは掴めなかった。たしかに胸のうちにあるのだが、上手く形にならない。
だが……それがあったからこそ、今の自分がいるのもたしかだ。
（結局は自分次第なのでしょうが……）
たとえ恵まれた環境で育ったからといって、その当人にとって満足のいく人生になるとは限らないだろう。
逆に自分は、嘆く気はない。
そういうものなのだ。
と、後ろに気配を感じた。
「――シルファ、何か用ですか？」
声をかけようかと迷っているパートナーに、振り向いてこちらから話しかける。
シルファがほっとした表情になった。
「その、買出しに行こうと……」
遠慮しながらそう聞いてくる。

優しいシルファのことだ。考え事の邪魔をしたくないと、ためらっていたのだろう。
その彼女に、タシュアは微笑を向けた。
「かまいませんよ。別になにかしていたわけでもありませんしね。――何を買うのですか？」
シルファの表情が明るくなる。
「せっかくだから……ケーキの材料を……」
「では、今日はおいしいおやつが食べられますね。たくさん買うのでしょう？　荷物を持ちますよ」
「すまない」

そう言いながらも嬉しそうに、パートナーが歩き出す。
連れ立って夢の残骸をあとにし、店めぐりになった。
シルファは本当に嬉しそうだった。あれもこれもと手に取り、次々と荷物が増えていく。
「まだ買うのですか？」
ついそう言うほど、シルファは買いこんでいた。
「あ、すまない。もうこれで終わりにするから」
「いいですよ、慌てなくて。久しぶりですからね、いろいろ切らしているのでしょう？」
「よく……分かるな」

彼女は驚いたが、買っているものを見れば一目瞭然だ。小麦粉のような材料もさることながら、お菓子作りに使う調味料（？）の数が、かなり多いのだから。
それからもう少し買って、やっとシルファは学院へ戻ると言い出した。気の済むまで買い物をして、満足げな表情をしている。

それを見るタシュアも満ち足りていた。
故郷を出て手にしたもの……それがここにある。
そしてこれがあればこそ、自分はここまで強くなれたのだ。

Episode：77

「タシュア……そんなにおなかが、空いていたのか？」
シルファが唐突なことを言い出す。

「なんですか、急に」
「いや、なんだか嬉しそうだから……だから、その……」
必死に言い繕うパートナーの姿が、可笑しかった。

「そういうわけではありませんが……そうですね、そういうことにしておきましょうか」
「――？」
シルファが怪訝そうな顔になったが、それ以上タシュアは言わなかった。

「早く戻りましょう。これだけ作るとなったら、けっこう時間がかかるのでしょう？」
「そうだな」

シルファもそれ以上は追求しない。訊いてもタシュアが答えないことを、彼女はよく分かっている。
学院までの船に乗ろうと、波止場へ向かった。
その途中で、シーモアとミルの姿を認める。

「タシュア先輩！」

意外にも二人が駆け寄ってきた。
ルーフェイアがいない時にこの二人がわざわざタシュアの元へ来るのは、珍しい話だ。

「何か用ですか」
シルファの時とは一転、表情を感じさせない声。シーモアが言葉に詰まる。
もっともミルは、平気だったようだ。
「えっとですねぇ、ナティエスのことなんです」
シルファがはっとして何か言いかけたが、タシュアがそれを止める。
「彼女のことで、何かあったのですか」
シーモアとミルが顔を見合わせた。
そして。
「ありがとうございました」
二人が頭を下げる。
「――お礼を言われるようなことを、した覚えはありませんが」
「けど……ナティエスが死ぬ時に、そばにいてくれたんですよね？」
タシュアの言葉に、シーモアが確認するような調子で尋ねた。
「たしかにその時傍にいましたが、何か？」
「その……だから、ありがとうございました。
死ぬ間際にあの子がひとりじゃなかったって聞いて、あたしすごくほっとしたんです」
「……いえ、私の方こそすみません。
あのような苦しみを、彼女に与えてしまいました」
「それは……戦争だから……」
そのまま全員が沈黙する。

シーモアの言葉が、すべてを言い表しているのかもしれなかった。
とつぜん学院を襲った狂気。
それにどれほどのものが奪われただろう？
戦場で育ったタシュアは、その狂気を肌で知っている。だが知っていたからと言って、納得できるわけではない。

「――すみません、ヘンなこと言って。じゃぁ失礼しますね」

シーモアが踵を返す。
その後輩にシルファが声をかけた。

「シーモア、その荷物は？」
「え？　あ、やっぱ先輩分かりましたか。
町へ出られたから、ナティエスにケーキ作ってやろうと思って。
先輩に教えてもらって、あたしもどうにか覚えましたし」

苦笑しながら、彼女が荷物をちょっと持ち上げてみせる。

「上手く行くかどうか、てんで自信はないんですけど」
「それなら……また一緒に、作らないか？」

静かな声でシルファが言った。

「いいんですか？」
「ああ。私も作ろうと思って、買出しに出たところだ。
――タシュア、かまわないだろう？」
「ええ」

断る理由など、あるわけもない。

「そしたらさ、ルーフェイアも呼んでこようよ～。仲間はずれ、可哀想だもん！」
珍しくミルがまともなことを言った。
「また泣いちまいそうだけど、そうだね、呼んでこようか。
さっきたしかあの子、埠頭のあたりにいたっけか？」
「うん」
すぐ戻りますと言い残して、後輩たちが駆け出して行った。

Episode：78

＞Ｒｕｆｅｉｒ

ケンディクの埠頭の先で、あたしはぼんやりと座りこんでいた。太陽が水面に反射して、まぶしく照り返している。

あの激戦から半月ほどが過ぎた。

でもまだ、あたしの相部屋のベッドは空っぽのままだ。

それどころか最初の葬送の後も、重傷者の死亡が相次いで、訃報の消える日がなかった。

あの翌日には惨状を聞いたケンディクの町が、原則を破って負傷者の受け入れを決めてくれたのだけど、焼け石に水に近かった。船着場が使えなくて、重傷者の搬送がすぐに出来なかったからだ。

これではダメだとあちこちでみんなが掛け合ってくれて、上陸艇を持つ海軍の派遣が決まったのが、激戦の翌々日。やっと来たのは三日目、合同葬儀のあとだった。

けどそれまでに、瀕死の重傷者はみんな死んでしまって……もう少しマシだった生徒も、かなりの数が悪化した。

上陸した軍の人たちも声を失うほどで、それこそ限界以上に働いて搬送や治療に当たってくれたけど、やっぱり三日のブランクは大きかった。あのときの重傷者は、けっきょくほとんどが亡くなっている。

ただようやくここへ来て、それが落ちつき始めていた。

どうにか生命の危機を乗り越えた生徒たちは、次々快方に向かい始めて、これ以上の死者は出ずにすみそうだ。

どうにか無事だった生徒たちも、しばらくぶりに町へ出させてもらって、みんな羽を伸ばしている。

そして……あたしも。

じつを言うと、ここへ来るまでは不安だった。
あんなことがあったあとで町へ行っても、前と同じように見えるか、自信がなかったからだ。本当は町並みも海も何も変わってないはずなのに、違って見えそうで怖かった。
けど今、こうしてここへ来てみて、やっとほっとした。

あたしの瞳と同じ碧の、透き通った海。
水平線を渡る、銀色に輝く雲。
埠頭から坂へと、駆け上がる風。
何もかも、前と同じ……。
毎日ナティエスの部屋を見るたびに泣いているけれど、ここにいると少しだけ、元気になれる気がする。

「――よ」
「イマド」
どこからともなくイマドが現れた。

「ここは……変わんねぇな」
あたしの隣へ腰掛けながら、彼が言う。
「うん」
そのまましばらく、二人でただ海をながめる。

「にしてもあの戦い、なんだったんだろな」
ぽつりとイマドが言った。
「なんだったんだろうね……」
あたしもそうとしか答えようがなかった。

――けっきょく、誰が悪いんだろう？

良くも悪くも優秀な卒業生を出している学院は、よその国や軍からジャマに思われることはあるって言う。
けどそんなこと言われたって、みんな困るだけだ。誰も引き取ってくれないからここへ来たのだし、だいいち親を亡くした子の大半は、ずっと続く戦乱の被災者だ。
でもロデスティオの傭兵隊も、悪くない。彼らは命令に従っただけだ。

考えても考えても、誰が悪いのか分からなかった。
ただたしかなのは、もうナティエスたちが戻らないということだけだ。

「やりなおせたら、いいのに」
「そうだな……」

もし願いが叶うなら、そうしてほしかった。
けどそれはない。
すべては一度きりだ。
ありとあらゆる瞬間にただ一度の時間があり、ただ一度の選択のチャンスがある。
それが重なって……時は流れていくのだろう。

――でもその別れ道が、こんなことになるなんて。

どうしようもないのは分かっている。
分かっているから、涙がこぼれた。

「ごめん、イマド。あたし、最近ダメで……」
「しょうがねぇって。あんなことがあったんだからよ」

Episode：79

好きなだけ泣いてろと、イマドが言ってくれる。

あの日と変わらない空。
あの日と変わらない風。
なのにたくさんの命が、あまりにも簡単に消えてしまって……。

泣いても泣いても泣き足りなかった。
誰も望んでなんかいなかったのに、どうしてこんなことになっちゃったんだろう？
敵だったロデスティオの傭兵だって、きっと死にたくなんてなかったはずなのに。

それなのにどうして……。

「――あ、ありゃシーモアか？　お前探しにきたみてぇだな」
「え？」
イマドの言葉にびっくりして顔を上げる。

涙をふいた拍子に、胸のペンダントが揺れた。タシュア先輩から渡された、ナティエスの形見だ。
このペンダント、シーモアに渡そうとしたのだけれど、彼女は受け取らなかった。
ただその代わりにシーモアは、ナティエスのピアスを着けている。
「こうしてる間にもナティエスみたいな孤児、できてるんだろうな……」
ふっと思った言葉が口をついた。

「たぶんな」
この空だけ見てたら、戦争なんてどこかの作り話にしか思えない。
でも間違いなく、今もどこかで続いている。
「だったらあたし、やめるわけにいかない……」
「戦うのをか？」
そう尋ねたイマドに、あたしは答えた。
「……あたしの家って、親戚とか兄弟どうしで……戦うこと、あるの」
「らしいな」
普通じゃ信じられないだろうけど、代々傭兵を続けているあたしの家じゃ、この手の話はけっこう多い。
「そういうの、すごく嫌。それになにより、戦うのも嫌い。でも……」
また涙が、ぽつりと膝におちる。
「望んでないのに戦いを……仕掛けられること、あるんだね。そしてあたしには、それを退ける力がある……」
自分のいちばん嫌な部分。
なによりも忌まわしい部分。
けど皮肉にもそれは、学院を守る力になった。
「誰もが戦いを嫌ってるなら、戦争なんておこらない。でも、そうじゃないから……」
本当は止める術があるのかもしれない。
ただそれはいつも難しくて、その時には気付かないことのほうが

多いんだろう。
「だからあたし、やめない。
この手で、この力で、命を守っていきたい」
大切な人たちが、いつ命を危険に晒されるか分からない。
それなら誰も戦おうとしなくなるまで、あたしは戦おうと思う。
ひとりでも犠牲が少なくなるように、嵐に立ち向かおうと思う。
「それが……いちばんいいとは、思えないけど。
でもあたし、たしかに守れた。だから……」
今までのあたしは、意味もなく戦っていただけだった。
それのどれほど苦しかったことか。
もちろん大義名分が出来たからといって人殺しが許されるわけじゃないだろう。ただそれでも、無意味に刃を振るうようりはマシな気がする。
「お前、強いな」
「ううん。
弱いから――理由を欲しがるだけ」
そう言うとイマドが笑った。
今まで見たことのない、不思議な笑顔。
「それを知ってるやつが、強いって言うんじゃねぇのか？
まぁいいや。シーモアとミルが手ぇ振ってるぜ」
「あ、ほんとだ……」
こっちへおいでというように二人が手を振っている。

「行くか？」
「うん」

歩き出すと、また胸のペンダントが揺れた。
――孤児だったナティエスの形見。
いまごろ彼女、両親といっしょにいるんだろうか？
わからないけどそう思った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：８０　希望

＞Ｍｕａｋａ　Ｓｉｄｅ

歓声が上がる。

ケンディク一の呼び声が高いレマウ海岸は、学院の生徒たちで賑わっていた。毎年恒例の、学院生を招いての海開きだ。

上は最年長の十九歳から下は最年少の六歳まで、みんな嬉しそうだ。

「やっと戻ってきましたねぇ」

「そうですな」

医師のムアカとオーバル学院長が、ほっとした笑顔でその様子を眺めていた。

あの戦いから二ヶ月あまり。今学院は、平穏を取り戻している。

「それ返してよぉ！」

「ヤだね～」

拾った綺麗な貝を取りっこしている低学年を、上級生が嗜めた。

「ほら、返してあげなさいよ。可哀想でしょ」

「う～」

以前なら夏になれば必ず見られた、ありふれた光景。

それが今は、なによりも大切に思える。

死者は最終的に、軽く三桁を超えた。他にも命はどうやら助かっ

たものの、残念ながら障害が残ったという生徒が少なくない。
それ以外にもこのとつぜんの惨劇で、子供たちは誰もが精神的にひどく傷ついてしまった。あの激戦が奪っていったものは、あまりにも大きかったのだ。

ただそれも……今少しづつ、癒されようとしている。
馴染んだ大地と海とが、子供たちを優しく抱きとめている。
もちろん時間はかかるだろう。だが道がないわけではない。

親を亡くした子供たちが集まるこの学院では、生徒たちの絆が強い。今回も兄や姉を亡くした小さな子を上級生が部屋へ引き取ったり、落ちこんだ友人を慰めようと自主的に部屋を引っ越した生徒が多かった。

自分がかつて感じた痛みだからこそ、分かってやれる。
あの悲しみを知っているからこそ、手を差し伸べられる。
そうやって互いに支え合いながら立ちあがって、きっと乗り越えていけるはずだ。

じつを言えば最初にこの学院勤務の話を聞いたとき、ムアカはとんでもないと思った。
当時の彼女は他国のとある大病院の小児科医だったのだが、孤児を集めて傭兵に仕立てるなど、虐待としか思えなかったのだ。
だが話をもってきたオーバル――父親の親友であの頃は士官学校の教官――の言葉を聞いて、考えが変わった。
「あの子たちに、生き抜く力を与えてやりたい」彼はあの時そう言ったのだ。

今もそうだが、あの頃も戦乱は絶えなかった。当然真っ先に犠牲になるのは子供たちで、ムアカが勤務していた病院にもよく重傷の

子が運ばれてきたものだ。
それに輪をかけて、親をなくした子の行く末は楽ではない。
「徴兵されようものなら、どこへやられるか分かりませんからね」
オーバルの言葉は、彼女の心に深く刺さった。
たしかに庇護のない彼らは、大人によっていいようにされてしまうだろう。かといって帰る場所もない以上、嫌でも従うしかない。
そこまで考えた時、彼女の心は決まった。

いちばんやらなくてはならないのは戦争をなくすことなのは、ムアカも百も承知だ。
――ただそれはいつになる？
少なくとも今日明日の話ではない。
理想ではあるが、一方で現実というものもあるのだ。
なにもかも奪われて泣く子供たちに、ただ黙って次も奪われていろなど、誰が言えるだろうか？
その中で学院は、親を亡くした子供たちに「道を切り拓く力」を与えるだろう。
この力を忌む者は多いかもしれない。だがこの紛争ばかりの世の中で生き延びるには、ある意味で必要なものだ。
――無駄に殺すことだけは避けてほしいが。

もっともそれも、思うほどには心配ないだろう。
奪われる辛さは、この子たちがいちばんよく知っている。
だからこそ今回も寄り添うようにして手を繋いで、立ち直ろうとしているのだ。
「――もっと強くなるわ、あの子たちは」

誰にともなく言う。
波の音が響いた。
遥かなる昔から変わらない音。
幾万の過去から幾万の未来へ、すべてを包みながらこの音は響くのだろう。
そう思いながら海を見るムアカのところへ、生徒たちが駆けてくる。

「先生、指切っちゃった〜！」
「あらあら。ほら、見せてごらんなさい」
そう言って子供の手を取ると、たしかにかなりひどく切っている。
「まったくしょうがないわねぇ。あれほど気をつけるように、言ったじゃないの」
言いながらムアカは救急箱から薬や判創膏を取り出して、手際よく手当てを始めた。
「――おや？　彼らまた遊泳禁止のほうへ行ってますね。ちょっと叱ってきます」
くつろいでいたオーバルが急いで出ていく。

毎年見られた、いつもの光景。
そう。
やっと……日常が帰ってきたのだ。

変わらない空。
変わらない海。

それがどれほど、みんなの瞳に懐かしく映ったことか。

そして――夏が終わる頃にはきっと、みんな少しづつ元気になるだろう。
この優しい光景に見守られながら……。

Ｆｉｎ

◇あとがき◇
長い話を最後まで、本当にありがとうございました。
現在第３作「抱えきれぬ想い」を連載中です。リンクを貼っておきますので、読んでいただけたら嬉しいです。なお、毎日“夜７時”前後の更新です。
感想・評価大歓迎です。お気軽にどうぞ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4491d/

戦いの果てに　ルーフェイア・シリーズ

2011年2月6日07時51分発行